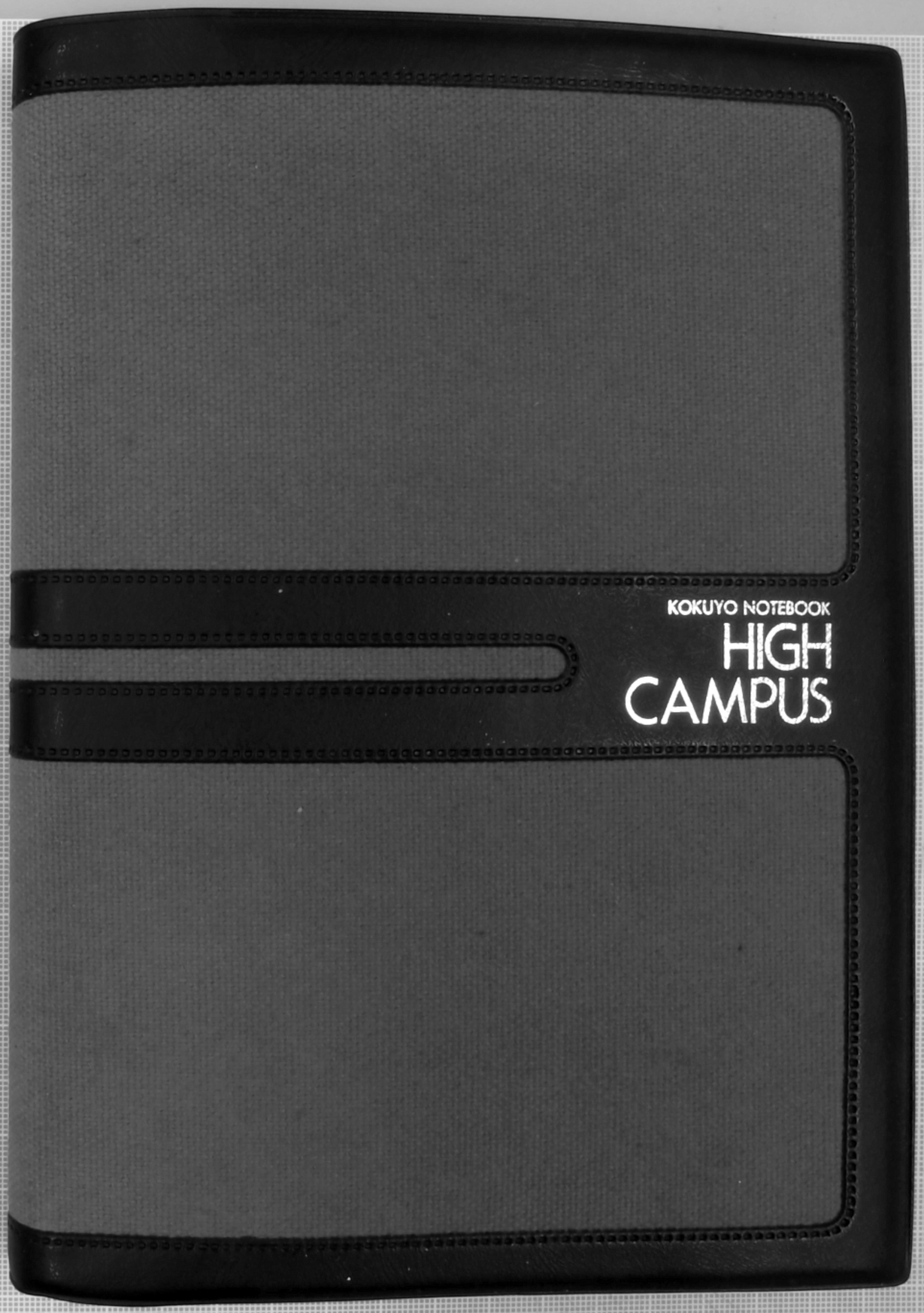

KOKUYO NOTEBOOK
HIGH
CAMPUS

PAGE	DESCRIPTION

本製品の中紙は、コクヨノート３号(148㎜×210㎜)と同一サイズです。
なお、本製品専用の替紙は用意しておりませんので御了承願います。

NO.

DATE

广史地理学

1999

中田荣一

NO.

DATE

厂史地理学 目次

○ 参考文献 …… 3
一. 厂史地理学の課題と方法
1. 厂史と地理 …… 7
2. 厂史地理学史 …… 8
○ 地理的史観の展開 …… 18
○ 近代地理学の成立と発展 …… 20
○ 厂史地理学の呼称・変遷 …… 48
○ 厂史地理学の諸分野 …… 52
3. 先史地理学の諸問題 …… 59
4. 古代文明地域の形成 …… 64
5 ヨーロッパの古代の開発 …… 73
6 古代日本の開発 …… 79
7. ヨーロッパ中世の開発 …… 89
8. 中国の開発 …… 94
9. 中世・日本の開発 …… 100
10 近世初頭の大空発見の時代と新大陸 …… 107
11. 近世におけるヨーロッパ諸国の確立 …… 123
12. 中国の村落と都市 …… 134
13. 近世における日本の開発 …… 147
14 北海道の開発 …… 167

× 第32集は「変革期の厂史地理」

NO. 1

DATE

厂史地理学

○ 参考文献

○ 叢書, 特別研究その他

○ 藤岡謙二郎・矢守一彦編; 人文地理ゼミナール「厂史地理」大明堂 昭42.

○ 「厂史地理講座」全3巻 朝倉書店 昭34 (第1巻 総論・ヨーロッパ, 第2巻 アジア・新大陸, 第3巻 日本,) 織田武雄・森鹿三編

○ 藤岡謙二郎編; 「朝倉地理学講座 7. 厂史地理学」朝倉書店 昭42.

○ 藤岡謙二郎編; 「日本厂史地理学総説」全4巻(古代・近代) 吉川弘文館 昭52.

○ 浅香幸雄編「日本の厂史地理」大明堂 昭41

○ 藤岡謙二郎・山崎謹哉・足利健亮編「日本厂史地理用語辞典」柏書房 昭56

○ 厂史地理学会「厂史地理学紀要」1~32集 (昭和34年刊の
× 日本厂史地理学研究会「年報と方法」から第32集まで, 第8集からは厂史地理学会刊」となる. (「明治後期の厂史地理」から「変革期の厂史地理」まで. 古今書院刊

○ 大明堂より刊行. 足利健亮「日本古代地理研究」, 藤岡謙二郎先生退官記念事業会編「厂史地理研究と都市研究」, 小野忠熙「日本考古地理学研究」, 服部昌之「律令国家の厂史地理学的研究」, 木原均行「水力開発に利用の厂史地理」, 藤岡・服部「厂史地理学の群像」, 小林健太郎「戦国城下町の研究」,

○ 紫田芳夫「地割の厂史地理学的研究」古今書院

○ 木下良編「古代を探る古代道路」吉川弘文館 平成8.

○ 〃 著; 「国府」教育社 1985, 同著「道と馬尺」大明社 1998.

古典

○ 厂史学研究会編「厂史地理学」四海書房 昭13.

○ G. イースト著, 小原敬士訳「世界史の自然的基礎」生活社 昭15.
○ 〃 鈴木良訳「地中海」春秋社書店 昭16

○方法論その他
○ 菊地利夫;「新訂 歴史地理学方法論」大明堂 昭62
○ 藤岡謙二郎;「景観変遷の歴史地理学的研究」大明堂 昭53
○ 渡辺光;「環境論・農論」環境情報科学センター (1977)

歴史地理学

一. 歴史地理学の課題と方法.

1. 歴史と地理

○ 論者-高山岩男「歴史の地理性と地理の歴史性」(「思想」221号 昭和15年10月号 特集「国土の問題」)(後に高山岩男著「世界史の哲学」に集録)(高山氏は平成5年7月5日逝去)

○「地歴」という言葉がある。地理と歴史は切り離して考えることはできないものとされる。地理は世界の事象, 物事を空間的に, 歴史は時間的にみ, 考え, この両者があい俟って世界を十分に, 完全にみ考えることができるとされる。いかなる世界の事象, 現象もすべてこの両方の構造を併せもっている。どちらか一つだけでは物事をとらえることも片手落ちであり, 不十分, 不完全なものであるとされる。学校に於ける教科目もかくの両方のみ方, 考え方が必要であるとされる。

しかし, 歴史性は時間性に基きであろうか。如何に時間が経過しても, それだけで歴史があるとは云えない。歴史とは単に客観的な生起の現象ではない。そこには人間の主体的行動性がある。人間主体の自発的意志や自由な決断に基く行動が歴史の基礎を形成している。単なる時間は自然界にも在し, 天体にも無生物にも生物にも時間は支配し, 運動や変化や生滅はあるが, 歴史は存在しているとは云えない。歴史はひとり人間にのみ在し, この人間的なものは自発的精神である。そしてこの自発的精神は理想主義的精神を糸口としてはじめて成立するものである。理想主義的精神のないところに歴史はない。

しかし人間は動物の一種で, 精神的であるとともに身体的である。歴史性の本質たる主体的行動には精神的自発性の外に身体性に関わるものがある。人間の自発的精神と「空間性」があってはじめて人間の主体的行動が成立する。空間性とは一般に「地理性」に外ならない。

NO 4

DATE

かくて歴史は常に地理との行為的綜合に成立すると考えられる。それは単に歴史が地域的空間の内部で、あるいは地球の表面で行われるということのみでなく、地理的環境に対する主体的精神の行動連関に成立することを意味する。がらこ歴史性は時間性と共に空間性をもその必須条件とするものである。歴史性は地理性と綜合せられてのみ現実の歴史性となることができる。地域の特殊性とそれに基く政治・経済・文化の特殊性なくしては世界史は成立せず、また成立すべき深い根拠はなしない。若し地球の表面が或は所謂生活圏が、所によって異なる地理的特殊性を有しないならば、凡そ世界史というものの成立する余地はないであろう。

地理性は歴史性にとって有っても無くてもよいような偶然的非本質的のものではない。地理性は歴史性を構成する必然的本質的の契機である。世界は常に質的に異なれる諸国、諸世界の綜合連関に成立するものであって、その根柢には所によって異なる地理的特殊性の原理が常に存している。地理的特殊性は世界史が成立するために必然的本質的な必須条件である。それ故、学問的問題は、この関係が有るか無いかを論証するところに存するのではない。歴史哲学の問題はこの関係がいかなる関係であるかを精密且つ具体に捉えるところにあるのである。

○歴史や文化に働く風土地理の要素を軽大視すれば当然その思想は風土的決定論乃至地理的決定論に帰着する傾向に傾く。この思想は理想主義とは反対に、現実の事実の客観性のみを重視して、時間性をば無視する思想である。いわば歴史の地理性のみを捉えて、地理の歴史性をお忘する思想である。即ち必要条件のみを捉えて十分条件を逸している。地理的環境の示す自然的諸条件は人間の生活行動を必然的に決定するものではなく、単に生活行動に対する可能的条件を与示するものにすぎない。

28

NO 5

DATE

この可能的条件をいかに利用して現実化するかは、地理的環境の対応主体たる人間の自発的精神の働きに係っている。地理性を歴史性の内実たらしめ、地理性と歴史性との綜合を成就するものは、人間の自発的精神であると云わなければならない。ここに地理の歴史性の成立する根拠がある。地理学は自然の人間に対する影響とか、土地の歴史に及ぼす影響というような影響を第一義的に問題とすべきではない。問題は"影響"ということにあるのではなく、"関係"ということにある。地理学は法則科学ではない。所によってそれぞれ異なる個性をもつ土地と人間との交渉、しかも常に流動的な行動的交渉をもっている現象に法則科学は成立しないのである。

ラッツェル学派の決定論に対して可能論を主張するフランス地理学、特にフェブールの所謂地理的可能論の思想に注目する必要がある。(この思想はP.V. de l'Blacheによって建設されたものがあるといわれるが、地理的決定論に対するこの思想の明快な対決と規定はフェブールの功業に帰せられる。)風土的地理的条件が歴史を決定するものであるならば、凡そ歴史的変遷というものの成立する余地はなしない。我々人間は自由意志の主体であり、自発的行動の主体であることは、一点の疑いも容れぬ極めて明瞭な事実である。近代の自然観は周知のように、自然を以て必然的法則の体系と考え、自然には決定論的な因果法則が支配し、自由の入り込むものはないものと考える。この思想は自然を人間主体との対応から解放し、自然を単に認識の対象とする限り否定出来ない正しさをもっている。このように自然を自由意志の対象とするときは全く事情は一変する。自由意志の対象は一般に可能性である。この可能性の体系を現実化するのが行為に外ならない。行為によって可能性は現実性に転ずる。フェブールの可能論の思想は、地理的現象における人間の自発的能動性の領域を認識し、いわゆる、一種の偶然的非決定論に傾くのではないかと思う。

28

○自然条件の直接的制限は科学の進歩につれて益々排除されて少くであろう。しかし、自然条件の存せぬところに人間の生産や労力がかかわることは絶対に不可能である。世界史の成立する根柢に土地的相違が必須条件として存する。我には自然の可能性の全体系は決定的のものであり、主体による可能性の選択利用はこの限界内部に於てのみ成立すると考える外なりであろう。人間の自由が入り了史が容れられるのはこの限界の内部に於てのみである。この選択利用の仕方は全く相対的のものであり、技術文明の発達如何に依存し、逆に技術文明の発達はまた選択利用の仕方の如何に依存する。かくてこの可能性の全体系は地域によってそれぞれ相違し、而もこの相違は人為を離れて自然に決定せられているのである。自由なのは如何に選ぶかの仕方であり、選ばれたものに対する活動の仕方である。この自然の側面に於ける地域的特殊性と人間の側面における活動的特殊性が綜合せられて、ここに社会、経済、文化等の唯一的な地域的類型性が成立するのである。

所謂地理的可能論の理説はなお一般的に了史性を前提し、地理の了史性の重要を強調するに急で、了史そのものの地理性の重要を省みない気に未だ無反省なところを蔵していると思われる。地理の了史性の本源を無視はやがて了史の地理性を無視する結果に導いてゆく。地理の了史性と了史の地理性とは相予想し、相補足するものでなければならぬ。

このようにして地理的なるものは世界史の構成要素として既に世界了史性の内部にある。単になまの天然の自然というものは何処にもない。自然ということも現実に於ては了史的のものである。地理性は非了史的な自然として、常に世界史の自然的基体という意味を有して存続している。私の見るところでは、可能論は決定論に反対の立場に立つ結果、大体に於て、非決定論的傾向論に帰着するもののようである。然るにこれに対し、環境と主体との関係に一種の積極的な秩

序の原理を認めたいと思う。私はここに、地理的環境と精神的主体との間に「呼応的合致」とも称すべき関係が存すると思う。このような主体の要求と自然の形との間も呼応するが少し合致するところ、或は逆に自然の客観的な要求と主体の自由とが互に呼応する如く調和するところ、そこに唯一的な現実の形態が成立するのである。このような呼応的合致或は呼応的調和の成立するところに地理的可能性は地理的現実となり、意識的可能態は精神的現実となり、精神と自然の統一は動かし得ない唯一的な了史性を獲てくると思われる。

この呼応的合致には常に人間の自発的精神が参与している。地理的現実も文化の形態も決して決定論的に定まるようなものではなく、可能論に人間精神の能動的な働きに依るものである。呼応的合致の境は現実であると同時にまた理想の象徴をもつものであると思う。所謂天人合一の真の意味はこのような自然と人間との呼応的合致に外ならないと思う。天人合一は単に過去の了史解釈の理論的原理だけでなく、同時に現在における了史建設の実践的原理である。了史性そのものが地理性との結合にのみ成立するものである。了史の地理性と地理の了史性との相互に媒介し合うところに世界史が発生する。了史と地理との綜合の境からのみ世界史は成立する。その綜合の把握にはその都度、常に了史的世界の内面的要求に発した動かし得ない天人合一が存している。世界史はこのような境地に於ける創造的建設の一回的連続である。

2. 了史地理学史

○了史地理学は地理学の一分野である。それは地理学の発達過程のうちに形成されてきたものである。いっぽう、了史学の発達過程に於いて、所謂「地理的史観」が開拓され、了史学の一つの思想分野として形成されてきた。いっぽうは地理学研究の従属分野として地

NO. 8

DATE

(注) ① ギリシャ本土，その植民地，黒海よりキムメリアーのボスポロス，地中海ではシチリア，キレーネ，テュロス，さらにエジプトではスーサにまで達したといわれ，又アスュリアやポントス，小アジアにまで足跡を印した。

② Herodotusの著書は有名な「歴史」(Historiae)である。この著書では，地中海，黒海沿岸に面するヨーロッパ，スキタイ，メディア及びリビア(アフリカ)諸国の歴史を記すと共に，各地の自然や住民についても多くの地誌的記述を行っており，彼は「歴史の父」とよばれるとともに「地理学の父」ともそえるである。

理学の中で発達・成長し，地理学研究にとっては欠くことのできない分野として多くの研究者を有つに到りたし，いつ頃うは歴史学の中から生まれ，成長してきたが，観念，教文学の上から一つの歴史学における思想分野として注目されたが研究分野として発展するにはいたらず，結局は地理学の中に研究の主力が置かれ，歴史学では一つの思想として注目されたに過ぎぬ程度にとどまった。特に歴史学の補助的観念として，例えば文献資料(史料)による地名の考証・経度にとどまりせいぜい地域史の基礎として扱われるくらいであった。むしろ歴史学の本道から逸脱したものとして，あまり重視されない状態であった。歴史学の基礎としては，歴史学の未発達な時代，古代ギリシャの歴史家Herodotus(BC484～425)がペルシャに対するギリシャ民族の勝利の歴史を綴らんとした時，その資料として叙事詩や地名の記録，あるいは口碑伝説に頼らざるを得なかった当時，実証主義者であった彼はその歴史の演じられた舞台ともいうべき諸地域を自ら実地踏査を行うことによって補い，その目的を果そうとしたといわれる。紀元前484年頃故郷を出た彼は，

× 当時ギリシャ人の開いた①全領域に亘って旅行を続け，ギリシャ本土およびその植民地は勿論，黒海，地中海，エジプト，ペルシャなど広い地域にその足跡を印した。(歴史を究明するために，その歴史の展開した土地・地域の実情を知ること。地理的史観ならずとも，歴史の展開した土地の実情を知ることは歴史の理解にとって必要なこと。)

○ 地理的史観の展開。

歴史の演じられる舞台としての土地，その地理と知ることなくしては歴史も十分な理解に達することが出来ないとは，実証史家Herodotusに限らず多くの歴史家の見解であったことは人の知るとおりである。いわゆる地理的史観は近代の産物ではなく，「古代哲学と共に古代歴史学が神秘主義よりして自らを解放せんとした時，ギリシャに於て一般の唯物論と共に地理的唯物論，すなわち地理的史観が開拓せられたのである。」(羽仁五郎「史学における素朴唯物論－地理的史観」より)

③ 神秘主義，歴史は神によって進められるとの見解。

③ × 地理的環境論(地理的史観)の思想的源は古代文明地域の星在修行にみられるといわれる。文献上ではっきり残されているのは下記のHippocratesが古いとされる。

9

DATE

(「史学雑誌」41編4号，昭和5年4月)

× ○ 人間の行動による歴史は，すべて地球上，土地において展開する。歴史は土地の構造と何らかの関係があるにちがいない。また，人間はすべて同じ生のであるとする場合，土地によって異なる生活，社会，文化が形成されるのは土地が異なるから，異なる土地の故であるにちがいない。ツキディデス(Thucydides)はその著「ペロポネソス戦役の歴史」において，それにふれ，Hippocratesは「空気・水及び土地(場所)」において言及し，それはさらにStrabonの地理学にも反映した。

・Thucydides．BC5世紀頃．その著「Peloponnesos戦役の歴史」第1巻において古代ギリシャの諸部族の特質と運命とを，彼らの占有した土地の性質及びその地理的位置により解明している。即ち，海上貿易に適した土地，農耕に適した土地，また牧畜に適した土地などについて述べている。

・Aristoteles(BC384～322)もまた，国の地味，広さ，位置及び都市の位置などにつき，倫理的，政治的，及び経済的立場から詳細に考察し，さらに市民の自然的素質を論ずるに当り，気候と人間の性質との関係について論及している。

・Hippocrates(BC460～375頃)の説(ヒポクラテス全書－(BC450～350)の「空気・水・土地(場所)」(現在の疾病地理的な内容のもので，ヒポクラテスは医学の祖祖ともいわれる。)彼はかつてスキタイ(Scythia)地方(古時，ギリシャの植民地があったところで，今の南ロシアの辺りにあたる。)に旅行し，その地の人々を詳かに観察，ギリシャ人と比較してその相異に心を打たれた結果，その理由と分析とし，いわゆる「気候環境学説」を考案した。それ第8章で「その主要なる決定要素は四季の変遷である。南方諸国の四季の変化のないそこの最熱は，その地の民族を非戦斗的なものとし，優柔不断(だらしがなく，物事にすじおれる)にしたが，それ代りに思索的観念的考察の習慣を与え，また精神的方面において偉大な意味を

NO. 10

DATE

④ p.11 ⑧ 西ヨーロッパの中世にあっては古代ギリシャ・ローマ時代の数のような客観的合理的思想は，キリスト教的世界観のもとで動をひそめたが，なだイスラム圏にあっては史家の Ibun Khaldun (1322～1405) は遊牧社会と農耕社会とを比較し，前者の団結と団結に対し，豊饒による安逸，堕落のため，前者の優越性を指したと論じた。

もつ業績を為しとげさせた。これに対し北方の諸国では，その地の住民は科学的探究力や芸術的活動に必要なところの精神的落ち着きと沈着さを得ることはできないが，その代わりに外部に対する争中的本能は絶えず眠ることがない。総じて常識にもギリシャ人はこの二つの相違なる地方の中間の地方に居住しているので，彼らは南の方からはかの思惟的精神を，そして北方からはかの活動的精神をとってこれを併わせもつことができ，両者のいずれの欠点をうけることがなく，むしろ長所のみをとり入れることができるのである。」と説いた。元来地理的環境論は地誌的知識を基盤とする地域における現象の合法則的観察から出発し，発展したものであり，ゆえに特定地域に普遍的な現象，事象間の一般的関係の把握へと進んだものであった。ヒポクラテスはスキタイへの旅行の途次，あるいは行先地において得た地誌的な知識がその基盤となったものである。

⑭ 今日，Montesquieu の地理的環境論をみると，極めて単純素朴なものであるが，これは一つにはその地誌的知識が地域的に限られたものであったことがあげられる。今日のように世界の諸地域についてのみならず，深い地誌的知識をもち合わせていたならば，斯のような素朴で単純な環境論に終止しなかったことと思われる。このことは，地理的環境論の精緻さは，地誌的知識の拡大充実によって高くなるともいえる。勿論そこには，地誌的知識の拡大充実と共に，人間に関する認識の深まり，自然に対する知識の深化も必要であるが，これらもまた，地誌的知識の拡大充実に伴なうものであることを考えうれねばならぬ。

• Strabon (BC 68～AD 21 頃) Strabon の歴史を著わす。彼の「地理書」17巻は3～17巻がスペイン，ゴール，ブリテン，イタリア，北欧，東欧，ギリシャ，アジア一般と，極東，小アジア，インド，

⑤ × pp. 273～192，アレサンドリアのムセイオンの図書館長，飯尾都人訳『ギリシア・ローマ地誌』I・II 龍渓書舎，"Geographia" の Geography の語源は彼の著作 "Geographika" による。

DATE

ペルシア，メソポタミア，パレスチナ，アラビア，アフリカなどの地誌。

⑤× 根本的には Eratosthenes による。数理地理学，総地理，そして地誌の型。地誌の記述にその歴史的傾向を示す側面に対し，古代最大の地理学者ともいわれる。彼は地理学は哲学者の仕事であるとする。1～2では地理学についての思想と方法が記されている。17巻全巻が完全に残っているのが魅力。(彼以前の人達からの引用が多いのが難点である。)

⑧× ○ このような自然的地理的基底から歴史を考察しようとする立場は，以上の例にとどまらず，フランス革命前期の啓蒙主義者たちによってさらに踏襲され，Bodin はその名著「国家論」において私にふれ，Montesquieu は「法の精神」においてこの問題を論じアジアとヨーロッパの歴史を比較し，アジアの無力，欧州の強力，アジアの課展性，欧州の自由はその地理的環境殊に気候や地形によってもたらされるさまざまな性格をもつ民族の対峙態に由来するものであると考えた。しかし，人類の歴史を全般的に眺め，人類史展開の根底に風土的規定を強調したのは Herder (1744～1803) であった。

○ 地理的史観の成立と歴史におけるその指導については既に指摘した (p.8 下段) 明仁上卓 (昭和58年6月，82才で死去，参議院議員) の史学雑誌に掲載された論文による。この論説は L. Febvre の地理的可能論に対し批判したもので，その要旨は概ね次のとおりである。

⑨ 小文字「地理的史観は人間及世界とその歴史が自然または土地，風土，気候という物質の規定を主張する一つの"怪物論"である。L. Febvre は二元論を克服し，宿命論を脱しないという。(おく彼は可能性の偶然的偏るのではないか。意志が可能性の範囲に一致を見出し，または可能性の何れかと一致するのは全く偶然によるほかはない。…Febvre の科学は

偶

神なしには成立せぬ科学であり，彼は宿命を脱せんがために科学の必然性を支払わなければならぬ。即ち宿命論の克服の代償として，近代地理的史観は逆に自身も神秘主義に完成してしまった。…… 科学の必然性，その統一性，その法則性を措しげもなく支払い，完成しようとするFebvreはほど全く地理的史観をして自己破産せしめんと企図するものの如く，地理的史観は科学の必然性，統一性，また法則性を失わざらんとすれば宿命論となり，宿命論を脱せんとすれば，これら科学の根本的性質を犠牲にして，従って神秘主義，恣意性，気まぐれなど七面の悪魔に身を委さねばならぬ。…… 地理的史観が遂に自己を貫徹することができず，却ってあらゆる破綻を生じ，自己解体の危機に臨んだとすれば，それは地理的見解が唯物論に立つが故ではなく，不完全なる幼稚なる唯物論に立つが故でなければならぬ。即ち地理的史観は今や自己の根柢なる地理的唯物論を再び今味し，これが洗練によってのみ新生することができるのである。…… 素朴唯物論の欠陥は，それが物質または自然を遊離せられ，孤立したものとみなし，人間に対して外力として対立するものとして出発した点にある。これが宿命論への出発である。……弁証法的に把捉されるべきである。弁証法的唯物論では，物質又は自然とは発せるもの，動かざるものではなく，その反対である。地理的自然と社会との間の絶えず変化しつつあるこの相互関係は，いっそう正確に，弁証法的唯物論の見地よりその物質的基礎の諸結びの上に把捉されねばならぬ。具体的にいえば，かかる相互関係は社会的労働力を基礎として把捉されねばならぬ。社会的労働の物質行程が人間社会における地理的自然諸関係の基礎である。」

× Hecataeus (BC 550～475頃) ミレトスの人。T史書のほかに世界周遊(パリエゲーシス)という地誌を著した。地中海沿部に詳しく，イベリア，ゴールについて記されている。

• Jean Bodin (1530～1596) はその著"De la Republica" (1577?) において土地及び気候の性質が人間又は民族の自然的素質を規定し，その自然的素質が更に民族の行動及び国家の形式更に政治の形式を規定することを論じた。

• 17世紀のフランスの法学者であるC.L. Montesquieu (1689～1755) は名著a "De l'esprit des Lois" (1748) の第14，15，16，17，18の各章において，夫々「法と気候の性質との関係において」，「市民的奴隷制はいかに気候の性質に関係するか」，「国内奴隷制の法はいかに気候の性質に関係するか」，「政治的奴隷制の法は気候の性質といかなる関係をもつか」，「法と土地の性質との関係について」等の主題のもとに，気候環境論的思想を展開し，「気候の支配はすべての支配の中で第一のものである。」と論じている。そして，気候によって規定された人間の素質，民族性が国家の法律に関係することを論じている。彼は14篇のはじめに於いて，旅行記を用いてアジアの気候について論じ，与えられるアジアの気候は極めて寒い。(シベリア，トルケスタンなど) 小さい樹の木や藤木しか生えぬので耕作もろくに行われず，土人も惨めな生活をしている。アジアは国有の意味における温帯は有しない。極めて寒い地域が直ちに極めて暑いところ (トルコ，ペルシャ，モンゴール，支那，朝鮮，日本など) に接している。(これに対し，ヨーロッパでは温帯が極めて広い。) かくてアジアでは強い国民と弱い国民とが対峙し，ぬるま的で専制的な活動的人民が，直ちに柔弱で怠惰で，依存的な人民に隣接する。(ヨーロッパでは これに反して強い国民同志が対峙している。) したがって，1は征服され，他は征服者となりねばならぬ。かくてアジアの無力，欧州の強力，欧州の自由，アジアの隷属性が生じてくるのである。かかる見解は，在来誰しも指摘したことがなく，アジアでは住民の増加は決してなく，欧州ではそれが事情に応じて増加したり。

NO 14

DATE

(X) Herderの時代は歴史学は今日程発達して居らず，Herderは人間に関する事象として歴史をとりあげたのであった。(従って当時は人文地理学はすべて歴史地理学であったのである。)

減少したりするのであるが，これは全く斯る自然環境の致すところである。それはアジアの歴史が示している。(事例をあげる) また，アジアは大帝国が現われたが，欧州ではそれがないのは，アジアは大平原があり，山と海により大きく仕切られ，しかもそれが南にあるので水源は細く長く，山の雪は少く河は小さく障害になっていないと説く。

(•) Herder (J. G. v. 1744～1803) Bodin や Montesquieu 等によってとりあげられ発展した地理的環境論は，その後 J. G. v. Herder 全般的完成的に至った。著 "Auch eine Philosophie der Geschichte zur Bildung der Menschheit" 及び "Ideen zur Philosophie der Geschichte der Menschheit" (1784) の中でとりあげられた。Herder はその著「歴史哲学」の第6巻において，地球上に生活する人類の諸集団及びその生活状態について概述する。そしてこれらの住民は何れも各自の特質を有すると共に，その生活状態や文化についても述べる。そして第7巻にいたり，これらの諸地方では諸民族や諸人種があるけれども，是等は同一の人類の種族であることを述べ，斯かる民族的文化的相違は同一の人類の変化であることを述べ，斯かる民族的文化的相違はその居住地の風土の故であることを説く。Herder は万物の根源として Genetische Kraft (発生力) なるものを考え，これは地球上の一切のものの形成の母であるとし，風土がこれに依りてそこに民族や文化を具現するとした。あらゆる人間は郷土的なるものである。地球に属するあらゆる性格から生まれる自然地理的相違は即ち風土であり，何れの人類も動物や植物と同様に，固有の風土を有している。それは人間の官能，例えば感情，聴覚，味覚において，そしてさらに幸福に於いても風土的である。あらゆる民族は，かくてその風土のもとにおいて，風土的なる

慣習を有し，伝統を有している。かくて人類の歴史もまた，風土的性格を有している，とする。世界史はまさに斯かる民族の歴史によって形成され，その民族は風土的であるが故に風土は歴史の形成にとっては必須条件である。即ち，斯く，地域により異なる生活・文化，そして民族の形成を，その地域の自然との関わりにおいて説明せんとするものであり，ここに地理的環境論の展開をみるものである。その前提となるものは，人間はすべて同じものである，との見解である。Herder は「歴史は連続せる地理にして，地理は静止せる歴史である。」「自然は聳ゆる山流れる川をもって堅固な人間の歴史の基礎を与える。」「地球と共に生まれた人間は地球の一部である，地球を忘れずして人間を考えることなどできない。」などの名文句を残している。

(•) さらに世界史の哲学の著者 Hegel (1770～1831) もまた，精神が民族や国家の活動を通して歴史をつくりなしていく過程において，「精神」の特殊化としての「地方精神」の自己顕現たる民族活動の根柢となるものは風土化であり，地理的特殊化であって，このような風土化は世界史の展開にとって必須条件であることを説いた。Hegel が風土化の原理としてあげたのは「高地」(Hochländer)，「河谷」(Talbildungen)，「沿海」(Küstenländer) の三つであって，それぞれ世界の各大陸における一つ乃至二つの占める特殊によって，それぞれの歴史の基本が，したがって世界史もまたなっていることを説いた。

(○) 地理的史観，あるいは地理的環境論として思想史の中に発生，育てられ，発展してきた歴史地理的思想は，この物理で地理学，あるいは近代地理学の中に生きるようになり，地理学の中に重要な地位を占めるにいたる ~~~~ ここで地理学発達における歴史地理的思想，そして近代地理学の中にどのような地位を占める

に至ったかにつき、今迄の地理学史の中から眺めてみたい。
地理学（Geography, Geographie, Geographie）の語源である"Geographia"（土地を描く）の語は当時、アレクサンドリアのムセイオンの図書館長であったEratosthenes（BC273～192）の著作の標題であったとされる。この著書は今も残存していないが、Strabonの著作「地理書」の中に多く引用されていて、それから知ることができる。この書は地球に関するさまざまな知識を網羅したものであり、地誌の他、地球知識、天文学、地質学などの分野に渡っていた。日本で使われている地理学の"地理"の語は中国の古典（易経、繋辞伝で四書五経の一つであり、）によって広り、「仰以観于天文、俯以察于地理」（BC5世紀頃のもの）の地理から由来しており、これは地の脈理＝地形の条であった。人間の運命や世界の動向を天体の運行や地形と関連づけて考える思想を表しており、古代文明地域や星占術の思想にもみられたものであった。この書がA.D.7～8世紀頃日本に伝わったとされるが、我が国では、古くは元明天皇の和銅6年（713）に編述された我が国最古の書「風土記」の「風土」、元禄年間長崎の西川如見（1648～1724）の「日本水土考」の「水土」が使われていた。（風土記は現在、常陸、出雲、播磨、豊後、肥前とその逸文が残されている。）
なお、「日本水土考」にも「地理」の語が使われている。旧幕時代文化7年（1810年）、幕府の学問所に「地理局」が設けられ、40人の幕吏が武蔵国地誌の編纂に従事、「新編武蔵風土記稿」（1824）の265巻80冊が完成された。明治の半頃、内村鑑三の（1861～1930）「地理学考」（1894－明治27）に使われているが、この書名は後に「地人論」に改められた。K. Ritter（1779～1859）の代表作には Allgemeine vergleichende Geographie とされていた。

自然地理学は「Physical geography」、「Physische-Geographie」、「Géographie physique」といわれるが、それに対する人文地理学（Human geography）は P. V. de l'Blache（1845～1918）の著作 Principes de Géographie humaine」にあっている、という。ドイツ語ではこの語に相当する語はなく、Kulturgeographie が当該の内容に関したものに使われる。Anthropogeographie（1848～1905）は Ratzel の著であるが「人類地理学」と訳されている。

• 地理学は文字通り Geographia として「土地を描く」ものとしてその発達がみられた。近代地理学の内容を構成するうえの知識や思想を分類できよう。1は地誌的知識（の発達）、2は自然に関する知識の発達、そして3つ地理的環境論の思想の展開であり、3については史学の思想として上述のごとく展開してきたものである。1と2は古くからの開発地域の諸地域と自然に関する知識として地理学の古い時代の主流をなして来たが、近代地理学に到り、3つ地理的環境論の思想が中心となって来た。1の地誌的知識の拡大充実については、異郷の地に旅し、その実情を知ることが機縁となって広り、(1)冒険・探検 (2)宗教的 (3)商業的 (4)政治的 (5)学術的探検調査 などがその機会となって地誌的知識の拡大、充実をもたらした。これらの知識は旅行記、探検記、見聞録などとして後世に伝えられ、人々の地誌的知識の拡大、充実に役立った。(1)は他の分野の基礎をなし、如何なる目的の旅行や探検も冒険心がなくては行い出来ぬものであり、当時のように交通機関の未発達の時代においては、多くの危険が伴い労力を必要とした。近世初頭の発見時代（Zeitalter der Entdeckungen）の主役者も何れも冒険家であった。1325年生れの Ibn Batuta も23才の時に祖国を発ち

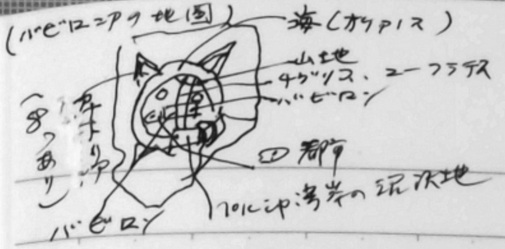
NO 18

DATE

メッカ，シリア，ペルシャ，メソポタミア，アフリカ東岸，クリミア，ペルシャ，南ロシア，カンダハール，マドラス，セイロン，東インド，支那など24年間に亘り，当時，諸地域の実情を伝えた。ジェスイット教の宣教師の Carpini（1182～1252，イタリア）や Rubruquis（1220頃～93，フランス人）などが，アジア大陸を果に中国に赴き，その旅行記，実遊記は有名である。然し目的は宣教的，商業的なものがあった。また，ベニスの商人であった Marco Polo（1254～1324）を，1271年，父・叔父と共に3年半かけて支那へゆき，クビライに干に20年仕え，1295年にベニスへ帰った。多くの苦難に耐えて中国へ往復するが，その著「東方見聞録」は，ヨーロッパに東洋の状況を伝え，やがて近世初頭の発見時代の基礎となった。中世期における地誌 moslem geography の人々の仕事も効果があった。砂漠に生きる旅行者達の知識は少いものが多かった。

× 例えば Ibn Chordadbeh（825～912）はアラビアの（地方の（サマラ？）知事に任ずる高官であったが，彼の著した "Buche der Routen und Reiche（道程及郡国志）"は，その職業の傍ら，それを生かして集めた知識をまとめたもので，遠く東洋にまで及んでいた。近世初頭の地理上の発見に活躍した人々 Jaeõ da Tracto（1415），Cabral（1427～31），Bartolomeu Diaz（1487～8），Vasco da Gama（1497～8），Colombus（1492），Magellan（ポルトガル）（1519～20），Drake（1577），Bronower（1643），Tasman（1642），J. Cook（1770）．（ ）内は活躍した年）などは世界各地に亘る偉大なものがあった。中世の末期，北イタリア，ハンザ同盟諸都市に商業都市が発達し，商業がさかんになると共に，ドイツのリューベック，ケルン，ブレーメン，ハンブルグなどの都市には商人の子弟を養成する商人学校が出来て，そこで教えられる科目に，Kaufmanns-geographie，Handelsgeographie などがあった。これが後

× Ibn Chordadbeh のほか著名な人に Ibn Haukal（943～977）の「諸国と諸道の書」（回教世界の地誌）などがある．



× プトレマイウスの書や図は商業都市などで勢力して必要な生が高まると再びラテン語，後にはドイツ語に翻訳されて西欧に広く用いた。NO 19 そして近世初頭の探検と発見に役立てられた。

DATE

紀末に英国に始まり，やがて Economic geography として発展することになった。

- 当時の人々の地誌的知識を知る上に於いて貴重なのは，上述の旅行記，探検記，地誌などのほか世地図がある．例えばメソポタミアの遺跡から出土した clay tablet に刻まれたバビロニアの地図がある．BC700～500年頃のものとされるが，描かれている内 BC2500年頃のメソポタミアの構造である．Sargon of Akkad の図（BC2700年頃）の構造で会型をしており．星の光の部分は Sargon 大王の遠征地であると考えられる。（8つある．左上はアナトリアか？）（○はメソポタミア沼沢地，□は都市か）

× 有名なのは Ptolemaeus の地図である．ローマの地理学者で，（90～150）彼の地理書は8巻，その地図は複雑ながら貴重。一種の円錐図法で，ヨーロッパ，アジア，アフリカから成っていて，アジアは南方に無限に拡がり，アフリカは南方に果てしなく続き，はるか南方でアジアとアフリカは続き，南には Terra Australis Incognita（南方大陸）（未知の国オーストラリア）と書かれている。ヨーロッパから西へは海上短い距離でアジアに達するように描かれており，アメリカはなくコロンブスを大西洋に乗出させたのもここに一因ありとされる。南方大陸はやがて此の方面への探検を志向させた一因であったとされる。1519～20に Magellan（ポルトガル）が彼の名をつけたマゼラン海峡を通過して太平洋に出る際，左手の陸地（Tierra del Fuego）を南方大陸と誤認したという。1577年に Sir Francis Drake も同じく南方大陸の北の岬と思えた。1643年にオランダの Bronower が通り，ホーン岬を過ぎて北方であることを知ったという。J. Cook の探検も二の南方大陸と目指したものであったという。1642年に A.J. Tasman が ダスマニア島を発見した時も，この南方大陸と誤認であったという。

現在，世界で最も古い原図のままの地図は13世紀の頃のものとされる

Hereford 地図（ロンドン郊外 Herefordshire）とドイツの田舎の Ebstorf 地図である。両者共 掛地図で，田舎の尼寺で信者達に対する説教に使用された。これらでの中世の地図は一般に T-O map（或いは O-T map）とよばれるが両者共全く同じ掛地図である。⊕の型で，周りはオケアノスによって囲まれており，怪物が口から何か吹いている図が周りに数つも描れており，これは風の方向を表すとされる。アジアが上に描かれ T は下の I は地中海，一は Tanais（ドン川）とナイル川（Nile）を表している。絵が描かれ周辺には怪物がいくつも描かれる。（世界の果てには怪物が住む）したがって T の水平で区切られた陸地は上がアジア，左下がヨーロッパ，右下がアフリカということになっている。大きな都市は代表的な建物で描かれ，詳しくラテン語で説明が記されている。一番にエデンの園が描かれ，世界の中心にイエルサレムが描かれている。説明はすべてバイブルの内容によって統められており，当時の世相と，この地図の使用目的が明瞭である。

○近代地理学（modern geography）の誕生と展開

地理学史上，一般に Alexander von Humboldt（1769～1859）は地理学の基礎を統の学問とする地物学と自然地理学の上に築いたとされる。そしてその影響をうけてドイツの Karl. Ritter（1779-1859）が「史地理学の研究の上に人文地理学を築いたとされる。近代地理学の内容を構成するものとしての地表の自然に関する知識，即ち自然地理学的知識はどのようにして展開し，Humboldt の近代科学としての自然地理学を構成するに到ったかを明らめてみたい。

⊙ここで敢えて「地理的自然」というのは一方において地理的関心ある自然を考えるからである。地理的関心ある自然とは人間の体に関する自然のことである。人間もまた動物の一種として自然科学の対象でもある。かつてナチスドイツで体質的民族論をとり，ドイツ民族の体質的遺伝的，あるいは人種的自然の優位を強調したことがある。「人種」「民族」「国民」は極めて似て居り，混同しがちであるが（ある人文地理学者は民族地理学と題して，人種的地誌を記したことがある。），これは全く別概念であり，人種は体質的形質的特徴にて人類を区別するもの，民族は，文化的社会的特質で世界の人類を区別した場合，また国民は一国の構成員として政治的性格をもつ集団をいい，これらは全く別の概念より人類を分けたものであり，そのため これら相互の関係が問題となる。人種と民族，国民との関係を論じるのは人種的決定論である。これは別概念に論類であるため，相互の関連が慎重に考察される必要がある。

•地理的自然に対する認識は地誌的知識とともに人類には原初的にあったものである。所謂「内なる自然」（体質的自然）に対する「外なる自然」である（環境としての自然）地理的自然というがその内容は位置，距離，面積，海陸分布，地質，地形，土壌，陸水，海洋，気候，植物，動物，地球物理的，数理的自然（地球の大きさ，形，etc. しかもこれらは相互に密接に関連し，地域的綜合を形成しつつ展開している。（主に人間の自然的性格（人種）も考えねばならぬ。）

•周囲をとりまく自然についての認識は，地上に分布する人類の生活にとっては正に根源的なものであったと考える。地理的自然に対する認識の原初的なものはやはり神格化されたものであった。日本神話によると，日本の国土は神の成せるものであり，またギリシャ神話においても，海にも山にも，森にも泉にも神が居て支配しているとされた。農業においても農作物の成育に支障が生ずると，泉の精に犠牲を捧げて祈った。このような自然観は，そのままでないにしても，今日でも祭や年中行事などにもその残存がみられる。いっぽうこのような神格化された自然観に対し科学的自然観の展開もみられた。古代ギリシャにおい

身体

いて，BC 625～545 の Miletus の人 Thales や BC 610～545 の Anaximander は万物の起源を，Thales はそれが水であるとし，Anaximenes（BC 500 頃～428）は空気であるとし，また Herakleitos（BC 544～484）は火であるとした。Anaximander は BC 541 に最初の世界地図を描き，最初の地理学者とよばれるが客観的合理的であるとはいえ，地球は円筒状をなして空中に浮いていると考えた。地球は球体であるとしたのは南イタリアのマグナグレキアの Pythagoras（BC 572～500）であったとされる。そして地理学に関する初めての体系的著書はアレクサンドリアのムゼイオンの図書館長であった Eratosthenes（BC 273～192）の "Geographia" 3巻であったとされ，この書は数理地理学に関する諸国の地誌が中心であったとされる。この書は現存しないが Strabon などの多くの著作に引用されている。そしてその地図は凡そ BC 240 年頃に作られたという。今日の Geography はこの Eratosthenes の Geographia に始まるとされる。さらにさまざまの自然現象については，例えば "地震，火山の噴火，水の循環などについては Platon（BC 429～347）の Agriphlegethon がある。これは地下に縦横に走る空洞で，その狭い部分を一方から他方へ通り抜けると大地を震動させ，一方から火を吹き反主般らして噴き出すのが火山であるとし，水はこのヒポリフレゲトンを通り大海の水が地下に入り，泉となって湧き出，土地表を流れて海にのるとし，地下の循環を考えた。このような様々の自然現象に対する考え方は ローマの自然科学者 Plinius（23～79）にまでも影響を及ぼした。しかしこのヒポリフレゲトン説は全くの空想ではなく，現実にアドリア海の入り江の地方の鐘乳洞などがその根拠となっていた。Aristoteles（BC 384～322）は哲学者であったが，科学者でもあり，天文学，動植物学，気象学に関連する内容のものであった。彼の作った五帯 一気候帯を熱帯，温帯，寒帯を総称して分けるのは知られている。

- 今日の自然地理学の基礎をつくったのは，ローマの地理学者であった Ptolemaeus（Ptolemy）（87～150）であった。彼の地理書8巻や多の地図（複製）は後世に大きな影響を与えた。その地図は一種の円錐図法で，世界は，ヨーロッパ，アフリカ，アジアから成っており，アジアは南方に無限に広がり，アフリカは南方に果しなく続くものとされ，はるか南方でアジアとアフリカはつながって居，南には Terra Australis Incognita（未知の国 オーストラリア）と書かれてあった。そしてヨーロッパの西方は海上経由で アジアに至るように描かれていた。コロンブスを後に大西洋に乗り出させたのも，ここに一因があったとされる。また，この所謂南方大陸（Terra Australis Incognita）も後世における南太平洋方面に対する探検の契機ともなった。ポルトガル人の Magellan（1480～1521）が世界周航に際し，彼の名前をつけた海峡を通過して太平洋に出る際，左手の陸地 Tierra del Fuego 島を南方大陸と誤認，また1578 に Sir Francis Drake も同じく南方大陸の北岬と誤認した。これは 1643 年，オランダの Brouwer に到着することが確認された。（ホーン岬の外を周った。）また 1642 年，A.J. Tasman が南太平洋を探検し，彼の名前をとどめたタスマニア島を発見した際もこれと南方大陸の一部と誤認したといわれる。さらに又 1770 年，J. Cook の探検もこの南方大陸を目指したものであったが，彼により，そうでないこと，つまり Ptolemaeus の地図に見られた南方大陸はそのような形で存在しないことが判った。
- 西欧では中世の間は，ローマ法王の権威のもと，キリスト教の教義が人生の規範として，もっぱらバイブルが世界観の基盤となったため，古代ギリシャ・ローマ以来の客観的合理的精神が影をひそめたため，自然に関する認識も著しく後退，その進歩が阻まれた。地球に関しても古代の円盤説が再び復活し，13世紀の世界

X 西川治「地球時代の地理思想 ーフンボルト精神の展開」古今書院, 昭63.

~~地図である イギリスの Herford 地図や ドイツの Ebstorf 地図~~
~~(世界における、帝国のまま現存するもの2つのもの)にもそれが現~~
~~われていた。この2図は庶民の家宝として保存され、もっぱら~~
~~信者に対する説教に使用された掛地図であり、その内容は~~
~~聖書のバイブルに依存していた。~~

然し Ptolemaeus の著書や地図は、当時大帝国を建設したアラビア(サラセン帝国)に伝えられ、アラビア語に翻訳されて使用されていた。アラビアは砂漠の国で、機動性に富む遊牧や商業貿易が生活の基礎で、農業は狭いオアシスに限られていた。このため、読んだように、旅行が行われる機会が多く、またこのような生活様式のため、地誌的地理的認識に富み、また深い関心を有し、地理学史上 Moslem-geography (回教圏の地理学)を構成するに到った。(前出)
近世以降に到り、西欧の世界に客観的合理的精神が復活するに到ると共に、自然に関する認識も変革することになり、殊に17, 18世紀における自然諸科学の発達はめざましいものがあり、地質学、気象学、海洋学、陸水学、地球物理学、天文学、生物学なども著しい発達を示し、夫々独立した自然科学として発達し、かつての geographia はあたかも多産の巣立った鳥の巣のごとく、もはや殻となって崩壊するかの如き感があった。斯る時にドイツの A.V. Humboldt (1769~1859)が現われ、近代地理学の学問的基礎を形成するに到ったのである。

○ Alexander von Humboldt (1769-1859)

× 1769年ベルリンの名門の子として生まれた。(兄の W. v. Humboldt (ウィルヘルム)はゲーテと親友があり、言語学者であり人文主義者であり、政治家でもあった。ベルリン大学を創設し、A.V. Humboldt も科学講座を行った。)フランクフルト・アム・オーデルの大学で法哲学を、ゲッチンゲン大学で生物学を学び、人類学者 Blumenbach の講義を聞く。さらに

1791年、フライブルヒの鉱山専門学校で地質学を学んだ。この間、1800年までの間にスイス・イタリアなどを旅行し、此の間、クック(James Cook)の探検隊のメンバーであった科学者 G. Forster に会い探検や地理学に対する興味を呼び起こされた。1799. 6.5, 新大陸の旅行を思いたち、カナリー諸島から南米のヴェネズエラに上陸、オリノコ川を遡り、源流がアマゾンの支流に連絡していることを発見、1802年 キトーとアンデスの山を幾回も歩き、ペルーのクツコ、グヤキール、アカプルコなどを歩き、キューバ、メキシコ、そしてコロンビア、エクアドル、ペルーなどを歩き、さらに合衆国にも到り、5年後(1804)に帰国した。この5年間に亘る熱帯アメリカの旅行によって、第二のコロンブスとさえ称される程になった。その後、パリーに滞在して資料の整理を行い、次々と論文を発表して行った。1807年の熱帯地域の自然描写」、1845年「植物の分布に関する学説」あるいは「植物相の理念」などは植物学の専門家からすれば、とかくの意見もあるものであったが、新しい植物地理学の理念、それを通して科学的地理学の基礎の確立に関するものであった。しかし名門の出身であった彼も、5年間に亘る熱帯アメリカの旅行やパリーでの資料の整理や研究生活によって無一文になり、困窮していたところ、1829年、当時の皇帝フリードリッヒ・ウィルヘルム3, 4世に宮廷顧問として仕えることになり、この頃より多少とも研究を続け、1829年、60才の高令でオウラ、アルタイ地方への旅行を行い、「中央アジア」の著作が残され、ユーラシア大陸(Schlagintweit (1827~1866), Semenow (1827~1914), S. Hedin, E. Suess (1831~1914))にも影響を及ぼした。そして「アジア地理学の父」(セメヨノフ)とも称せられた。そして1859年、90才の高令で死去した。(フンボルトは1806~07にアルマアタからイシクールへ旅行した。) 熱帯アメリカの旅行で観察、調査し、主にその後の研究によって彼の見積したものは、旅行に同行した植物学者 Alexandre Bompland (1773~1858, 仏人)のそれもかなり相異

したものであった。例えば植物学者の注目したものは，特に植物の花とか実，しかも植物1本1本についてであり，それによって植物の系統分類を行うことにあったのに対し，フンボルトのそれは主として植物の幹とか葉，しかも1本1本ではなく，植物の集団，形態，群落その生態，環境への適応などについてであった。その研究の中心は後にGrisebachによってPflanzenformationと名付けられた植物地理学の考え方であった。そこで一つの地域における植物の生態的な存在であった。例えば亜熱帯とかサバンナ(Savanna)とかdesertとかsteppeとかのそれである。彼は一つの地域における植物の群落や属や目などがどのように配置しているかを統計的に研究する方法を考えた。彼の選んだ熱帯アメリカという地域は新たな研究を行うのに本当にふさわしい地域であった。熱帯雨林のアマゾンの源流からアンデス山脈にかけて海抜が異なるにつれ気候が異なり，それとともに植物相も相違する。Boumplandの研究は植物それ自体に関するものであったに対し，フンボルトのそれは地域全体が対象であり，地域の地形や気候との関連において植物の生態をとらえようとするものであった。彼の名著「Kosmos」(1845～62)の序文には「自然のあらゆる現象をその一般的関係に於いている様に，また外なる内部的の力により動かされている一つの大きな統一体として表現する……」とあり，個々の孤立した事象を帰納法により因果の法則にまで高めたものであり，地理学的解釈における因果の法則，一般法則を発展せしめたものといえる。この点が近代地理学の鼻祖とされる所以である。しかも彼はこのような考え方を単に植物にのみでなく，とくに「新大陸の人史地理に関する批判」に述べているように，人間にまでも行い，メキシコの研究などにもうかがわれて，人文地理学の分野にも及んで，地理学的考察の近代科学としての基礎をつくりあげたものといえよう。

○ Karl Ritter (Carl Ritter) (1779－1859)

A.v.Humboldtと並んで近代地理学の創設者といわれるドイツの，K.Ritterは J.G.Herderの思想の影響をうけ，地理的環境論を主軸として，近代人文地理学の基礎を確立した。彼の後をうけて人文地理学の近代科学としての発展に努めた同じドイツの F.Ratzel (1844－1904) はRitterを賞讃して，「地理学は，Ritterがこれを革新して以来，とくに好んで古来の哲学的問題であるところの自然と人類の間，舞台と歴史との間の相互関係をとりあげ，もってこれが解決を与えた」と，「Ritterの業績は，地理学と歴史学との不分の連絡を活気づけ，斯かる中間領域における問題を地理学上有意義なものとし，地理学に広大な研究分野を獲与したことにある。」と述べている。いっぽう，ドイツの地理学者 A.Hettner (1859～1941，チュービンゲン大，ハイデルベルヒ大の地理教室の創設者.) は，「Ritterの思想は地理学前史の時代に属し，地理学を歴史学から分離して居らず，その解釈は極めて哲学的で，その名声では体系を整える意図はあっても，因果の関係を追究しようとは せず，記載的傾向が強かった。門下にKahlやKappのような地理学者が現れたにもかかわらず，彼以後はかなり永い間地理学の停滞を来した」とする。

• Karl Ritterは1779年ドイツのマグデブルグに生れた。ハレ(Halle)の大学で教育，哲学，歴史学を学び，1807年(1806?)にA.v.Humboldtに会って影響をうけ地理学に志した。フランクフルト大学のギムナジウム(中学)の教師，ゲッチンゲン大学の教授を経，1820年にはベルリン大学の教授となり，その講義をうけた者に K.Marxもあったといわれる。また地理的環境論(地人論)で知られた Elisée Reclus も彼の門下であった。主著は“Die Erdkunde in Verhältnis zu Natur

und Geschichte der Menschen — oder allgemeine vergleichende Geographie" (1817~18 ベルリン) であり，この他「ヨーロッパについての6つの地図」(1806)，「地理学」21~19巻 (1822~59)，「地理学及び発見の歴史」(1861)，「一般地理学」(1862) などがある。彼は教育学者ペスタロッチの影響を多くうけていたという。「一般比較地理学」の一般の意味は，たんなる記述ではなく，法則的なものを目指す意味であったようである。「比較」の意味はよく解らなかったが，比較解剖学の S. T. Sömmering の影響をうけていたといわれる。「比較」の語の使用と共に彼の取ったのは「法則」，「類別」・「理念」・「世界観」などであった。当時までの地理学は，地球上の各部分はかなり詳細に記述されていたが，それらを貫く有機的統一的原理やすべての部分の相互作用，相互依存に関する知識は欠けていた。学問的解釈を導くものは事物の関係の知識であって，部分部分の記述ではない。在来の地理学は単に記述であり，その主要な関係を教えなかった。リッターの地理学はモンテスキューやヘルダーなどにより論じられた環境論の成果の上に立ち，それを発展させたものであるといわれるが，それまで一般に見失われていた人間の姿態的な生の活動を凝視せんとする啓蒙思潮の影響のもとに，豊かなる大地の回復を目指したものであった。あらゆる現象は大地の上に現われ，大地の上に消えていく。すべてのものは大地と共に把握されるべきであると考えた。Ritter の時代には今日の如き実証的な歴史学は形成されて居らず，また今日のように実証的な社会的経済的成果はなしとげられておらず，人間の学問として歴史学が唯一の進んだ学問であり，かくてリッターは自然と人間の交渉の具体的課題として歴史学をもってきたのである。すなわち，人類生活の総和，具体的事実として歴史を考えたのである。

• 曰く，「土地とその住民とは密接な相互的関係に立ち，その一つの要素は他のものなしにはその実相の全き姿をみることはできない。従って歴史と地理とは常に提携せられねばならぬ。(国土は民族の上に働きかけ，民族は国土に働きかける。)」「地球の物理的諸関係を研究し，あらゆる自然の法則を組織づけ，その現象の，人類，その生活，歴史に対する影響の如何が地理的科学の重要な部分を構成する。かくて異なる諸民族の文化や技能の特異性の無限の変相，心傾向が明かとなる。人類学や民族学即ち人類と民族の学問が地理学，地誌に註釈を与える。歴史学者と地理学者とは相互に仕事をする。歴史学者は人類の行為から遡って現在までの生活を条件づけた諸事件を考察し，地理学者は人類の機習の研究から出発して人類業績の諸事件にまでいたる。実際，歴史の基礎的諸問題は，国土が民族の生活に対し如何なる関係を生ぜしめるか，国民的組織なる国家に対して如何なる関係を生ぜしめるか，という事に存する。」「人類並びに諸民族の歴史をもう一度，今まで殆ど省られたことのない側面，人類活動の全場面から省み，人類と本質的に関連のもとにある大地，即ち大地の表面から自然の姿と生命とを，そのすべての関連のままに，個々ばらばらな力が為すよりももっと鋭く，そして決定的に把握し，最も単純に最も普遍的に現われている人類全体の地理的法則の動向を，現われなし，運動し，生きている諸現象の中に把握する……。」ことに意義を認めた。

• 彼はさらに次の如く述べる。「土地はその住民に対して理性の天与の賜物を借し，ただ単に居住する場所としてあるばかりでなく，住民が訓育せられるべき学校である。これは人類の歴史より学ぶべき最初の偉大なる課題の一つである。……地球の最高の使命は無生物と関係することによるのではなく，知的の世界，

NO 30

DATE

× 目的論，一世界の諸現象が生成×発展するのは，一定の目的に向って秩序ある運動をしているとの考えで，アリストテレスやライプニッツなどドイツ唯心論などの立場。

即ち地球上に住む人類の心その関係において生じたのである。この精神の世界に対して肉体を付与する。地球のみが人類の如き生物の宿を享有する遊星であるように，われらの無生物並びに生物世界においては，人類のみが道徳的性質を享有し，それは下級の生物では与り得ず，模倣し得ざるものである。地球は理性，精神，人格の家として造られた。そして人類はその理性，精神，人格における偉大な成長のため，地球を従属物とするために創造された。この意味から，地球とその貴重な所有者とは相関の係がある。各個人はその命ぜられた仕事を励み，その進路を進み，自然のもつ多くの利用，神が彼に授けたあらゆる助力を用い，地上における彼等の使命を終わる。しかし地球は残り，数百万の人を進歩させる家として，彼らすべてを助け，新しい力を揮い，人類生活の貴重な目的を充足しめるのである。」と説く。このような思想に対し，地理学史×家には神学的目的論的との批評を加える人もある。しかしあらゆる地理的現象をこのような立場で考えることは，地球と人間との関係を密接不離なものとして捉えたことになる。Humboldtと異なり，彼は実地調査をあまり行わず，もっぱら書斎の学者であった。彼の業績は仁々ばらばらな現象を相互に結びつけ，関連づけ，統一的に捉えたことにあり，研究室の中での読書を通し，思索によって得られたものであった。その大陸論も巨視的であるが，具体的実証的でなく，思索の産物である。即ち，世界の大陸を比較し，それが人文に及ぼす影響を考える。アフリカの楕円形，アジアの菱形，ヨーロッパの三角形を比較し，形が正形で地理的条件が単純であればある程退化的均一的文化の特徴がみられる。また気候にかかわらずその複雑性がその民族間に相互関係を発展せしめる。アフリカがその適例である。それは地形上からみた大陸中の河水による航運なく，退化的文化を示す。ヨーロッパ大陸の形状

× 「O. Peschelによる変動」－Ritterの変動としての機械論的自然地理学方法の思想。

NO 31

DATE

は複雑で不整形であり，その中心にまで河水により到達せられ，その海岸線の複雑なことは最高の文明を発達せしめた。アジアはその中間で，文化の状態もまたそれが明かにみられる。また島に関しても，ポリネシアの如き大陸より離れ孤立性を帯びているところは文明の後退性がみられるという。しかし，彼の卓見としてみられるのは，例えば水のヨーロッパに対する関係としてヨーロッパの3時代を分け，河川時代，地中海時代，大西洋時代としたり，地理的条件も，時代を異にすることにより，その関連も異なることを指適し固定したものとせず，了史家としての彼の素養をのぞかせている。

○ K. Ritterの人文地理学をさらに科学的に高め，法則樹立の方向も推進しようとしたのは同じくドイツの Friedrich Ratzel（1844～1904）である。F. Ratzelは1844年ドイツのライン川流域のカールスルーエに生まれた。ハイデルベルヒ，イエナ，ベルリンの各大学で動物学と地質学を学び，1868年，動物学の論文で学位をうけた。卒業後，南フランスやイタリアに研究旅行をし，のち普仏戦争に従軍，帰還後はケルン新聞の自然科学学術通員としてヨーロッパ，アメリカ大陸を研究旅行し，「北米合衆国」2巻（1878－80）を著した。1870年，ミュンヘン王立理科学校×講師，1880年同地理学教授，1886年よりPeschelが1875年まで担当していたライプチッヒ大学の地理学教授となった。英国に生まれたダーウィニズム（ダーウィンの「種の起源」による進化論）は19世紀のドイツの思想界に大きな影響を与え，機械論的因果律万能の思想が支配した。生物学者 Haeckel の generalle Morphologie に傾倒したRatzelは「Anthropogeographie－人類地理学」の思想的基盤をここにもつことになった。ドイツの当時の著名な生物学者 Haeckel は斯かる進化論の普及者であり，生物界と無生物界との間の本質的差別の存在を認めることは出

来ないとし，機械論的因果律方法を信念としてもち，ドイツの思想界を一つの哲学的傾向にすでもたらしたのであった。
F. Ratzelの代表作は"Anthropogeographie"2巻，(1882~91)であるが，その副題は"oder Grundzüge der Anwendung der Erdkunde auf die Geschichte"(歴史への地理学的応用の原理)で，ここにもRitterの影響があることが察せられる。この「人類地理学」を貫く思想は，動物学者としてのRatzelの信条であった。人類も又動物の一種であり，他の動物と共に自然科学的方法によって考察され，"Die Menschheit ist ein Stück Erde"(人類は大地の一片である)との見解のもとに人類の地上における生活は，動植物の生活と同じく地球から離れて考えることはできない，とした。彼は人類社会を一つの有機体であると考え，国家をその最も発達したものとした。そしてそのような有機体はあたかも生物の集団がその地理的環境によって決定的影響をうけるのと同じく，あらゆる部面に亘って強大な影響をうけるものとする。「そこには人間の意志とか意識とかは何らの信用も与えられていない。すべてが予め決定されており，その土地が支配的なのである。土地が人間の脊の骨髄にまで入り込んでしまっている。」(Dickinson and Howarth "The Making of Geography")と評せられるように，彼の見解は人類生活，歴史への地理的環境の絶対的優位性が説かれていた。
人類は生物と異なって自由意志をもっている。こゝにその意志は，それが具体化されるには，地上に於ける生活のため，外的条件によって影響され拘束をうけざるを得ない。自然は不変である。このような不変な自然が変化する人間の歴史に影響を及ぼすのである。「特定の形をもつ大地にとっては彼は常に同じ形状においてその統率を

あげるものであるが，これと同じく，特定の自然条件は，生命あるものの運動に対して常に同一の道を指定するものである。そしてこの自然条件はこのものの運動にとっては永久に且つ同じ意味において制限であり，且つ制約者であり，更にまた，この自然条件はこの運動にとっては常に新しきものとして現われる」という。そこでは，人類の歴史というものは予め決定されている。不変な自然の影響をうけて変化する歴史は自然によって決定されているのである。一定の自然条件は人類の歴史的運動に対しては常に永続的同一のものであるとされる。「地球上における人類の運動を叙述し，そしてこれらの運動の法則を探究することが人類地理学の任務である。……生命とは運動であり，従って歴史とは運動である。何となれば，歴史とは人間の生活現象の総計であり連続であるからである。人類の歴史は，植物や動物の歴史と同様に，静かな運動と変動とで組み立てられている。……」運動はあらゆる生命を有するものの本質的な特質である。生命とは，外部的刺激によって生ぜしめられるところの内部的運動の総和である。斯かる内部的生命は常に外部的運動を生じる。有機的物質の増加，成長，繁殖などは，何れも空間的運動を意味する。そして空間的運動は悉く空間的支配である。(木植物の分岐，珊瑚の分派など……)かくて空間的支配は一般的な生活現象であり，生命の象徴であるとされる。歴史は，Ratzelにおいては，かかる生命あるものの運動性(Beweglichkeit des Lebens)であったのである。元来動物学者であったラッツェルは，「生物地理学の一環としての人類地理学」の立場をとり，生物の一種である人類の集団は，あたかも植物や動物の集団が地理的環境の影響を強くうけ，決定されるとの考えのもとに，後世「地理的決定論」とよばれる学説を唱導した。

• F. Ratzelの業績として知られているのは，先ず代表作の"Anthropogeographie"2巻(1巻1882，2巻1891)，"Politische Geo-

graphie"(1897), "Die Erde und das Leben"(1901~2)など，その他「Deutschland」，「Völkerkunde」がある。"Politische geographie"は人類地理学の立場に立って，有機体としての国家が，あたかも生物の有機体が地理的環境に強く規定されると同じく，国家の大小，強弱，盛衰もその土地，地理的環境によって規定されると説いた。即ち国家は地理的条件によって規定され，豊かな，恵まれた地理的条件のもとで強大に成長した国が，劣悪な地理的条件のもとにある隣接の弱小な国家を侵略していくのは，生物界の生存競争にたとえられるとする。国家の盛衰興亡はその国土の地理的条件によって決定され，強大な国家が弱小な国家を侵すのは自然の理であるとされる。ラニには，世界各地に植民地獲得に狂奔しつつあった当時の帝国主義ドイツの政策を，学問的に正当化するがごとき観があると評する地理学者もある。すなわち，そこでは力の論理が自然法則のもとに思惟されていたのである。

- F. Ratzelの人類地理学の思想を継承するものとしては，先ずライプチッヒ大でRatzelの指導をうけ，Ratzelの思想を紹介し，その上に立って地中海地域の研究を推進したクラーク大・シカゴ大教授であったE.C. Semple (Semple Ellen Churchill) (1863~1932)を挙げねばならない。著書としては，「アメリカ史とその地理的基礎」(1914)，「地理的環境の影響」(1911)などがある。また，思想的立場は若干相違するが，ともに気候環境の重要性を強調し，その人間生活への影響につき詳細・克明なデータで研究を発表したEllsworth Huntington (1876~1947) (エール大学教授)を挙げねばならない。作品は"Civilization and climate"(1915), "The Pulse of Asia"(1907), "The Principle of Human Geography"(1920) etc. がある。これらRatzelの思想の系統をひく

地理学者にみられることは，1. 地理的環境の優位，地理的環境から人間の歴史・社会・文明をみようとすること。2. 普遍的法則樹立の方向を強くとること，などである。

- 一方，Ratzelの Politische geographie が，恐らくRatzel自身も予想しなかった方向に影響を与えていった。Ratzelの「政治地理学」は，地理学の領域において，はじめて国家や領土に関する問題をとりあげ，今日の政治地理学の先駆的役割を果したものであったが，これを国家学の一体系として，他の人民(Demopolitik)，経済(Ökopolitik)，社会(Sozialpolitik)，統治(Kratopolitik)の問題と共に国土(Geopolitik)の問題をとりあげたのは，スウェーデンのウプサラ大学の国家学・政治学の教授であったR. Kjellen (1864~1922)であった。その代表作である「生活形態としての国家」(1917)(ドイツ訳，"Der Staat als Lebensform")の冒頭において，国家における領土，国土のもつ意義の重要性を強調し，その先覚者とでもいうべきF. Ratzelを評価すると共に，彼の「政治地理学」の思想を全面的にとり入れたのである。(従来の国家に関する見解としてはケルゼンやイリネックの国家論があるが，これら諸家の見解はいずれも国家を社会集団として捉え，また統治するものとして把えるだけであった。即ち上のSozialpolitikとKratopolitikに関する見解に相当するものだけ，一その後，ウィーン会議の委員であったKlüberが国土，領土の問題に着目したが，不十分なものであった。ケレンは，国土を次の各部面に関し夫々の政治学，政策学が成立つとして以上の5政治学，政策学をあげた。そして彼はこれら5つの部面のうちでもGeopolitikを最重要なものとしてとりあげ，著書の冒頭においてこれを論じたのである。国家はその領土を自らの体躯として保持するものであり，領土，国土にはその力が表現されている。国家はその領土の地理的性格に強く規定される

NO 36

DATE

× K. Haushofer ー. 明治4年〜45年. 駐在武官として京都の第3師団に勤務していた。日清日露の大戦に戦勝で国威隆々たる日本を眼の前にし感激し帝国, 地政学研究に入る. 「大日本」の「大陸政治と海洋政治」・「太平洋と地政学」等の名著あり。

最も完結された生物的有機体であり, 国家の盛衰興亡は生物の根本法則の支配のもとにある, という国家と領土の宿命的な関係を論じたのであった。R. Kjellen の Geopolitik はその後, R. Sieger によって1903年, ドイツの地理学雑誌に紹介され, さらに「生活形態としての国家」も独訳出版された。そして, "Geopolitik" はミュンヘン大学の地理学教授であった K. Haushofer (1869年生れ, 1887年軍務, 明治42年に日本在勤武官として日本へ, 1934年ドイツアカデミー総裁, 軍籍では日本の"閣下"の地位にまで昇進した造詣深き将校であった) とその同志である O. Maull, H. Lautensach, E. Obst, K. Hönnig などの地政学研究グループによって地理政策論として研究され, 国土回復, 第3帝国建設を目指すナチス・ドイツの政策立案の基礎理論とされるに到った。Haushofer の助手をつとめたルドルフ・ヘスはやがてヒトラー総統の副総統として地政学理論の実践, 政策化にあたることになった。(当時, ドイツ国家の再建, 第三帝国建設を目指すナチス・ドイツでは, その政策理念として"Blut und Boden"がスローガンとして掲げられた。Blut は血であり, 世界の文明の発達に偉大なる貢献をしたドイツ人の体を流れる血の中に神秘な力があるとし, 一血縁民族論ーその偉大な力をもつドイツ民族はその土地つまり Boden によって形成されてきたものである。しかるにそのようなドイツ民族形成の母胎であるドイツ国土は, 第1次世界大戦の敗戦の結果, ヴェルサイユ体制によって支離滅裂にされ, ドイツ本国の国土までもが, ヴェルサイユ体制の民族自決論のもとで隣接の国々の中に辺境地帯のドイツ住民と共に編入されてしまった。このような Blut und Boden の理論は正に地上における民族の処を得せしめ, 平和のもとに安住できる体制の基礎となるものであるが, 戦勝者である連合国の米・英は

NO 37

DATE

商業主義, 資本主義的な帝国主義のもとで, Blut und Boden (血と地) の基礎理論に背く体制をつくりつつあり, Blut と Boden を遊離させようとしている。ドイツは斯かる体制に断乎として抗戦する, とした。この「血と地の理論」には Geopolitik の基礎理論は正に合致するものであった。そしてドイツ民族は土地を要求する, ドイツ民族とドイツの土地を返せと叫んだ。

・ナチスドイツの地理学者達による多くの地政学研究の成果は, 「地政学雑誌」に次々と発表されて, ドイツ国民の国家意識昂揚に資せられるとともに, 対外政策の立案に供せられた。(「地政学雑誌」は地政学者達のさまざまな研究を解り易い文章で, 時には漫画などを交えて載かれ, 国民に広く読まれ, その思想が普及するようにはかられた。) このように Kjellen によって国家学の一体系とされた Geopolitik は大ドイツ建設の政策論へ移行し, ナチス・ドイツの世界政策の思想的基盤へと変貌していった。ナチス政権の指導のもとに, ドイツ第三帝国の建設に熱意をもつドイツ国民の一人としての元軍人, K. Haushofer を中心とする地政学協会の研究者達は, 純粋科学としての政治地理学よりは, 政策論に移行の容易な地政学に関心が集中した。そこでは趣味的な専門的な地理学研究よりは実践性をもつ学問こそ真の学問として重要であり, 「どうあるか」より「どうあるべきか」を追究する学問が, 即ち究極に「役に立つ」学問こそが必要な真の学問であるとの見解が醸成されていった。(実践性のない, 役に立たないものは学問じゃない, 学問としては無意味である。) 当時ドイツと枢軸国関係にあって, 米・英の力を排除して大東亜共栄圏の建設を目指そうとしていた日本では, 地政学は格好の思想的武器として, 思想戦の一翼を担ったのであった。元来, 第一次世界大戦後のベルサイユ条約によって世界各地の植民地を失い, 国土の1/3を削減されて疲弊困憊したドイツ国家再建の政策理論としてとりあげ

うれた地政学は，ナチス・ドイツによってやがてケニートン文化圏にまで波及し，「大ドイツ」建設の政策論へと拡大してゆき，しかも当時，ナチス・ドイツと「枢軸国」の関係にあった日本では，いわゆる大東亜共栄圏建設の政策論の思想的基盤を形成したからであった。

• 当時我が国では，ドイツ Geopolitik 研究の紹介が行われて紹介され，日本でも海軍中将上田良武氏を会長に（上田氏は戦犯として巣鴨の拘置所で死去）日本地政学協会が組織され，雑誌「地政学」が昭和17年1月より刊行され，一二年続いた。大東亜共栄圏を中心とするさまざまな地政学の研究成果が掲載された。当時我が国地理学界の第一人者Eをはじめ，特に政治地理学者を中心に一国際法，国際政治などの専門家を含め，さかんな研究が進められた。軍の参謀のある高官は，「世界の政治は正に地政学的理念のもとで進行しつつある」とまで述べたといわれる。我が国の文部省の地理の教科書も地政学的内容に塗り変えられ，大東亜共栄圏の地政学に中心が置かれた。

しかし結果は，枢軸国の敗戦に終わり，我が国では戦前戦中，地政学の研究と普及に関係した諸家はいわゆる追放にかかり，教壇を追われ，学校での地理の教科は歴史と共に一時停止された。ドイツでは敗戦の後の混乱の中，ミュンヘン郊外の静かな環境の自邸において Geopolitik の中心 K. Haushofer は服毒自殺をとげた。自殺する少し前に彼がある新聞記者に述べた言葉は「私は科学者であるより先に一ドイツ国民であった。ドイツが敗れた現在，自分の存在の意義はなくなった」ということであった。この言葉の中にドイツ Geopolitik の本質が示されているように思われる。そして彼の助手で後にヒトラーの副総統となったルドルフ・ヘスは単身飛行機で英国に逃れたといわれ，一時，気が狂ったともいわれた。そして彼は昭和62年8月17日西ベルリンで死去した。（長年拘置所にあった。）

• ここで，この地政学について種々反省，批判を試みたいと思われる。先ず，地政学は純粋科学というより政策論であり，「どうあるか。なぜ斯くあるか。」の究明ではなく，「どうあるべきか」にその中心が置かれていたということである。「どうあるか。」から「どうあるべきか。」はそのまま出て来ない。「どうあるか。」はあくまで現実認識で，「どうあるか。」がそのまま「どうあるべきか。」になるのなら，それは現状維持で，そこには一歩の展開はない。「どうあるか。なぜ斯くあるか。」に人間の理想（哲学）が加えられることにより始めて「どうあるべきか。」が生じてくるのであって，理想の実現（この理想の実現には，数多の具体的方法やそのための技術が考え出されねばならない。）こそ一文明の発展の動因であるからである。よって「どうあるか」の認識なくして「どうあるべきか」は出て来ないし，また考え出されない。そして科学の任務はあくまで「どうあるか，なぜ斯くあるか」の認識にある。ドイツ地政学は「どうあるべきか」にその考察目標の中心が置かれ，その基盤をなす「どうあるか」がおろそかにされていたのである。これでは正しい理想の実現やその方法が考え出される筈がなかったのである。そしてドイツ地政学の「どうあるべきか」の基底にはドイツ帝国主義時代の政策を反映していると評される F. Ratzel の政治地理学の思想が，全く学問的反省のないままにとり入れられ，地理政策論に転化していたということができる。

しかし，ナチス・ドイツの地政学為通の如きように，それまでの地理学（ある意味で現在の地理学も）はいかに無目的であり，如何に非実践的な性格をもち役に立たない未熟な学問であったことか。やはり学問は実践性をもち，実践に結びつくものがなければ（即ち実学でなくては）無意味であろう。学問は現実の社会の中から生まれ，育てられ，社会の発展に貢献して来たものであり，社会の発展から遊離したものではないのである。学問とが純粋科学というと，如何にも現実の社会やその動

きと別世界のものであるかのように思われるが；学問が生まれ，育てられてきた土台や環境，その及ぼす影響をみると決してそうではない。勿論，学問は，それ自身の目的，方法，本質に依拠し，それ以外のものにたやすく影響をうけるべきではないかもしれない。が，実践性はどのような科学にもつきまとうものであり，ある意味ではその目的でもある。地政学は，たとえ世界に不幸な事態を惹き起した結果をもったとはいえ，それまでの地理学に実践性を自覚させたことに地理学史上の意義を認めなければならない。ただ，その実践性に目覚めた以上，地理学は人類社会の幸福と発展に寄与する責務をもつことになる。それだけに，地理学の実践性への途については十分検重があらねばならぬ。そしてその基礎となる地理学の研究・究歴に重大な使命の自覚と節度が必要であろうし，また大いに意欲的でなければならないであろう。世界の歴史をふり返り，現在の世界を見渡すと，いかに国土や領土，境界に関する問題が多いかをみるにつけ，これらを一定のルールのもとで平和に解決してゆくための新しい地政学の提唱が期待されねばならぬ。現実の世界を力の論理で認識し，力で押し続けようとする限り，世界平和の理想はほど遠いものとなるばかりである。「平和の地政学」こそ期待されねばならず，そのためのその基礎となる地理学の建設が求められねばならない。

○ ドイツにおいて，かつてRatzelが，後世，地理学史家により地理的決定論と烙印される人類地理学の思想を展開していた頃，隣のフランスにおいて，正に対照的な人文地理学思想の発展がみられたことに注目すべきであろう。

Paul Vidal de l'Blache（1845～1918）である。

彼は1845年，南仏のPezenasに生まれる。Lycée charlemagneを経，苦んでEcole Normale-Supérieureに学び，1866年，

歴史と地理の教授資格を与えられる。（Ecole Normale-Supérieureは辞典で高等師範学校とあるが，日本であった高等師範学校と異なり，大学教師の養成機関であり，フランスにおける当時の最高学府であった。この学校では地理は歴史科の中にあり，歴史と地理の大学教員の免許を受けた。）卒業後，1867年アテネのフランス学校の教員となり，（途中イタリアに赴く）滞在），アテネに居ながら執務の傍ら，ギリシャ，小アジアの沿岸地方，シリア，パレスチナ，エジプトにまで足を伸ばし，1869年，開通前に，レセップスによるスエズ運河の開通をみた。運河の開通により，世界史が大きく転回しつつある現実を目前にし，この頃から地理学者としての天職に目ざめた。Ritterや Humboldtの著作を読み，その影響をうけた。

1870年に帰国。アテネでの論文をまとめ，ソルボンヌ大で学位を取得。のちAngersの学校で教鞭をとる。1872年10月，ナンシー（Nancy）の文科大学（ママ）に歴史及地理の講師として招かれる。しかし歴史の講義が多く，1875年，その努力が認められて，地理学の正教授となる。のちドイツに旅行，ライプチッヒでPeschel，そしてベルリンで支那から帰ったばかりのF. Richthofenに会う。さらにF. Ratzelとも交渉をもつ。（Ratzelのもとに修学）ナンシー大文化大学では1873年に開講，十年間続け，大変好評。この頃，アフリカではLivingstoneの探検，Stanleyの探検，ムンゴ・パークの中西旅行，アメリカではPowellのコロラド峡谷の調査などあり）彼自らもロレヌ，ヴォージュ，アルザスなどを旅行。そしてヨーロッパの旅で全部，アルジェリア，チュニジー，モロッコなどの辺境，北米合衆国，カナダ，メキシコの一部などをあく旅行し，地理学は書斎の学問ではない，という。1877年1月にパリーに移り，母校で20年間在職して地理学を講ず（史学部に属す）。また自然科学との関係にも留意し，彼自身，地質学者などと交渉，

共に実地調査を行った。Atlasを出し，Annales de Géographie (1891) を刊行，1898年パリー大学の文科に移り地理学を担当す。1918年，Tamaris-sur-mer で73才で逝去す。Blacheの門下にはL. Gallois, A. Demangeon, J. Brunhes, C. de Martonne などの世界的地理学者が輩出しており，特にMartonneは国際地理学会の会長をつとめた自然地理学者で知られている。彼の門下に斯かる世界的な自然地理学者が輩出したことは，彼は人文地理学の専攻者であるが，自然地理学を重視していたことのあらわれであろうとされている。人文地理学の専門家にしても彼の学風を継承ぎ，地誌的色彩の濃厚なものであることが知られている。彼の代表作は "Principes de Géographie humaine" (1921) "Tableau de la géographie de la France" (la personalité géographique de la France) 1903 など地誌的作品が多い。現後門下達は "Géographie Universelle" なる巻を刊行した。

- Blache は Ratzel と並び同時代の人でありながら，人史学者としての素養に立脚し，人文地理学の開拓に為したものであり，影のうすかったフランス地理学を近代科学の水準にまで引き上げ，人史科学としての確立方向を与えた点，おおいに大きな功績を残している。人類は地理的条件の制約をうけるが，またいっぽう，地理的要因として自ら行動する主体である。人史をになう人間が，地上に長い間刻みつけた種々の足跡をみるのであり，地理的現象の把握には，かかる人間の積極的能動的な面を強調する必要があり，そのため，地理学の分野に人史的観察を導入することが極めて大切であった。史学の素養をもつBlacheはこの点恵まれた状態に置かれていた。彼の最も称賛された点は，ラツェルの優秀な後継者としての世界地誌的観察とともに，いわゆる

フランス人文地理学派としての創始者としての地方誌的な特徴を併有するにあり，「人文地理学原理」の序文には，「一つの場所においてすべての有機的生物体が周囲を取れる環境に適応するその相互関係」をもって人文地理学の目標であると，生物地理学の例を用いて説き，ここに環境論的傾向を知るのであるが，Ratzelのそれと異なる点は，人史的社会的存在としての人間を認めていることである。すなわち人史性（人史的人間）を重んじている点とは，例えば集落の型式を論ずる際にも，たんに自然的条件，地形や土壌からのみ説明するのではなく，「集落の諸型式の相異を区別するため，自然条件と生活様式との関係から分析を行い始めると，古い文明地方は，その複雑性のため観察を最も困難ならしめる。例えばフランスや中央ヨーロッパにおいては特に複合的様相をなし，更改や不調和から成立っている。そこにみられる諸形態は社会的差異の表現であり，時には民族的差異が現れるのが屢々認められる。工場が農家の隣に建てられ，農園の傍に城がなたたる。何故ここではフランドル風の民家がブルゴーニュ風の農場に隣し，あそこではアルザス風の村落が元来としてロレーヌ風の村落に隣しているのであるか。極めて多数の影響が交錯し，その間では民族的伝統は識別するのに困難な程である。如何に注意深く分析を行ない，如何に微妙なニュアンスの結合があるかを感じ取ばならぬ。而してこの複雑性自身はそれ自身教えるところがある。(P171) かくて一地方はその自然的人史的社会的条件の結合として集落形態の地方的特徴の形成を認めたのである。集村と散村に関しては「比較的地表面の均一な地形と土壌の同質が支配的である地方は，それに居住する多くの人員に対比して，一般に密集的村落が集合している村落がある。」とし，リヒトホーフェンの「支那」から引用し，「それら（村落民は）共通の祖先をもつかもしくは共通の保護を有する家族の集団であって，同一作物の耕作

× 人間が地理的環境(自然!)と関連上たのは集団そのもの(ブラーシュ,人文地理学原理)

NO 44

DATE

に協同する必要のため相互に団着しているのである。」とし、支那のみならず インダスやガンジスの平原には完全な村落共同体が発達し固定し得ている。かかる密集的村落の起源を単にその自然的条件のみならず、社会的歴史的に観察する。そして農業の協同性、水の処理、井戸の掘さく、共同的諸事業の遂行のための集合の目的を明かにした。斯かる見解は更に民族性に関しても同様に適用された。

• 彼はRatzelと同様、文化の発達に関しては、文化の接触孤立の問題から説明をしている。即ち原始的段階に留まっている民族は、その居住地が孤島や山奥や森林中であって孤立しているからである。それに対し発達している例としてヨーロッパの例を引いて説明している。その説明はたんに地理的自然の特性と関連させて述べているのみでなく、社会的歴史的存在としての人間のあり方を認めながら説明している。ヨーロッパと対立する例として支那社会の例について次の如く述べる。「支那社会の基礎が家族であるといわれているのは全く正しい。厳重な階級的制度が祖先への共同的崇拝により結合せしめた各家族成員を社会的に結合している。この家族の結合力がこの社会の人口を増大し、共同的訓練を拡大するに役立ち、また社会的道徳の本源であったことはいうまでもない。しかしそれは発達を妨げなかったか。家長的秩序に適合していることは近代的社会に対しては適合しない。家長の庇護が自律的精神を抑圧しなかったか。また個人の発達を妨げなかったか疑問である。(近代社会における)因習の破壊者たる個人主義は、(人の)誕生以来生存のためあらゆる行為に影響し、死後でさえその手をゆるめないものであるが、支那では(その社会の)枠の中においては(個人主義は)何らの地位をも有していない。」またロシヤについても、「既に注意された如く共同体的制度の強大な発展は、稠密な人口を有する地方にあってさえ、

× ヨーロッパ各地域の交流は民族移動のみならず、異質的な諸地域間の商業交通や政治的関係によるものである。(それに対してモンスーンアジアの諸地域は等質性をもち、閉鎖的社会が広大な領域に亘って

NO 45

DATE

地平線(即ち世界)を狭くし、生産物を少くして人工的孤立をつくっている。北インドに行われている村落共同体やロシアのミール(村)、西ヨーロッパの一部に集合した古代の村落集団の古い組織などの如きは、特殊な貿易や農業の方法や三圃制の如き輪作法の永久の保存の如きとなり、それが一度び固定せられるならば、それより脱出することは出来なかった。(CP204~205) かかる村落共同体に関する記述は数多く見出される。かかる見解は、Ratzelの環境論では全く見出されないところであり、彼独自の地誌的見方の上に立っている。また、文化の発達しているヨーロッパについては「現代、西アジア、北アフリカにおいては接触の絶えたことがなく、またむかしローマのあの繁栄はあたかも現代の世界の如き接触を思わせるものがあった。殊にヨーロッパにおいては全く異質的なものの接触の結果である。それは沖積土の深き諸々の大河谷でもなく、生ぬるい地中海の水でもなく、何れもそれのみでは種々の文明発達の永続性を説明するに十分ではない。世界のこの部分の水陸の分布、山地や平原の組合せ、森林と草地との近接が、このような地理的諸因の結合として、かくほど効果的であった場所は他にはなかった。一つが他の動因となった。即ちアメリカ文明は富源にのみ恵まれ、支那文明は幾多の点において余程注目すべきではあるけれども、殆ど平原に限られていた。ヨーロッパ文明はその起源において人口の中心に始まり、多くの地方的環境の内容を吸収した。これら地方的発達と相互の接触を維持せしめ、永里完成への過程を経て、ヨーロッパ文明が豊かなる富となり得たのである。」と。

• 彼の地誌的考察はたんなる平面羅列的な単純な地誌的叙述ではなく、その地域における地理的統一性(unité géographique)の把握を目指すものであった。この地理的統一性はその地域の地形・地質・気候などの特性、統一性を意味するのではなく、

その地域が国家の領域であるならば，その国家をつくる民族の歴史的統一性であり，その歴史的統一性はかかる地理的条件によって与えられるものである。ここに彼の国民主義的精神の主張がうかがえる。彼は異質的な諸民族の同化過程を，その地理的環境と結びつけて次の如く述べる。「永続性の多いとされている人類学上の指標によって住民の要素を分別してみると，ほとんど例外なしに大地域のみでなく，小面積の地域でも同質性を欠如している。フランスにおいても，人類学の識別したところによると，僅かな例外を除き，歴史時代まで遡り得る基礎的要素と後代の要素とが一地方，時には一緑内にも混在しているのが認められる。しかこの異質的集団は一地方の住民となって，その総体が一体となって社会的組織を結んでいる。これは即ち，要素の相異を克服して共通の適応を現出させた強迫力によるものである。人類の結合は動植物の結合と同じく，環境の影響をうける数多くの要素からできている。そして各々は如何なる方法で如何に彼らを結合したか，何時何処でそれを行ったかは知らないが，しかし一地方に恭存して少しずつその印象をそこに刻みつけた。即ち地理的環境は民族性の生みの母であり，フランスの国民性はまたかかる点から発生した。「フランスの地理的位置は単に地質的気候的諸条件からの結果ではない。それは純粋に自然の手のみから合成された物ではない。我等が発見せられねばならぬ考え方は，次のことである。即ち国家なるものは，自然の胚胎の中に蓄積せられ，その使用を人類に委ねている眠れるエネルギーの倉である。人類こそ，使用のため自然の型を刻みつけ，之れにより国家自身に位置を表現せしめる。人類は地方の諸特徴の無目的な外観に代って無関係な諸現象間に聯絡を設け，諸力の組織に結合をつくる。」彼はかくて地理的統一性の概念を主張し，

×飯塚浩二訳"大地と人類の進化"－人文への地理学的序説－
岩波文庫 上・下．(昭16)

Ratzelの如き性急な牛乎落ちな普遍化の結果，普遍的法則なるものが個々の現象に還る途が失われるようになりざるようにと，地誌的研究の重要性を強調したのである。彼はかかる地誌的叙述に関し優れたセンスをもっていた。彼の門下，後輩たちは，何れもかかる地誌的立場を固執発展せしめ，歴史的観察の強調とともに「フランス人文地理学派」なる地理学における大きな組織をつくりあげたのであった。

× ○ P. V. de l'Blache の門下の Lucien Febvre (1933年以降，Strasburg の大学よりパリのコレージ・ド・フランスに移り，人文地理学の講座を担当す．) は，その著 "La Terre et l'Evolution humaine, Introduction géographique à l'Histoire", 1922 ("A geographical introduction to history", London 1925) において F. Ratzel の所説を批判して，いわゆる地理的可能論 (師の de Blache をこの可能論とした) を提唱した。その要点は次のとおりである。

1. F. Ratzel の所論 (後世，所謂「地理的決定論」と呼称された) は極めて単純(性急)な立論がお粗末であり，何れも彼も十把一からげにして法則樹立をはかろうとし，したがって例外だらけの普遍性に立つ法則を考えた。これでは普遍性を貴ぶ科学としては落第である。

2. F. Ratzel の所論の如き地理的宿命論や自然環境の画一的な影響などというものはなく，人間は創意に富んだものだ，自然はたかだか可能的条件としてあるのみである。

3. いわゆる地理的環境論における人類と環境との関係に関する問題は，むしろ人類学，医学，気候学などのテーマであって地理学のテーマではない。気候は植物を媒介として人間に関わりをもつものであり，気候－植物－農業－社会の関係である。

4. かくて地理的可能論を提唱した。地理的条件は人間

×野間三郎「歴史地理学の発達」(朝倉地理講座、第1巻)

にとってあくまで可能的条件として開かれたものであり、いくつかの可能性の中からどれを選ぶかは人間の自由意志に委ねられている。Febvreの可能論については前出(ノートp11.12 掲出の2論文、p3のp7、高山岩男論文)論文を参照。

○ 歴史地理学の呼称の発生、普及。

× • ルネッサンスの科学の復興とともに、Ptolemaeusの地理学が復活し、その頃地理学はgeographiaではなく、Cosmography(宇宙誌)の名で行われていた。(これは2世紀以来のものであり、Sebastian Münster(1501~52)の"Cosmographia"がある。これは地誌的なもので、一方地図、位置測定などもこの名で行われていた。)この"Cosmographia"が次第に姿を消し、代ってGeographiaがとり入れられるようになる。その発起はCluverea Philip(1580~1622)である。そしてVarenius Bernardus(1622~50)に到ってはっきりとGeographiaとなった。新地理(neue Geographie)に対する古代地理(alte Geographie)或いは古地理の名のもとに、その序論のところに古代における地理学の概観が試みられた訳り、それはKiepert Heinrich "Lehrbuch der alten Geographie"(1878)である。この alten Geographieがのちにはalte Länderkunde, さらにhistorische Länderkunde の名を呼び起すこととなる。historische Geographie(歴史的地理学)(これは数理地理学 — mathematische Geographie に対する)の表現がとられたのは17世紀の後半と考えてよいであろう。この名は、今日の意味における「人文地理学」の意が表わされていたことである。Wagner, H. によると、1661年版のCluverの序文に Cortiusの記した文章のうちに表われている。この分野はやがて数理地理学、自然地理学(physische Geographie)、と歴史地理学の三分野となる。そして「歴史的」が「人間の」を意味することになる。

• 地理学の効用が重視されるにいたり、主として「政治地理学」(Politische geographie)の名が人文地理学が考えられた。しかし、歴史地理学は地理学との混在を完全に除き去り得なかった。歴史の奉仕者、いわゆる歴史の奴婢としての地理学の伝統の問題に、あとに歴史地理学を残した。地理学は、神学者、哲学者、逸説家、歴史家、数学者、文法学者、詩人、君主をはじめ、政治家、商人、航海り、農夫らにとってとくに有用であるとするのは15~16世紀の頃の地理学書の一般の態度であった。

• 一時、歴史地理学と地理学史が混同されたこともあったが、地理学史は地理学の発達史を急ぎ来するようになり、現在では完全に別々のものをいうことになった。但し歴史地理学の方はいろいろな意味があった。Hartshorn(野村訳 地理学方法論)によると、歴史地理学には三つのタイプがあるとする。彼は先ず、歴史地理学の目的を、ある土地の偶然の歴史的発展のあとを追うことにおくものと、単にある時代の地理を復原することに置くものとの二種とし、さらに第三のものとして、もっと密接に史学に接近する歴史地理研究の型があるとし、ある地域の二つの異った時期の比較を目的とするものを挙げている。彼のこの第三種は、われわれからすれば、むしろ第一のものに含まれるべき要素とすべきであると思われるが、彼は三種のうち第二種をもって歴史地理学のあるべき立場としているようである。まわりくどく歴史地理学と呼べるときには、そこに歴史の地理的背景を論ずるものと、ある時代の地理的状態を歴史的考察によって明らかにするものとの二種類が目に映ずるであろう。両者はともに、今日においても併存しているが、「歴史の地理」ともいうべき前者はより古くから存り得る立場とすることも出来るであろう。実際には、この両者は「歴史地理学」が独自の科学として発足した当時から存在し、今日も併存している。

• K. Ritterのベルリン大学における講義とその影響のもとに、多くの歴史地理的研究が輩出した。この二つの流れの一つの締めくくりとし

て，19世紀の終りから20世紀初頭にかけて行われた歴史地理学の本質をめぐって盛んな論議がある。これは一方では19世紀における地理学の進展と併行するものであり，同時にまた20世紀の地理学の進展を大きく規定することになった。Hettner A., Richter Ed., Partsch J. Kretschmer K., Götz W., Oberhummer E., Sieger R. 初代 Kirchhoff R.（以上歴史），Radlich O.（歴史），Beschorner H.（以上歴史）など。地理学者の多くは Ritter の門に出た。Ritter の門弟であり，早い頃の歴史地理学者である Oberhummer は1893年に歴史地理学の主要な仕事を「土地柄における人間の空間的分布を，民族・国家・交通路・集落について，歴史的発展の完全なひろがりにおいて研究」することにある，としている。（これは Oberhummer 一人の定義でも傾向でもなく，古い頃の歴史地理学的研究の一つの特色を示すものとみてよい。それはまた，歴史地理学の確立にとって決定的な理論的投資であったということができるであろう。）

- Ritter の門下でないにしても，1870～90年代に各大学で地理学を講じた人びとが歴史地理学者が多く，ドレスデンの Sophus Ruge，ボンの Alfred Philippson（地理学の），ベルンの Günther S. などがあった。歴史地理学はこの頃の地理学の中心であった。Ritter の門の筆頭ともいうべき Heinrich Kiepert（1818～99）の研究の主力は古代史の舞台を地図化することに注がれたということができる。リッターが没して後，空席であったベルリン大学教授の席を継ったものである。その門に出た Sieglin W. も同じく歴史地理学者であるが，彼は古典学的傾向を強くし，歴史地理学を古典的古代学の補助学とする傾向もあった。（歴研）
- 英国の歴史地理学の祖は，1841年に Oxford 大の古代史教授となった Arnold Thomas である。彼は早くから地理学に関心をもっていて，オックスフォードに在学中地質学講義を聞いて回っていたが，彼

を歴史地理学に導いたのは，Niebuh B. G. のローマ史であったという。彼の著書「ローマ史」（1838）は上巻に「ローマ市，その領域と風景」の章があり，それに自然史の論議が付加され，彼は近代史の学徒は特に地理学の知識を必要とすると述べていたという。彼は講義の中で，「地理学の真の知識とは，地球の知識と，その上に営まれる人間居住を同時に包括するもので，それは一方では歴史に，他方では地質学および生理学に生ずる。それは知識の王国の中で，自然および精神科学の研究者が会合する正にそのところを占めているのである。」と述べている。アーノルドは在職1年で死亡したが，その門に Stanley A. P., Freeman E. A. などが出，とりわけその影響は一方で George Adam Smith の「パレスチナの歴史地理」（"The Historical geography of Holy Land" 1894）となる。そして1887年に Mackinder がオックスフォードで地理学を講ずるに到るまでは，イギリスの歴史地理学はもっぱら歴史家によって養われてきた。それで，イギリスの歴史地理学における近代の始まりとされる Freeman の役割は，地理学の重視というのは，彼が施行をすすめたという表にあらわれなければならぬ程度であった。

- Ritter 以後，第2の時期として Götz W. は次の如く述べている。「地理学は地表を構成する諸要素の性質（Landschaftlichkeit）の接続的発展，その作用，その結果を，それぞれの時期に従って，また実現された状態の系列を，概観と比較することによって観照をえることにあるであろう。このごとき認識を養うのが歴史地理学の仕事である。」とする。Götz の上記の結論には（1）ある時代の地表，（2）ある時代の地表と他の時代の地表の比較，（3）変化発展の経起，系列の考察の三つを共に任務として含めている。19世紀の終りから20世紀のはじめにかけては，ドイツにおいて歴史地理学が活発な活動と，多くの作品が生み出され，またこの学問の方法についても討究が重ねられた時代とされる。それはリッターの学問が歴史地理学

としての面を受け継がれ，その門弟達によってドイツを中心とする歴史地理学の成長と発展によるものであった。前に示されたそれらの人達の業績と立場をいま振り返ってみると，それは古代地理ないしは歴史的地誌（historische Länderkunde）といわれるものから，過去の人間の生活の全領域への視界の拡張によるものということができる。……歴史地理学は人間の生活の全領域に視野を向けることによって，人文地理学の全領域に関連をもつことになる。」

○ 歴史地理学の諸名称

(1) 歴史の地理的基礎（geography of history，あるいは geography behind history）

(2) 過去の地理，時の断面を復原するという（Hassinger），あるいは歴史的現在の研究という（Mackinder）こと。

(3) 今日の地理は過去の歴史なくして理解できない。これはある意味に於いて地理の歴史的解釈であるが，この立場は甚だ多くの立場を生む。第一にこれをもし歴史地理学とよぶならば，あらゆる地理学は歴史地理学と化するし，事実それを主張する人も有る。しかしこれを地理学の部分あるいは重要な手段にすぎぬとするのでなくては，歴史地理学がすべてとなって，歴史地理学という名称自身は殆ど無意味になり終る。過去，あるいは時間に関わりをもつものは全べて歴史的だとするのは，いささか単純であるというほかない。むしろ今日の地理から出発し過去の地理を理解しようとする立場が(3)のあるいは(2)の思想の実際的アプローチとして表わされるものである。尤もこれは単なる手段と考えられる場合と，次の(4)の立場に結びつく場合とは異った意味をもつ。

(4) 地理学が独自の目標をもつことを強く意識する立場から，地理的現象の変化の法則追究を試みる立場が多くある。Ritterが「地理学における歴史的要素」とよんだ思想の真意もここにあるようである。景観の発展を追求したり（Spethmann）（Schlüter）あるいは

はその部分的構造の発展の過程を試みるSauerあるいはWhittleseyなどにみられるもの――これはむしろアプローチとしてであるが，一応どがまずあげられるであろう。　この点に関し，藤岡謙二郎は次の如く述べる。

「実情はむしろ歴史地理学といわれるべきものが果してな在し得るかを問うことからはじめることの必要を感じしめるのである。これはただ習慣的に存在しているのにすぎず，方法として存在しないとすら考え得る。歴史地理学を方法として進むと，地理学の体系の中に組み入れようとしてほとんど何人も成功していない事実はこれを物語るのでなかろうか。」

• 「過去の地理」が歴史地理学の本質であるとする人々の歴史地理学。イギリスに於ける近代地理学の開始者であったMackinder H.J.，その系統にTaylor Eva. G. R.，Darby H.C.，East W.G.，などを輩出，歴史地理学の課題と性格を「歴史的現在の研究」と規定。「歴史的現在の研究」とは「過去のある時代についての地理学」とする。Mackinderが前のOxfordでは，Green J.R.（Short history of the English people－1874），Freeman E.A.（The methods of historical study－1886），George H.B.，（Relation of geography and history－1901）にせよいずれも歴史家であり，その立場は「歴史の舞台についての知識」と，それが自然が歴史に如何に働きかけたかという決定論，バクル以来の伝統を負うものであった。1905年にMackinderの後を継いだHerbertsonは英国の歴史地理について6つの講義（course）を設けた。（ローマン・ブリテン，サクソン・ブリテン，中世（Mediaeval）ブリテン，ノルマン及びAngevin（アンジュー）ブリテン，スチュアート・ブリテン，18～19世紀ブリテン　の6つ）さらにそれらは受け継がれていったが，その成果は統一なく続くにとどまり，それが今日のイギリスの歴史地理の高価を高め，イギリスの歴史地理を代表する作品となっている。（Darby H.C. "An historical geogr-

aphy of England before A.D. 1800, 1936)
(Earl G. "geography behind history") 後者は,
人間の歴史的行動を地理学の中に取り入れるという点でリッ
ターを, その環境の研究を明確に主張する点で Ratzel,
Mackinder を受け入れ, その方法としては, ブラーシュの「地域地
理学」の理念を正しく取り入れているということができる。
歴史地理学は過去の文化景観を復原し, その成立時の文化的政
治的事情を説明すべきものであるとする考えは, 今日もちろん
多くの人々のよって立つ立場である。小牧実繁, Hassinger H. "Geo-
graphische Grundlagen der Geschichte" 1953,
Mitchell J.B. "Historical geography" 1954。また景観
論の思想の大成者である Hettner A. "Das Wesen und
die Methoden der Geographie" 1905 の思想の根幹であ
った。景観が学としての地理学についての考えは歴史地理学
の有力な支柱となった。1910～30 頃までの歴史地理学につ
いての著作はほとんどこれに基づく。

• Hettner を支柱として, 歴史地理学の任務をある特定の過去
の時期の景観の復原とその記述に中心をおく思想に立脚して,
景観あるいは地域の系統的変化の追跡に力点を置く立場がある。
Darby は景観の復原とその記述が極めて困難をさけるには
二つの方法をとげ, 一つは水平的方法, 他を単直的方法としている。
後者は sequent occupance あるいは development of
landscape の追求とよばれるものである。Darby も断面連
続法あるいは連続断面法ともよばれる一連のもの (successive
cross-section) は断面の連続によって, すきに述べた欠
点を出来るだけ少なくしようとするものである。Darby のこの例に従えば: マイ
ヤーが北部インディアナおよびイリノイにおけるかつての湿地
(Meyer A.H. "The Kankakee marsh of northern

× 森鹿三, 微田武雄「歴史地理講座」(朝倉書店) 中の
田辺悟一著の論論による。

Indiana and Illinois — Papers of the Michigan
Academy of Science, Arts and Letters 21, 1935) で
この地方の土地利用の変化の時期にしたがって,
(1) インディアンの狩猟およびフランス人の貿易時代 (1840以前)
(2) 毛皮捕獲と開拓農業時代 (1840～80)
(3) 牧畜と造林時代 (1880～1910)
(4) 小牧地帯農業と水浴地時代 (1910以後)
の4つの断面を構成することを試みているし, ダービーの「1800
年以前の「イングランドの歴史地理」においてもこれをおよそ10の時代
に区分して, このような意図を表している。単直的方法とよばれるも
のは, これと異って, いわば時間別にその発展を追うもので森
林地帯の開拓あるいは退歩・湖面の干拓などの進捗に
伴う景観の変化・推移などを追求するものである。Darby 自
身はこれを "The changing English landscape" (Geo Jour.
1951) なる論文中で試みた。今日にも痕跡を留めている土
地古居の時代層の発展の系列を追求しようとするものである。

× ○ 日本の歴史地理学の展開.

• 古くは元明天皇の和銅6年 (713) に「風土記」が編述され, 我が国
最古の官選地誌 (現在常陸, 出雲, 播磨, 豊後, 肥前は完全が
残存する.)。元禄年間, 長崎の西川如見 (1648～1724) が
「日本水土考」を著す。序文には「地理」の語がある。幕藩時代,
1810年 (文化7), 幕府の学問所に「地理局」が設けられ, 多く
人の幕吏が「武蔵国地誌」の編纂に従事し, 「新篇武蔵風土
記稿」(265巻 80冊) を1824年に完成す。維新後太政官下に
地理と歴史の関係の局が設けられ, それが分離して地理は地
理局に, 歴史は大学南校 (東京帝大の前身) に移された。そして
史学科に属したが, 史学科に歴史地理を主とする地理の部門
を設けるつもりであったが, 行き違いとなり, 明治39年京大文化

21

大学に史学科の創設される際，史学地理学（歴史地理学）の二講座が設けられて，日本の帝大ではじめて歴史地理学の講座が設定された。日本歴史地理学会は明治20年に東大史学科の教官や卒業者の発企によって創設され，その趣旨目的は歴史地理学の研究，普及にあった。しかし指導的立場にあった後には地理的歴史学に偏した観がきを持たない。明治30年代，喜田貞吉三博士が早大の講義録に載せられた「歴史地理学」は，後に単行本ともなって，わが国におけるこの方面の単行本としての嚆矢となった。その後2，3，歴史地理の名で著書が出たが，地理的歴史学があるいはその材料といったものである。大正12年，富山房から刊行の吉田東伍博士の「歴史地理の研究」は学会で注目された。昭和3年，4年に刊行の小川琢治博士の「支那歴史地理研究」とその続集は，今を花のごとくである。昭和6，7年頃，地人書館の地理学講座に喜田貞吉博士の「日本の歴史地理」の題で日本国内の国境界の変遷が発表され，同じ頃，岩波書店の地学講座に小牧実繁博士の「先史人類の生活と環境」が載せられている。

- 1958年（昭33）4月29日，日本大学での第1回総会・学術大会をもって日本歴史地理学研究会が発足，昭和41年（1966）より歴史地理学会に改称。紀要の刊行は平成2年度の32号「変革期の歴史地理」で終り，その後は機関誌「歴史地理学」の特集号として従来通りシンポジウムの成果を掲載して刊行することになった。かくて機関誌「歴史地理学」は年に5回刊行となった。

そして1962年（昭37）の総会に於いて「考古地理学のシンポジウムが行われ，その際，従来「遺跡歴史地理学」を「考古地理学」（Archaeological geography）とまぎらわしいことに議決し，1963年の紀要5号は「考古地理学」を特集した。（これは藤岡謙二郎氏の提唱による）このことは特集（紀要）5号「考古地理学」の小牧氏の序文にある。

○歴史地理学の本質と方法について。

- 学問の研究には必ず"研究対象"と方法がつきまとう。先ずその対象はどのようにあるか，何が，どのようになっているかなどの質問（英文の疑問詞でいえば what）に答えることが必要である。そしてどのようにして（方法）で明らかにするかの問題も必ず存在する。（疑問詞では How，方法，手段）。しかし問題をさらに深める場合，what に対して why の疑問詞に対する答えが必要となる。どうあるか，何故斯くあるか，そしてこの問題については それに関して何故斯く成り立ったかの疑問に答えることも必要となる。この why については その要因，原因を明らかにするための何故斯くあるか，何が原因で斯く結果するに到ったかの疑問もでる。このようにして何を対象とするか，それはどうあるか，を明らかにし，さらに進んで何故斯くあるか，何のようにして斯くなったか（経過，形成の過程），有せそうなったかを明らかにすることが必要となる。この原因・結果の因果の関係は地理学の場合どのようにあるか？ 又明らかにする方法，手段も必要になる。地理学の場合，また歴史地理学の場合はどうなるか？。歴史地理学と地理学の一合物であるので，当然地理学の対象，方法と関わりをもつことになる。
- 歴史地理学は，地表における諸居住地域（occumene）の過去の実績を明らかにするとともに，その変化・発展の実情と様相を会得する人文（歴史）科学である。その会得の際に必要なことは，対象とする諸居住地域における地理的環境と人間活動との関わり，および他の地域との関係（直接・間接の関係）を明らかにすることである。そして如何にあるか 一実情一，いかに変化してきたか 一各時点における居住地域一復原した 一を比較してその変化の要因を明らかにすることである。 又いっぽう，現在の居住地域を中心とした諸問題を扱う人文地理学の諸分野にとっては，過去の地域の実情

を知り，その実情の形成・展開の過程の中に当該地域の地理的環境と人間活動との関わりを究明，あるいは他の地域との関わりの中に形成されてきた機構を究明し，当該地域の現情の形成されてきた機構を明らかにすることによりその地域のよって来たる理由を究明することができる故に，「史地理学は史しこの為の研究法，あるいは研究操作であるといい得る。現在を中心とする諸居住地域の現状は，やはり過去からの変化発展の結果であるからである。即ち居住地域の諸状況はどうであるか（いかにあるか－What），それは何故(why)そうなったのか，それのためには）どのようにして斯くなって来たか（How）について究明することが必要であるからである。居住地域はすべて人間の形成したものであり，形成の過程それは地理的環境との関わりや，他の地域との関係があるからである。

- ここでいう居住地域（oecumene）とは，特定の領域の自然（地理的位置，面積，距離性，地質，地形，気候，動物，植物，土壌，陸水，海洋，人種，数理地理的自然など，而もこれらの諸要素は相互に，直接間接に関わりを（何らかの程度において）もち，特性ある地域の個性を形づくっている。）とそれと直接間接何らかの形において，また程度において関わりをもつ人間の社会集団とから成っている。この社会集団の大きさ，性格などから居住地域は郷土，地方，国土，広域圏，民族の領域，都市の領域などに分類することができる。これらは一方が他を包摂するように入れ子になっており，さまざまな居住地域を分けることができる。
- なお如何にあるか，どのようにして斯くなったか，何故斯くあるかなどの言明，分析に続いて，どうなるであろうか（予測），どうあるべきかなどの未来にかかる問題が当然起り得る。所謂応用地理学（Applied geo—）の基礎には必ず「史地理学がある。過去，現在の地理学の上に人間の理想が加わって将来の居住地域の姿（将来像，未来像）を

描くことができる。

- 「文地理学は地理学の一分野を構成する（過去の地理，変化発展の地理）とともに，人文地理学の研究にとっては欠くことのできない研究法あるいは研究操作である，から，人文地理学の調査・研究法と共通するものがあるが；いっぽう，過去の地理であるが故に，過去の居住地域の実情を明らかにするため，さまざまな資料（史料）の収集が行われる。地形図，地籍図，村絵図，町絵図，家屋見取図，近世の歴史史料（村明細帳，検地帳－水帳，）助郷人馬出帳，潅漑水利図，海図，浜図，土地台帳，過去帳，その他遺跡，遺物，などが収集される。その他「文学で使用される様々な文献類，史料にも及ぶ。

3. 先史地理学の諸問題.

人類の地表への出現はおよそ第三紀末頃（800～300万年前）といわれ，人文地理学の対象としての地表における居住地域はその頃に始まるとされるが，一方，文献資料（史料）によってその生活文化，営みを明らかに出来る時代は「文時代といわれ，それによって明らかにできる諸事項は「文学」といわれる。それ以前，即ち文献資料で明らかにできない時代は先史時代といわれる。この時代は専ら遺物や遺跡によって明かにする以外，方法はない。しかし「文時代に入っても遺物や遺跡はあり，むしろ多くなり，これら遺物や遺跡によって生活や文化を明らかにする学問を考古学といい，先史時代の人文地理学的諸問題の解明する分野を先史地理学といい，歴史「文時代を明らかに遺物・遺跡を資料として解明する人文地理学の分野を考古地理学と呼称されることになった。(P56) 「文地理学で解明できる時代は地域により異なるが，考古地理学が遡く，第三紀末にまで及ぶことになる。「文地理学も考古地理学で解明できるのは，全くそれらの史料・資料の発見や出土，あるいは解明によっている。ここでは先ず先史地理学の諸問題についてみたい。

NO 60

DATE

× Pithecanthropus erectus は，大腿骨2本，頭蓋冠1，左大腿骨P
(本E発見，1937，38年に第2，第3の頭蓋，下顎骨など発見された。
ゴリラ人間との中間位(頭蓋容積 900cc くらい)，直立歩行，洪積世の中期．
第2間氷期．

○ 先史時代の編年．　古生人類(旧人)(現生人類 Homo Sapience に対
する Homo primigenius (古生人類) の化石人類(Fossil homeniden) として
は 1964年4月に，タンザニアの北部のオルドワイ(オルジュベ)渓谷で Leakey
博士(英人)夫妻によって発見されたホモ・ハビリス(能力ある人の意)なおおそ
200万年前，さらに1969年7月に同じく Leakey 博士夫妻によって同じオルドワ
イ渓谷で発見されたジンジャントロプス(東アフリカの人)(右足首ではナイロビ
の博物館に保存されている)は凡そ175万年前，1975年に L.S.B. Leakey 博士夫
人のメリー・リーキー氏が同じくオルドワイ渓谷の地戸から発見されたもの
は凡そ370万年前のもの，Leakey 夫妻の子息 リチャード・リーキー氏(ナイロビ
のケニア国立博物館々長)が1972年にケニアのルドルフ湖の岸で発見し
たものは凡そ300万年前のものと推定されている．以上のごとく人類の祖
先は第三紀末に，しかも東アフリカに多く発見されており，アフリカが人類の発生の
舞台であったかの如く考えられていたが，1978年(昭53)12月，中国の雲
南省禄豊県の石炭採掘場の遺跡で発見された化石人類は，少くとも
800万年前(第三紀末鮮新世の頃)のものと推察され「禄豊猿人」と名付
けられた。(1100年～200万年前の洪積世の化石人類は年代的特質
から猿人，原人，旧人，新人に分けられる．旧人は Neanderthal，原人は
北京原人，ジャワ原人等が有名。猿人と思われる。新人は Homo Sa-
pience である，4万年前まで)

• 上記の猿人以外では人類学上古くから発見された化石人類はそれより新
しく，原人以後のものである。　1924年に英国のダート教授によって南
アフリカのキンバリー北 100K のタウングスの石灰洞の中から発見された アウ
ストロピテクス属(Australopithecus 猿人類) は凡そ100万年前のものと
推定され，さらに古く，オランダの Dubois によって発見された ジャワ原人
× 川(ブランタス川) 流域の洪積層から出土した Pithecanthropus
erectus は Mindel・Riss 間氷期(BC423万9000年～238万6000年前)
のものとされる。(927～37年の間に中国の裴文中が北京の南西
50Kの周口店(龍人洞)で発見した Sinanthropus pekinensis (北京原人)
(ジャワ猿人より頭骨，上顎能力より
大を推測。

× 新人には フロト・サピエンスに当るモロッコ，スワンスコム(英)，ボスレイ・ヒル人(英)，フォンテシュヴァード(仏)，
以新人に近いもの，一括的，洪積世中期頃。新人では，クロマニオン人，グリマルディ人(モナコの近く)，
ジャディスラードン(仏)，ボスコップ人(南アフリカ)，周口店山頂洞(中国)　NO 61
ケイロー人(オーストラリア)，コフナ人(オーストラリア)など。

DATE

は凡そ15万年前。また西安近くの藍田で1964年に発見された藍田(ランティエン)
原人は凡そ60万年前(Sinanthropus lantienensis WOO)
，そしてさらに古く1856年に Fuhlrott により，ドイツのデュッセルド
ルフの洞穴で発見された Neanderthal(ネアンデルタール)(中期旧石器)や1907年に Schätenmack
によって発見された Palaeanthropus Heidelbergensis(第2間氷期)などがあ
り，是等の出土地から古くアジアの奥地，アフリカ(東アフリカ，南アフリカ)
そしてジャワやヨーロッパ・ドイツなどに世界で古く人類の祖先の居
住地が形成されたと考えられる。南フランスの Fontede Gaume
の洞窟で発見された，またクロマニオン洞窟で発見されたものは現生人類(
× Homo Sapienae)であり，かって東大の人類学教室で発掘したイ
スラエルの アムッド洞穴のアムッド人は古生人類と現生人類の中
間型であり，現生人類は古生人類から進化したものと思われる。
(中国の遼寧省営口県の金牛山遺跡で北京大考古学チームがホモ
エレクトスのほぼ完全な化石骨を発見し，約20万年前のものとされる。
(昭59. 11. 21朝日)

• 編年　鮮新世) 新第三紀 ……1400万年前
(第三紀)　中新世) 　　……3500万年前
　　漸新世) 古第三紀 ……4000万年前
　　始新世) 　　……7000万年前(6500万年前)

(第四紀) ↑ 沖積世(完新世) alluvium …… 10200年前(縄文文化は4500年前から)
　　↓ 洪積世(更新世) diluvium …… 200万年前(250万年前)

• 氷期　現在の地表の平均気温より気温が4～8°下がると氷期となる。(氷河)
この気候変化は全世界的なもの。南極・北極の氷河が拡大，温帯な
どの冷氷河は伸びてくる，そして海面の低下をみる。(海面変化では eustatic movement.
海退になる。)逆に気温が上昇は氷河が溶けて海進となる。)
なお地上の氷河の98%以上が氷床。南極の氷床は1382万km²で厚
さは2000m，グリーンランド氷河は173万km²で厚さ1500m。
氷河の流速は急流域で3m/day，普通で30m/day である。しかし

× 万年象, 河馬, マンモス, トナカイの3時代のほかに, 河岸, 洞窟の2時代に分けることもできる。中石器時代は採集, 狩猟に漁撈が多かった。

△ 黄土高原の窯洞(ヤオトン)とは異なる, 華北高原では約400万人が窯洞の生活をしている, 洞窟時代の洞窟は主に気候の変化による。

75cm/day の例(ウラル)もある。流速は氷河の中央線で最も大きく, 岸近くで小さい。(京大, 北大, 筑波大, 名大の四大学合同グリーンランドコア氷河調査隊が昭和58年11月から3カ月間に行った調査では, グリ南部の全長7kmのソレル氷河は年平均160m動くことが分った。氷河の厚さは230~290m。氷河の移動による氷食作用は大きなもので あり, 固い岩盤の侵食をみる。その結果多くの岩粉が出来, 氷に運ばれる fluvioglacial の堆積がみられ, 川の岸に戸立形成する。かつて Penck と Brückner の2人が南ドイツのアルプス北麓の戸から洪積世の氷期を(地質時代には この他, 古生代など3回の氷河時代が確認されているが, 現在に大きな痕跡を残しているのは この洪積世の氷期である。)それぞれ地名をとって Günz, Mindel, Riss, Würm の4氷期を認めたが, その後さらに Biber, Donau の2氷期が Günz 期の前にかぞえられ, 洪積世は200万年に延長された。アメリカでは Nebraskan, Kansas, Illinoian, Iowan, Wisconsin の5氷期が認められているが; ヨーロッパの七つの氷期がアメリカのどの引(後氷)期に相当するかは判明している。なお Würm 氷期の後, 氷後期にいたる間を晩氷期と称し Bubikstadium, Gschnitzstadium, Daunstadium の晩氷期が分けられている。

• 以上の化石人類の出土状況から推察すると, 1つには洞穴と洞地海岸に竪穴住居が営まれている場合, 2つには鐘乳洞地帯の洞窟の中から発見される場合, (洞窟がない場合には大きな岩陰が利用される)とがある。1は間氷期の温暖な気候の下で生活が行われ, 南象や河馬などの化石が付近に出土する。2は寒冷な氷期の環境のもとで温度が高く, 風当りの少い洞窟が居住の場所として選ばれたことを示している。フランスの古生物学者の Boule は旧石器時代を南象と河馬の時代, そしてマンモス, トナカイの時代に分けているが, マンモス時代は第3氷期(3~5万年前)前後と考

× 仙台市の北約20kmの宮城県黒川郡大和町吉田の中峰C遺跡から昨年, 旧石器の遺物(石器)が発見され, 約14万~3万年前の前期旧石器のものと推定された。(熱ルミネッセンス法による。)日本では最古。(加瀬南の河岸段丘上にある) (昭和59.11.20朝日)

△ × 鉄父平の河岸段丘上の50万年前に堆積した火山灰層の中から, (東北大相沢忠洋教授発見) 旧石器時代の遺跡が新一の沢遺跡(宮城県)など3カ所あり。(1984年2月21日ニュース) 石器も出土。(小鹿切遺跡) 日本では前期旧石器時代の遺跡は, 宮城県築館町上高森遺跡(60万年前)など東北地方に10カ所以上ある。

△ H12.11.24の朝日新聞朝刊1面トップ記事によると, 東北旧石器文化研究所(藤村新一理事長)の捏造問題が発覚。(この遺跡は, 宮城県築館町上高森遺跡(60万年前)など東北地方に10カ所以上ある。)

えられる。(氷期における洞穴居住は, 現在, 中国の黄土高原にみられる窯洞とは異なる。黄土高原では現在, 人口約4000万人の人が窯洞生活を行っているが, 氷期の環境のもとでなく, 工作材料もちがっている。)

• 日本。かつては縄文文化が最古のものとされていたが, 昭和24年群馬県新田郡笠懸村岩宿の関東ローム層(洪積世)中から, 土地の考古学者 相沢忠洋氏(故人)によって旧石器時代の遺物が発見され, これで日本にも旧石器時代に居住地となっていた所があったことが確認された。次いで静岡県の愛鷹山麓の三日日の遺跡にも発見された。岩宿のものは約1~2万年前のものとされ, この時代は無土器時代, 先縄文(プレ)といわれる。縄文時代は約1万2千年前(10500~10000年前)に始まったとされ, この頃は更新世と完新世の境目と考えられている。当時の気候は温暖で, 6000年前頃には気温は今より1~2°C高くなっていたと思われる。縄文時代には海進のため, 現在の日本の海岸線と大きなちがいがあり, 関東地方には関東平野の奥まで古東京湾が入り込んでいた。今の洪積台地の縁辺部は当時の海岸線で, 海岸には住居が営まれ, 今日の見事な遺跡を残した。縄文土器も地方, 時代によって特色があるが, 総じて日本全土に広く普及した。当時の日本の人口は, 遺跡の状況や各種の推定などから, 約26万人位と推定され, 西日本よりもむしろ東日本に人口が多かったようである。3500年前の縄文晩期になると, 北九州の一角(福岡県板付の遺跡で知られるように)水稲農耕が始まり。(その伝来の経路としては華北~山東半島~黄海~朝鮮半島南西岸~北九州; 華南~東支那海~北九州などのコースが考えられている。)2380年前には集約化された。縄文時代の生活の基盤は主として採集, 狩猟, 漁撈が主体で, 山岳地帯でも高い所に生活が行われた。天竜川の流域では600~700mの高い所に遺跡があり, 信州の霧ヶ峰などでは1200mのところに, また八ヶ岳の2400mの高所に石器などの出土がある。谷部では地形が険しく交通が不便で, 犬歯の多い谷部より, むしろ中腹より高いところが当時の生活に好適の場所と考えられていたようである。一般的に, 日本の

縄文文化は新石器時代の古いところに属すると考えられる。水田農耕が渡来してからは，日本の平坦地が，特に水がかりのよい所を選んで水田による開発が西南より北東に向け進められ，弥生時代の終り頃には本州の最北端まで水田が造成されていた。もっぱら沖積地が選ばれている。なお洪積世の氷河時代の海面変化については氷期と間氷期の繰返しにより，海面変化（eustatic movement）があり，海陸の分布や海岸線が大きく変化したと思われる。現在，浅い海底が冷れている大陸は海退時代には陸化し，いわゆる陸橋（land bridge）によって結ばれ，当時の人類の移動に大きく影響したと思われる。日本の国土もその面積は海面変化により凡そ20万K㎡も違っていたといわれる。ヨーロッパでも海退時には英国島も陸続き，地中海も湖のようであった。世界の陸棚（200m以内の浅い海）が陸化していたと思われる。ヨーロッパでは氷床は25000～30000年前より縮小が始まり，スエーデン辺では14000年前頃から縮小し始め，BC 6000年頃にはスカンジナヴィア氷河が消滅し，現在の気候になったと思われる。そしてその頃，世界の幾つかの地理的条件のところにおいて文明が発生，成長をみた。

4. 古代文明地域の形成

フランスの自然地理学者の C. de Martonne は，乾燥地域をつぎの地域に区分している。 1. Arheism（無河）地域 2. Exorheism 地域（内陸河川の地域） 3. Exoreism（外洋河川の地域）の3つである。1は雨が少なく，全く水流が見られるのは一時的にしか流れない荒地になっていて，流れる河川が全くないところ。2は河川は流れているが（上流に降雨のある山地があって，河に向け水が流れているが，その末端は消滅河川が，あるいは，外洋へ流れる川のない地域） 3. は上流に豊かな水源のある山地があり，この地域には常に豊富な水が流れている地域である。そして，その河川は外洋にまで注いでいるところである。この3つの地域

のうちEuphratesの地域に紀元前（BC）4500～3100年頃，古代文明が誕生した。エジプト人は年平均気温は21°C 年雨量は150ミリ程度であるが，源流のアビシニアの高原で，6～9月頃にかけ3カ月間で1000～1500mmの多量の降雨がある。そこを水源として延長6760kmのナイル川の流域は，毎年雨季に起る洪水によって豊沃な土壌を流出し，下流はデルタを形成して地中海に注ぐ。出水は上流の青ナイル川（ヒアムバラ Abbara）川のものである。メソポタミアは，チグリス川とユーフラテス川の流域の平野であるが，チグリス川はザグロス山脈から発し，水源は豊富である。バグダッドの年雨量は僅かに140mmであるが，アルメニアの山地やザグロス山脈では年雨量は1000mmを超す。年平均降雨量は300mm以上となる。両河は下流で合流しShatt-el-Arabとなってペルシャ湾に注ぐ。上流は極めて新しい土地でBC3000年頃から海岸線は200～250km程ペルシャ湾に向って進出している。上流地の山地は毎年春には多量の雪融水を流し出し，ノアの洪水で知られた洪水が下流に及んだ。アルメニア・イランの山地とアラビアの台地との間に介在，東南のペルシャ湾より北西に向って弓なりにひろがっている"肥沃な三日月地帯"（Fertile Crescent）（A. Breasted）は北4000km²に達し，エジプトの河谷よりも10倍以上も大きい。もう一つの古代文明の展開した地域は中国の黄河流域である。黄河下流域の平野は（略）沖積である。その面積は凡そ30万Km²といわれ，揚子江下流平野の3倍弱に比べると広い。肥沃な土壌からなる平原で，ここは農耕発祥の地といわれる。黄河は青海に源を発し（最下流は五門に近い邙連（4リエン）山脈に発する。一つの支流は巴顔喀拉山脈に発する）。流程5460km，流域面積75万240Km²の大河で渤海湾に注ぐ。中国第2の河川。その流域は風成土壌の黄土（loess）地域を流れるため，水にとけ易い，黄土を多量に含んで流れ，その流砂は，郭沫若博士の計算によると6億7000万トン，（NHKの「大黄河」によると16億トン）古語「一石水四斗泥」と称す

る程，泥の流れの様相を呈している。その量は揚子江の2倍半，ミシシッピー川の2倍ともいわれている。その約35%が海に運ばれ，黄海といわれる如き海を呈し，残りは平野に堆積した。
かくて黄河下流の平野は約5000年の堆積作用によって今日の如き平野を形成するに到った。堆積した土壌は石灰質の肥沃な土壌で，小麦や雑穀の栽培に適している。屢々洪水を惹起したため古くから堤防が築かれたが，このため天井川となって，一たん氾濫すると農村に大きな被害をもたらした。

- 地理的決定論的見解では，古代文明地域の形成は気候温和，地味肥沃と関係があるとし，古代文明が発生した地域は，今こそ乾燥地域であるが，当時は気候温和，地味肥沃地域であった，との見解が行われるが，文明地域が次から次へと地域を変えることからしても，その度びに気候環境が変ったとは思われない。古代文明地域は時期は何れもなく，Oasisの地域であるが，詳細にみるとそれぞれ特色がある。何れも定着農業であったが，初期流域のオアシス灌漑農業が基礎であった。そしてそれらは専ら河からの引水によっても行われた。ローマ人によってChaldaeaと呼ばれたメソポタミアの土地は河川からの引水，Oasisからも引水して畑作農業が営まれたが，エマー小麦，ナツメ椰子，いちじくなどの果実を利用されたり，BC3500年頃Sumerの人が定着し，今日Urの遺跡などにみられる文化を築いた。その後Akkad民族のSargonの大王がBC2600年頃メソポタミアを統一した。その後500年でハムラビ(バビロニア王国)が統一した。当時はペルシャ湾は北の方へ入込んでおり，現在より約250kmも奥に岸があり，チグリス・ユーフラテス河は別個にペルシャ湾に注いでいた。(今は両河は一つに合流して注ぐ)即ち両河の沖積作用が今日迄進んでいなかったのである。当初は狩猟が主であったがBC5000年頃には農本主となっていた。Elamの Susaの村民は既にろくろによって陶器をつくり，織物をつくり，銅製の斧や以後石を使っ

ていた。Susaの周辺は人の居住を許さぬ砂漠であり，Oasisを開住して居住し生活することは困難であり，自らOasis地域に一つの地域社会が形成され，一つの求とった社会生活を強制された。周辺の障壁の間にあるすき間によって，他の居住地域と物交易が行われ，この交易を担当したのは，主として周辺の草原に住む遊牧民族たちであったと考えられる。貿易品としてはオーマンからの銅，ペルシャ湾からの真珠，アッガニスタンのラピス，東南アジアのTaurusの山脈からの金属や鉱，Zagros山脈からの木材，その他があった。このメールの土地は三つの生い茂った低湿地で大変肥沃であり，治水灌漑が行われた。Sumerの人達は象形文字や楔形書を所有していた。メソポタミアでは春が増水期で，作物の成長期・成熟期に当る頃には最低の水位となり，Herodotusも「アッシリア人の土地は降雨が少ないが，穀物の根はそれに養われるのであって，作物が実り，穀物が成熟するのは河からの灌漑によっている。しかもエジプトにおけるように河水の自然的な耕地への氾濫によってではなく，手とはね釣瓶で灌漑されるのである」と記している。それだけでは土地の耕作を賄うことはできないので，河川の流域に貯水池を設け，春の増水期の水を貯えることが必要であった。堤防や貯水池の築造，水路の開さくなどにより，多くの人力を必要とした。かくて灌漑の発達した頃には農耕地の面積は20000～25000 km²に達したと推定される。メソポタミアの地域は灌漑さえ行われれば，土地も肥沃で日照も大きく恵まれたから，プリニウスの述べるように，年1回の播種をみる播作が行われた。栽培植物としては，大麦，小麦，ゴマ等穀物(イナゴ豆，ブドウ，オリーブなど果物は困難であった。小麦や大麦の収穫は多く，ゴマは油をとった。メソポタミアの特産としてはナツメヤシがあった。降雨に恵まれず，森林は不足し，沖積平野では石材も得られなかったので，建築は主に泥をかためた煉瓦が使われた。燃料の植物としては，この地方に多く産する灌木

(Asphalt)が用いられた。牧畜は主に北西部のステップ地帯で、牛、山羊、羊、豚、驢馬、その他馬、ラクダが飼育された。
両河は自然の交通路で、バビロンなどではペルシャ湾からの舟運が通じていた。しかしナイル川にヒッタと名っていた。しかし道路はよく発達していた。両河に沿う他の地方に、ザグロス山脈を通る北のがあり、特にペルシャ帝国においては「王道」としてSusa(首都)に達する重要な道路が設けられた。Oasisに於ける大きの地域社会は生産が進み、余剰食糧ができると農業以外の産業を専業とする人口も現れ、大都市国家として発展して行った。そこで政治都市だけでなく、多くの交通・商業都市が発達した。その中でも古代オリエント最大の城壁都市として発達したのがバビロンであり、中央をユーフラテス河が貫流し、周囲13Kmの城壁と濠によって囲まれた巨大な都市であった。メソポタミアの最初の開発は下流のシュメールの開発に始まり。彼らは当時のペルシャ湾岸に、Lagash, Eridu などの都市国家を建設した。バビロニア王国もハムラビ以後、次第に衰え、その後小アジア地方に居住していたインド・ヨーロッパ系のヒッタイトによって支配されるなど諸民族の角逐をみたが、BC12世紀頃からメソポタミア上流のアッシリア人が勢力を振いはじめ、BC8世紀～7世紀頃、西アジアからエジプトまで版図は拡大された。アッシリア帝国が強大になったのはヒッタイトによって発見された鉄器を武器として利用することが出来たからである。

• Herodotus の有名な「エジプトはナイル河の賜物である」との諺で示されるように、エジプトの居住地域はナイル川のデルタ地帯から、川の岸に沿って細長く伸び、Syene(シエーネ)即ち現在のAswanの辺まで及んでいたが、それ以上は河床急流で可航が困難で、陸上交通が通じているだけであった。Syeneより下流でも河谷は3つ25Kmの幅しかなく、その沿辺は石灰岩の台地と急崖で阻られていた。このためエジプトの居住地域はデルタ地帯を含めても35000Km²に満たなかった。

気候はデルタの先のAlexandria付近以外はすべて亜熱帯気候で、Alexandriaは1月14℃, 8月26.2℃, 年平均21℃で、アスワンでは1月12.4℃, 7月33.1℃, 年平均25.6℃となる。Alexandriaの付近は地中海方面から吹く北あるいは北東風によって多少の降雨がもたらされ年雨量150mm, アスワンでは年1回しか雨はない。このような気候地域の中に河の流域にOasisがあり、上流のアビシニア高原では季節風性の豪雨による氾濫により、沖積地の耕地は豊かとなり、水の去った後には再び耕地の区画が行われ、幾何学の発達を招いたとされる。
ナイル川は延長6,760Km, 世界第2の長流、本流は白ナイルとおよばれる。ヴィクトリア湖に発し、ハルツム付近でエチオピア高原から流下する青ナイル(Blue Nile)とAtbara河を合せ、デルタを形成して地中海に注ぐ。Oasisを中心として地域社会が形成され、BC3315年頃に暦法の成立をみた。ナイル川の氾濫によって新しい土壌が供給され、この肥沃な土壌がないと灌漑が設けられた。灌漑はナイル川に平行に設けられた水路に満水時に水が入るので湿気のある間に播種、水がひの悪いヒニフは井戸により、つるべや揚水機で行われた。オアシスからの灌漑が重要であった。古くからの記念建物は大きなピラミッドエマー小麦であった。亜麻も古くから栽培され、エジプトやバビロニア等古くからの自生の植物であった。パピルスは紙に利用され、古い小舟もつくられた。古くから栽培された棉は世界は後に移入されたものである。エジプトの地に欠けている物品は多く、他から貿易品として移入され、古い墳墓の中から発見される。新石器時代の村落では紅海や地中海の貝が使われた。墳墓からはシナイ山、スピアの東部砂漠から来たと思われる孔雀石、シリアの山地か南アラビアから運ばれたと思われる樹脂、エーゲ海のメロス、ミノアアラビア、アルメニア、アビシニアから産したと思われる黒曜石、イラン高原から来たと思われるラピスなどがあり、これらの地域との交易があったことと推察される。
家畜は牛・驢馬、豚であった。馬はBC17世紀ごろ、遊牧民ヒクソス

(ウリル紀後期)シャラート州のドーラビーラで BC3000年から1500年ごろまでの
メソポタミア・インダス・エジプトに発達した都市の遺跡が発掘される。(朝日 1972・3・4 朝刊) 東西 9.8km,
南北 6.30 kmの外郭の中に城塞や公共広場、住宅街が並び、ふろ、
排水設備が完備。モヘンジョダロやハラッパーに匹敵する遺跡。印章200余
点、土偶、土器も出土。インダス文字(未解明)の骨板や印章あり。
(パキスタン西端は近いウッタル地方の中のグジャール島にあり)

の侵入によってもたらされたといわれ、ラクダもそのころヒクソスから伝わったものであった。ラクダが隊商に用いられるようになったのは一〇世紀ごろである。紅海沿岸の山地には銅・金などが豊富で、後には金矢も採掘された。シナイ半島は銅の産地として知られていた。銅はすでに BC3500年以前の先王朝時代から利用されていた。メソポタミアと異なり、石材に恵まれ、ナイル沿岸では石灰岩、砂岩、上流のヌビア地方では花崗岩、斑岩などが産し、ピラミッドや神殿などの巨大な石造建築が行われた。

エジプトはナイル川という良好の交通路をもつ。ことに北風、北東風の卓越風があるので帆を利用した河の遡航に役立った。しかしSyeneから上流はナイル川は急流で、ヌビアでは隊商路しか通じていなかった。ナイル河にはスーダンに沼沢地があり、これが交通を阻害した。さらに河の両側は砂漠であった。またナイルのデルタの先端は低湿で水深が浅く、アレクサンドロス大王によってアレクサンドリアの港湾が建設されるまでは地中海沿岸の航海が困難であった。しかしスエズの地峡はアジア大陸との交通が古来、オリエント各国との交通も可能であった。1869年にスエズ運河が建設されたが、古代にはナイル河とアルシノエ(Arsinoe 今のスエズ)とナイル川の間に運河があり、「ファラオの運河」とよばれ、第7王朝の頃にはすでに存在していたといわれ、その後ダリウス1世やプトレマイオス2世などによって修復されて利用された。プトレマイオス王朝時代にはインドとの交通も開かれたので、南海貿易の商品はこの運河によってアルシノエからアレクサンドリアに送られた。エジプトはこのような交通路が開かれていたが、砂漠に囲まれ、かなり孤立的であったとされる。

× • インダス川下流も、ヒマラヤの雪どけ水によって押出される土砂の沖積作用によって肥沃な平野が形成され、BC3000年頃には(ハイデラバード上流) (パキスタン南)
既に人間の居住をみていた。Mohenjo Daro や Harappa などの遺跡によってみられるように BC2500年頃には都市が形成

されて居り、都市計画も行われていた。2階建の建物もあり、下水路もつくられていた。作物としては小麦、大麦、しゅろ、綿花などが作られ、豚、羊、牛、水牛なども飼われていた。ヒマラヤ山地からヒマラヤ杉、海岸から乾魚、遠隔地から鉱物や宝石も運ばれていた。

• 黄河は華北平野においてところどころで著しく流路を変え、古代・中世の約2000年間は北流して渤海湾に入り、近世の5~600年は南流して淮河に注いだといわれる。この流路変化を悪用して華北平原に侵入した異狄は、堤防を欠壊せしめ、漢民族を苦しめた。この地域はユーラシア大陸の東部に当り、気候は砂漠気候ではなく、モンスーン気候の性格をもつ。緯度が10°も高い西欧(西岸海洋性気候)のパリーと北京とも比較すると、両者は両者共月630ミリ程度であるが、パリーはこれが年に均等に分布するにすぎず、北京は7・8の2カ月に年雨量の約6割が降り、気温も最寒月平均気温がパリーは3.8°、北京は−4.1°C以下、夏の最暖月気温はパリーは19°C、北京は26.6°Cで、年較差はパリーは15.2°C、北京は30.7°Cとなり、夏高温多湿の性質をもつ。しかしモンスーンは年による差が大きく、変動が激しい。このため、有史以来、中国では旱害は2年に1度、水害は3年に1度みまわれたという。中原を発祥地とする漢民族は、この自然災害と常に戦わねばならなかった。この地にBC2200年頃、「夏」なる国が現われたといわれるが確証はなかったが、近年発掘調査により、その実在が推察されるようになった。その後BC1600~1200年頃に「殷」の国が殷墟(安陽)を中心とし、河南省の黄河沿岸一帯、(BC1340~1000頃?) (ホーペイ)河北省の西北部、(タイハン)太行山脈の東部、山東山地の西縁などを中心として陝西(シャンシー)省にも及ぶ領域をもったが、殷代の王は黄河の氾濫を恐れ、転々と都を換えたと伝えられる。殷は今の殷墟のほか近い商邑という城壁をもった国都を営み、王権を確立した。郊外には王室の直轄地と王一族や直属の武士団が住み、その外側には「田」といわれた被征服民の部族

国家が殷王朝の承認を受けた侯又は伯の監督のもとに半独立的な国家群をつくっていた。その周辺に遠方民族や異民族の国家群があった。なお長江の上流、四川省の成都近くの三星堆(さんせいたい)の遺跡から青銅器を中心とした文物が殷の時代(BC2000~1000年頃)当時のものとして出土し、当時長江上流域にも文化の中心があったことを物語っている。

中国最古の地理書といわれる「禹貢」によると、当時の黄河は現在の河道より遥に西を太行山脈に沿って東北流し、渤海湾に注いでいたようである。殷墟は約300年に亘り殷の都であったところである。BC1200年頃周は殷を亡ぼしてこれにかわった。しかし当初の領域は殷と3台と変らなかった。周はもともと殷の支配下に陝西の渭水流域(いすわ)にあった国であったが、殷を亡ぼすと旧領土をその子弟(ていてい)に統治(とうち)し、洛陽に都を築いた。その後BC800年の頃(ころ)遊牧民の圧迫で都を鎬邑に移し(うつし)春秋(しゅんじゅう)戦国の世となった。淮水から揚子江流域にかけ楚をはじめとする蛮、海岸地方には東、南方には呉・越などの蛮がいた。やがて楚が中原に進み、ついに呉や越がその後に続いた。中原の民族は蛮に属したが、蛮はまた中華の文化に同化した。戦国に入ると秦、楚、斉、燕、韓、魏、趙の七雄国が対立し(晋は韓、魏、趙の3国に分裂)近隣の弱小国を併呑して広大な領土国家を形成した。(BC403~221頃)燕と趙は東北やモンゴリアにまで進出、遊牧民族を駆逐してその境界に長城を築いた。秦も長城で匈奴の侵入を防ぎ、四川の沃野を開拓、楚は淮水より揚子江流域を超えて呉、越の領土を合み、南は南嶺山脈の北麓に達した。七国のうちで秦が最も強く、BC221年、始皇帝によって天下が統一された。さらに南と北に領域が拡張され、北は匈奴を征服してオルドスを確保、黄河を越えて北に長城を築いた。南は南嶺、福建も中華の範囲に入り、前線は広東、広西から(ベトナム)にまで達した。

× フェニキアはオリエント文化のヨーロッパへの伝播に貢献した。
Carthagoは BC146年にローマによって亡ぼされた。

5. ヨーロッパ古代の開発

古代文明地域の特色の一つは、すでにふれたようにExoreism(外洋河川)地域に形成された(エジプト、メソポタミア、インダスなど。)巻頭下図地域は砂漠気候ではなくCw(温暖冬季少雨気候)型であった。しかし大河川(外洋河川)の下流域であるという点では外洋河川の流域と共通している。数千年を経る内に、ヨーロッパの古代史の地中海周辺の諸民族、諸国家の内部的発展と地中海を紐帯とする普遍的関係において展開するに到った。

Ongerer(オンゲラー), Ed. は"Geschichte des Altertums"で、ヨーロッパのみでなく世界は地中海世界として理解し得るものと称している。織田武雄も、"オリエントの大河川文化を継承した地中海地域においては、ギリシャ・ローマ時代を通じて、渾然たる海洋文化(Thalassic Culture)としての地中海文化が発達するに至ったが、それは地中海地域が"地理的環境として、地形においても気候においても、多様性のうちに一つの地中海地域としての統一体を形成していること、しかも地中海地域の中心をなす地中海が媒体となって、統一の紐帯としての役割をなしているからである。すなわち、ヨーロッパ、アジア、アフリカは、全体としてはまったく別個の地理的性格を示している大陸であるにもかかわらず、地中海に面する地方は地中海地域として、自然地理的にも、人文地理的にも共通した統一的な性格を有しており、これがいわゆる地中海文化というべきものを形成したのである。この意味において、前述の河川文化が世界史的意義から外れは"地方的な意義しか有しないのに対して、地中海文化は世界的な性格を持つものといえる。」と記されている。(朝倉「古代地理講座」第1巻 ゆまに)

- 新しい文明地域の成立は先ず地中海の沿岸及び島嶼(とうしょ)において(おいてで)あった。

× BC1200年頃、地中海の東岸、今のシリア、レバノンの地にPhoenicia(フェニキア)が栄えた。狭小な海岸平野で、背後にレバノン山地が迫っていた。南北約220km、東西約25kmの狭い地で、フェニキア人はほぐめは漁民として、後には海運商人に転じた。Phoenicia人はシドン

とサレ(SidonとTyre)の西港を根拠に地中海に、レバノンの山地に産する杉で船を造り、漕ぎ出し、商業貿易に乗り出した。そして地中海の沿岸に植民地をつくり発展した。植民地はCyprus, Rhodus, Utica, Hippo(カルタゴの北)などであった。シリアの対岸北アフリカの沿岸に植民地Carthagoはtyreの植民地として BC 900年頃設けられたものであり、やがて強力となってローマとポエニ戦役を戦い、BC 146年に亡びた。

地中海地域はアルプス第三紀褶曲山脈とアフリカの古い大陸塊との間に生じた凹陥地であり、3大陸に囲まれ、長さは約4000km、最大幅約1600km、面積2997万km²を占め、平均深度は1429mである。大西洋とは幅14kmのジブラルタル海峡で続き、ボスポラス、ダーダネルス海峡で黒海と合っている。さらに多くの半島や島嶼によって分けられる。最高温の気候で、表面水温を25°~26°C、北アフリカ、シリアの海岸で27°Cに達する。冬は気候温暖で表面水温も13°~17°Cである。気候は地中海式であり、夏は晴天が続き雨は少ない。冬は全体として温暖で、雨が多い。

• 地中海周辺の地方に行われる農業は、一般に地中海農業といわれるように地中海地域の地形や気候などの自然環境に適応して、古くからすでに特殊な形態をとって発達した。地中海沿岸では山地が到るところ海岸にせまっているので、ポー河などの流域を除けば、農業に適する肥沃な沖積地や山間の渓谷や小盆地、あるいは海岸などに小さく分散し、狭小である。それで、人口が密な割には、ギリシャ人の植民にみられるように、新しい土地を求めて移動が行われたばかりでなく、山地の斜面までかなり開いた耕地を求めねばならず、古くから階段耕地が発達した。地中海農業がぶどう、オリーブなどの樹木耕作を主とするのも、このような階段耕地と発展しやすい一つの要因である。さいに、この地域では日照時間が長く冬が温暖であることは、作物栽培にとって一つの有利な条件である。

夏は比較的乾燥するので、用水が涸渇し、飲水も困難であるが、周辺の山地では多雪もあり、森林があるので山麓では流水をみる。また石灰岩がよく発達しており、地下水の湧出する泉も多い。これら用水を灌漑用水、あるいは都市の飲料水として有効に利用することに多くの努力がなされてきた。水路の開鑿や水道の建設も発達した。地中海地域の灌漑はフェニキア人によってオリエントの灌漑技術が伝えられた。ギリシャではすでにホメロスによって灌漑のことがうたわれて、その起源は古いものがあった。

• BC 1900年頃からエーゲ海のCrete島を中心として、青銅器を使用する新しい文明(エーゲ文明)が発達し、小アジアの沿岸にまで勢力をひろめ、Troyを首都とした。この文明はBC 1500年頃ヒッタイトと共に、いっぽう、バルカン半島の南端のPeloponnesos半島のミケーネ(Mycenae)を中心とするミケーネ文明がBC 1500年頃からBC 1000年頃にかけ発達し、Crete文明より発達した。そしてミケーネ文明にとって代って、バルカンの地に北方の遊牧生活から転じたと思われるアリアン人種の一派が侵入して、鉄器を使用してエーゲ海の島や沿岸各地に勢力を伸ばし、植民地を開き、海上生活に乗り出し、エーゲ文明を改造し、ダルダネルス、ボスフォラス海峡を通りビザンチンを建設、さらにシチリアにまで植民地を建設した。これがいわゆるギリシャ文明である。ギリシャは一般にAchaea, Ionia, Doriaの3部族に分れ(ミケーネはAchaeaである。)これらの順番でこれらの民族が侵入、あちこちに都市国家を作った。これらはバルカン地域の地形条件による。都市国家(ポリス)は城壁を囲らした市街地(Asty)と田園(Agora)とからなっていた。BC 4世紀頃、ギリシャの北のMacedoniaがギリシャの影響をうけて発達し、BC 334年に到りヘルシャ遠征、フェニキア、エジプトを従い、BC 330年にはペルシャをも亡ぼした。そしてインドにまで進んだが、アレキサンダー大王の死去で死亡した。この侵入10万の兵隊はAthene, Syracuse(シシリー島)、(東西地中海の制覇を狙う)

NO 76
DATE

× Limesは道路或は境界意，はじめは土塁，植林，木柵であった。所々基礎があったが，後には石壁がつくられた。
△ ローマの軍道は，1. Aurelia街道（ローマ，バールカン，ピサ，ジェノバ，それよりメソポタミア，エジプトに向う2本に分れる。2. Aurelia街道（ローマ，南ガリア，イベリア半島東海岸，ダデス）3. Flaminia街道（ローマ，アドリア海沿岸，ドナウ河沿岸，ベオグラード）4. Aemilia街道（ローマ，アルプス越，現在のライデン，今のリヨンからイギリス海峡のブローニュに合する）5.（ローマ，カルタゴ，アレクサンドリア，カルタゴ，アルジェの8つ合する）

そしてCarthagoの3都市であった。100年後にはギリシャ文明の伝播により，商業が発達し，20万以上の人口をもつ都市ができた。それはSeleucia（バビロニア），Antiochia（シリア），Alexandria，Carthagoの4都市であった。同じ時代人口10万以上の都市はSyracuse，Rome，Corinthus（バルカンの先端，ペロポネソス），Rhodes，そして小アジアのEphesus（イズミルの近く）であった。産業も発達して，トルコ南部のCibyraの金，銀細工，トルコ中部のLaodiceaのじゅうたん，シリアのHierapolisの陶器，大理石，染料などが知られており，これらの都市には東方の文物やインド，ダマスカスの香物が入っていた。

- BC753年頃，イタリア半島にローマ帝国が建国，漸次周辺を征服，BC63年には東方ユーフラテス川にまで到り，BC58～50年にはケーザルのガリア（今のフランス）征服が行われ，BC30年にはエジプトをも除し，西方ではさらにライン川上流，ヘルギーをも傘下におさめ，東方ではメソポタミアをも属州にし，AD200年にはブリタニアをも属州とし，北はライン・ドナウ川の線まで，南は北アフリカにまで版図を広め，いわゆる世界帝国を建設したが，AD4世紀頃にさしかかり東西に分れ，やがて5世紀に到りゲルマン民族の侵入にあって西ローマ帝国がたおれた（AD476年）。この間，ローマはあちこちにColoniaを建設，住民の自治を許した。そして帝国各地を道路で結ぶ。当時，ガリアの地には西海洋性の気候のもとで，深い茂る森林の中にケルト人が居住していたが，漸次開拓をなしていった。そしてローマより以上の版図に到る軍道を開き，ヨーロッパ各地の交通の発達の基盤をつくりあげた。北方，ゲルマン民族に対してはLimes線（堡塁）を設け，それに沿うてローマ軍の駐屯地を開設した。これらの駐屯地に対して，ローマから，地中海沿岸の地域の住民の生活に必要な，例えばオリーブ油のようなものがローマ兵の駐屯地に運ばれ，地中海地域とその他の

× フランスの都パリもローマ人によって開かれた都市。中央にある3分島が発祥の地である。AD53年にケーザルがガリア征服があったが，それまでは Parisii という部族がこの地に住むローマ人は，この地を Lutetia と呼び，ここを根拠地とした。パリが名実ともに首都となったのは10世紀以降であった。英国のロンドンも3年にクラウディウス帝の侵攻により開発が始まった。ローマの名称，テムズ川を自然の防壁とし，商業の中心地となした，ローマの道路をつくった。AD430年にはローマの退却，サクソン人が入った。
△ 歴史教科書「古代」（朝倉「史地理講座」1巻）

ヨーロッパ地域との交流の基盤を形成，当地の中には，後には
× ヨーロッパの都市へと発達したものがあった。このように，ローマ帝国の支配の下にヨーロッパ各地の開発が進んだ。

△ ● 地中海地域で灌漑が何時頃から始まったかについては明らかでないが，フェニキア人によってオリエントの灌漑技術が地中海沿岸に伝えられたことが想像される。ともかくもギリシャではすでにHomerのIliasに灌漑のことがうたわれていることからみてもその起源は古いものと考えられている。ローマ時代の詩人のウェルギリウス（Virgilius）も勤勉な農民によって灌漑が行われていることを讃えている。オリエントにみられるような大規模なものではなかったが，灌漑は古くから各地に普及していたようである。エステニアヌス法典にも，ローマ帝国で慣行されていた灌漑水利権や，それに対する義務の履行などについて規定されていることからみても，灌漑によって結ばれた共同体の間では，古くから用水利用慣行が存在していたようである。地中海地域は春から夏にかけて乾燥が著しく，畑作の困難な地中海地域ではギリシャ・ローマ時代には，秋まき作物と休閑とが年々交互にくり返される粗放的な二圃式農業が広く行われた。もし休閑地とても，冬の雨の降った春と，夏のはじめ，ないし新しい雨をみた秋のはじめと，少くとも年3回は鋤耕が行われた。この地方の農業にとって最も重要な地中の水分を保持するためであり，耕地の表土を浅く鋤耕しておけば，土壌の毛細管現象は断たれて，地中の水分の蒸発が防がれるからである。したがって鋤もまた，犂板を有しない軽量の無輪の鋤が地中海地域で発達した。ローマ帝国の拡大とともに，ガリアやブリタニア地方にも普及するに到ったが，これらの西ヨーロッパの地方は地中海沿岸地方とは異って，夏の乾燥はあまりないので，春まき，秋まき，および休閑を3年ごとにくり返す三圃式農業が比較的に発達するようになった。（夏の乾燥により，畑作にも困難な地中海沿岸では，おしなべて秋まき作物と休閑，あるいは畑作と放牧を結合した二圃式農業が一般に行われていた。主な肥料として厩肥の

※肥料としては木灰も石灰も大切であり，とくに石灰岩のあく発達している地中海地域では，石灰は最も得易く，オリーブやブドウの栽培に多く用いられた。
㊀オリーブはバターに代わる重要な食料であり，油分の多いものは灯油に用いられた。

※のほか緑肥（マメ科植物）が用いられた。）作物は小麦と大麦が主体であり，アルプス以北では温潤な夏の気候を好む純粋ライ麦が作られた。地中海沿岸では，果樹が古くから栽培され，スモモ，ナシ，アンズ，モモなどが作られたが，これらは灌漑を必要としたが，それの不要なブドウ，オリーブ，イチジクなどは乾燥に強く，地中海沿岸地域の代表的な作物となった。また夏が著しく乾燥する地中海地域では，西ヨーロッパのような自然の牧草地は乏しく，よい牧草を得ようとすれば，牧草を播種し，時には灌漑も必要であった。このため，水分の多い牧草を好む乳牛地帯の飼育はあまり発達せず，硬い草，短い草や灌木の葉まで食べる山羊と羊が多く，ミルクと衣服の原料を供給した。羊は群に移動し集団をなすので，バルカン山地のごとき transhumance（移牧）がさかんに行われた。輪作はあまり行われず，休耕が古代の農業の特徴的な性格を形づくった。これは地中海地域では夏の気候の乾燥のほかに，本来耕地が狭小なため，それぞれの土地にある一定の作物を栽培するという観念が固定して，輪作の発達をみるに至らなかったものと思われる。

• 地中海地域は石炭・石油の生産に恵まれていなかったが，この時代には大部分はすべて鉱山によっていたので困難はなかった。金，銅，鉛などの金属鉱物や金・銀などの鉱産資源は，現在では鉱床が涸渇してしまっている位置なので，古代でも豊富ではなかった。銀は，トラキア，ギリシャ，スペイン，銅はキプロス，小アジア，サルディニア，スペイン等の諸地方に産し，アッティカの Laurium 鉱山の鉱の産出は，アテネを富強ならしめたと言われる。金はトラキア，スペイン（サルデ）などに産出したが，かれは中，ウラル，アフリカなどの遠隔地からもたらされたものも少くなかった。鉄の利用は小アジアがアルメニア地方に始まりヨーロッパに伝わった。伝えるところによるとイタリア半島の Aethalia 島（現在の Elba 島）に産する鉄が発見され，エルバ島を対岸の Populonia はその中心であった。鉄の時代に入っても青銅が広く多く使われたが，青銅のための錫が少

く，マンガール（ブリテン）やイベリア半島の Galicia 地方の錫がフェニキア人などによって多く地中海地域へ輸入された。

6. 資源と国土の開発

日本の国土はその面積 377,647 km²（日本正文有公表の北方領土を含んだ面積は 377,648.13 km²），アジア大陸の東縁部を，縁海である日本海（平均深度 1350m），東支那海（同 188m）などをはさんで，北東より南西に連る弧状列島（Festoon Is.）であり，本州，四国，九州，北海道の4島を中心として形成された島列より成る。環太平洋造山帯の一環をなす故に変動が多く，過去において数多くの活発な内作用により，また高温多湿のモンスーン気候の一部をなして外作用も活発なために極めて複雑な地形で，山地・丘陵は全面積の 71% を占め，急傾斜である。平野も狭小で化石炭のある扇状地が生で，三角州性のものは極めて局部的である。過去の変動のために沈積台地が発達し，平野も必ずしも平坦でない。海岸線も屈曲に富みリアス式海岸が長く，砂浜海岸は限られている。土壌は総体的にみて本州は褐色土，南部は赤色土で沖積土が多く肥沃である。しかし火山が多いために火山起源の土壌が広く分布し，新しいものは酸性を帯び，農業には不向きであり，また南九州のシラス土壌の如く，古い火山の泥流によって形成された台地の上に分布し，農業には適していない。列島の位置が北東から西南に連っていて，緯度差が南北で 25°17'56" もあり，したがって北東部と西南部との気候の差が大きい。即ち亜寒帯から亜熱帯に亘っていて，年平均気温も那覇の 22.3°C から釧路の 5.5°C にまでその差が大きい。雨量はこのため，西南から北東に向い漸減する。国土全域に亘り平均して年雨量は 1600～1700 mm であるが，屋久島の平地 4000 mm（山形谷）から北海道の平均 1060 mm まである。地形による影響が大きく，山地と平野部の差，さらにモンスーンに対して中央脊梁（横）山脈による日本海側と太平洋側の差が著しく，特に冬のモンスーンによる日本

海斜面の豪雪，太平洋斜面の乾燥が顕著である．即ち日本海斜面は冬季の降雨量が多くなる。夏季を中心とする熱帯性気圧，台風の来襲が特長的で，全雨量の約3割を占め，年による差異が大きい。別島の西南部は台風の来襲が多いが，北東部は少い。また梅雨前線と秋雨前線の停滞に基く梅雨と秋霖による雨量も大きく，前線の停滞位置から，別島の北東部，特に北海道は雨量は少くなる。このため植生は西南日本では暖帯照葉樹林（シイ，カシ，タブなど），本州中部が北海道南部にかけては温帯落葉樹林（ナラ，カエデ，ブナ類），北海道中部が北部にかけては寒帯常緑針葉樹林（カバ，エゾマツ，トドマツ等）となる。

• 日本の国土が水田農業によって開拓されていた頃，当時の沖積平野は未発達であったから，弥生文化はむしろ内陸の盆地沿いに伝播したのではないかとも推測される。紀記の中にみられる水田名から推して，当時の水田の造成地は，自然堤防，海岸砂丘などの後背湿地（天安田，天平田），谷底平野（天狭田，天長田，天川俣田），リアス式海岸の湾頭の小三角州（天川口鎮田，天俣田）などであったと思われる。そして水利不便な沼積台地などは未開発のまま，島のようにとり残されていた。弥生時代中期になると人口の増加や鉄器の普及によって沖積平野の居住が始まり，集落の形成をみた。日本列島における稲作の伝播は，まず北九州の板付遺跡出土品から，紀元前3世紀頃の稲作開始から100年かけて南九州へ。それから瀬戸内周辺から東北日本へ，青森県の垂柳遺跡の発掘遺物には約600年かけ，紀元後300年頃に到達したと推定される。そして弥生期には稲作は北海道を除く本州各地で始められた。『和名抄』（奈良時代から平安時代初期，9世紀末の田の面積）によると86.2万町歩で，今の面積では103.4万町歩（102.6万ha）で，今日の全国水田面積の約$\frac{1}{3}$に相当する。（明治初期には水田面積は302万haとなり，七倍加面積は

199.4万haで，その70.4%（140.4万ha）は江戸時代に開かした。

（3世紀末～7世紀初頭）

• 一般にわが国では4～7世紀の間を古墳時代とよぶ。大小さまざまな古墳が築造される時代で（平面形で円墳，方墳，上円下方墳，長方形墳，前方後円墳，双方墳，……）この他横穴，地下式などの型がある）古代国家の形成期に当る。これらは水稲栽培の可能な低湿地な平坦地にのぞむ台地上や自然堤防などの微高地に立地するものが多く，中後期（前・後，あるいは前・中後期などに分け，これをさらに前期を1～4，後期を1～3期に分ける）になると，平野縁辺の丘陵や山間の河谷をせかえた丘陵台地上にも移り，古墳群や群集墳（後期）の名でよばれるように，ある程度まとまった形で分布する。とくに奈良，仁徳陵によって代表される前方後円墳は，東北・北海道以外の平野に約1600（前方後円墳は奥羽には極めて少い。北限は宮城県名取市古墳，山形県でも1基あり，福島県で7，宮城県で8基あり，これは第二次大戦前までは，今日2000近くあると思われる。）に及ぶ。これは大和朝廷において国造制（はじめは縁主，5，6世紀東北地方南部から九州まで広く施行された国制度で，その国領知の官として国造が置かれたのが国造，中央から派遣された者もいたが，在地豪族が任命された。大化改新後廃止になり，中央から派遣される国司がそれにかわった。）に任命された地方の豪族たちの墓で，一般農民の円墳などとちがい，大規模なものであった。中央の天皇の墳墓を模倣したもので，中央の威令が及んだことを示すものであった。このような墳墓の出現は，そのような基盤となる生産力のかなりの成長を意味し，平野の開発の進展ぶりを示すものと理解される。（開発することができるがなり平野の形成されていたことも示すものと思われる。）

• 大化の改新（大化2年……646）の頃には，わが国の沖積平野は

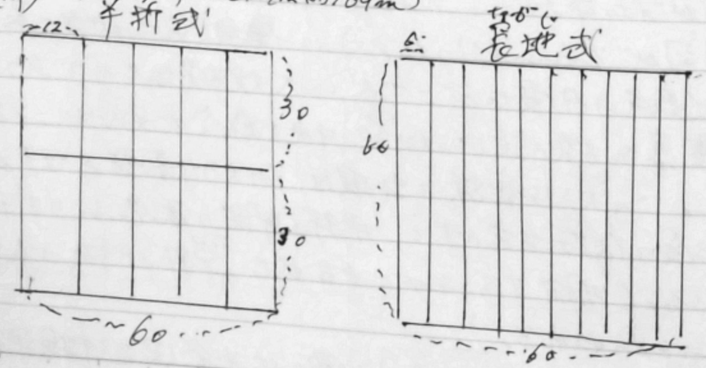
NO 82

DATE

× 条里遺構の分布は、東日本は西日本に比し散在的である。北陸の諸平野では加賀平野ではっきりし、以東は散在的である。関東では酒匂川、相模川、多摩川の中・下流、巻老川、小糸川下流、利根川上・中流、那珂・久慈川中流、東北では山形盆地、福田平野、福島盆地、宮城県の黒川郡大和(だいわ)、吉岡町辺りまで。

弥と関り、広汎な荒蕪集落の展開をみていた。そして大化の改新に伴う班田制(人民に一定の口分田を班給する制度で男子は2段、女はその$\frac{2}{3}$)の実施に当り、いわゆる条里制の施行が行われることになった。かくて中央政府の施策によって、水が国の平野に新しい耕地や集落景観の上に於ける秩序がくりひろげられることになった。それは一つの国土計画としての意義を有するものであった。条里の施行に当っては大陸の計画的地割(周礼の井田法、秦の阡陌、北朝後魏の均田法、隋・唐の均田法など)を参考とし、耕地区画を整理統一した。条里は6世紀末ないし7世紀初頭に先行的に施行され、7世紀後半から8世紀中葉にかけて全国的な実施が進み、中央政府のある畿内から逐次施行され、漸次遠方へ進められたが、都より遠い地域は徹底を欠き、大隅・薩摩では遅くも延暦19年(800)には班田を行った。画一的耕地区画はその後耕地整理が進み、多くその形をとどめることがなくなったが、現在の景観、条、里、土字名の残存、そして史料を併用して× 復原することができる。史料としては、大宝、和銅年間以来、奈良、平安期、さらに鎌倉時代の文書に条里の地番付が残っており、また条里を表した当時の地籍図や田図も残っている。

(坪)(町) は半折式 (1町は約109m)



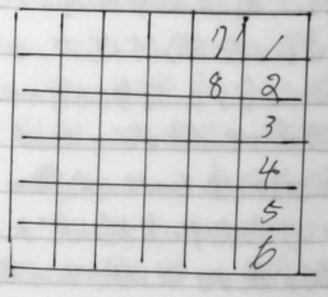
条里区画は半折式と長地式があり、前者は30間×12=1段、後者は60間×6=1段で、この全区画を1坪(1畝)といった。

× 大宝律令(701年)では、班田収授法によって良民男子2段(1段は11.5アール)、女子に1段120歩を支給した。租稲として租・庸・調を徴収、租は稲の収穫の約3%に当る1段2束2把とされた。

⊗ 奈良時代以後、とくに平安時代には慶雲の墾田永年私財法が繰り返され、これが私田耕作を無秩序の迄達にまで蔓延させる原因となった。

△ 次頁

条里区画は半折式(はおり)と長地式(ながじ)があり、前者は30間×12=1段、後者は60間×6=1段で、この全区画を1坪(1畝)といった。1段の面積は当時の農耕技術で1日1人の作業に適当な大きさで、× この2つ分、即ち2段が農民1人が1年分の食糧を得るのに適当な面積であった。(1段は360歩で、1町は現在のほぼ1町2反位に当る。)そしてこの36坪が1里(1段は360坪、1町は3600坪)であった。坪名は千鳥式その他種々の方式があった。里を区別するには条と里を組合わせた坐標によった。条里は大化改新において組織されたものであったが、それは改新前の耕地区画と無関係でなく、それを基礎として整理統一したものといえよう。(曽呂遺跡の耕地は1辺30間、面積600坪で400坪の長方形区画であった。)一般に1町区画の周辺に灌漑と田畦が設けられていた。早くから施行された畿内諸平野では正確に東西南北を測量した正方位条里が施行され、律令国家の理想プランであったかと思われる。東北の磐井盆地、秋田平野や九州の国分平野、川内川平野にもあったことが知られ、佐渡小佐渡、高山盆地、阿波吉野川下流などにも認められる。そして条里を基礎として、行政単位としての里が、30戸1里の制は36町を1里とする1七手を定めるのが近江国などに認められ、これが1つの理想型としてあったと考えられる。



● 一般に畿内でも、大和、山城、摂津、河内の4国では条里地割は沖積平野の大半を占め、土地区画は整然として連続的であり、権力中心地の周辺地域ともいうべき越智盆地、小治田平野、磐余盆地、曽我盆地、円山川流域、播磨平野、和泉平野、淡路島の三条平野、徳島平野、紀ノ川流域、伊賀盆地、伊勢平野、英虞平野

◁ 坪のつく字地名に対し、田地名に条・里・(また)七万(条)が(使われている場合が)阿波、山城、近江、越前にある。(近江では湖東、湖北に)(若狭、大和、加賀、坪設、坪後、仙泉、御前にもある。)(伊藤喜和一「史地理学論叢3」)(坪の地名は、奈良中期から平安初期にかけて使用されていた条里・坊の呼称の遺称地名ではないか?)坪は本来田島の面積の単位。平安期以降坪に改訂.

陸などでは、土地割は連続性を失い、阡陌の方向も東西～南北より傾いたものになる。古代政治の中心の地より西方では、早くから大和朝廷の支配が及んでいたため、東方よりも条里制は密に分布している。就中、瀬戸内海に沿う諸平野に顕著であり、岡山、福山、下松、防府、山口、豊浦などや鴨山支、今治、松山、そして豊前の各平野などは代表的な条里地域である。瀬戸内沿岸平野の外側では分布は断片的となり、鳥取、米子、富知平野や那賀川流域が条里施行地として知られ、隠岐島の一部にも遺構が見出される。条里施行の南限は大和朝廷支配の限界を示すものであり、南九州では単発的には見出せるが、かつて国府のあった川内平野、大隅の国分平野に条里が施行されたことは確かである。シラス台地により水田経営が"困難"であったことによると言い、条里の施行は恐らく、AD800年頃であったことによる。東方では北陸の各平野(佐利加羅以東は不明瞭で、高田、直江津、石動付近にみられる。)佐渡島は古来畿内との関係深く、国中平野に遺構がある。中部の古川田、善光寺平、上田市付近に遺構があり、断片的。甲府盆地には明瞭であり、東海地方の岡崎付近、豊川下流、天竜川下流、掛川付近、安倍川下流、三島付近の沖積平野の一部に条里があった。東北では、秋田県の仙北平野西部が北の実出している。山形盆地では明瞭で、長地型地割がうかがわれる。福田平野の一条付近が分布の北限である。しかし太平洋岸は北限は宮城県の古川付近で、日本海側より南部であるのは、米作の困難な寒冷な気候のためではなかろか。条里施行の北東部では蝦夷地経略のセンターとして城や柵が築造された。柵の経営は関東その他から農民の強制移住せしめられた柵戸の手によっており、内部の方格状土地割は古代のフロンティアに於ける武装農民の矢的な開拓の具体的姿を示している。柵戸は主として中部以北の人々で、中には

× 木下良「道と駅」大巧社. 1998.

半島からの投来者もあったようである。条里施行は沖積平野が主で、開拓平野にはその遺構を見出すことは困難である。越中庄川流域ではた半の舟田島の隆起三角州であって、条里遺構はみられない。主として台地の西側りに限られている。沖積平野であっても水害を受けることの大きい記録のあるところでは条里は施行されていない。扇状地でも、急起扇状地では遺構は見られず、富山平野などその例である。一般に自然堤防が後背湿地にかけてであり、氾濫の滑走斜面などは非条里地域である。海岸でも砂堤、砂州、砂丘や塩害を被り易いところでは条里はない。条里の如き統一的で大規模な国土計画は強力な中央集権国家の権力をもってしても成功と可能であったのであり、中世に到り地域、領主体化するに到ると共に、もはや新しく拡張されることはなかった。中世には一般に条里のような統一的計画はみられなかった。

× ●7世紀中頃に大化改新が起り、中国の律令制を導入して、隋・唐に倣った中央集権国家が完成し、これを律令国家とよんだ。律令国家は全国に国、郡、里(郷)の地方行政区を置いて、中央の指令に基づいて行政を行ない、地方行政官の国司は貴族が任命されて都から任地に赴任したから、中央と地方との連絡を緊密にする必要があり、通信と交通の制度が整備された。これを「駅伝制」という。古代駅伝制は大化2年(646)正月に出された改新詔(カイシンノミコトノリ)に示されているように鈴鴈(はゆま)と伝馬(つたわり)という二種類の馬を用意して、当初はもっぱら緊急連絡や公文書の逓送という通信業務に、後には公務旅行者の乗用に用いることになっていた。駅伝制の実施のためには道路の整備が必要であった。古代の道路の実態を書いた文献はないので、江戸時代の街道の状態から推測すれば、古代の道路は踏分道をいくぶん整備した程度のもので、道幅も馬馬が"すれ違う"に2m もあれば十分であろうと考えられていた。古代道路といえば

NO 86

DATE

「すべての道はローマに通ず」といわれたローマ道がよく知られ，ライン川以東の全ヨーロッパ，西アジア，北アフリカの各地にその遺跡が残っている。（最初に造られたアッピア街道は紀元前4世紀に開通しているが，その路線は計画的に，山を切り通し，谷には橋を架けて一直線に通っている。その標準的な構造は，中央に幅約3mの石敷の車道を置き，その両側に1～1.5mの幅の土の歩道があり，さらにその外側は芝を生した空地にして，芝地の外側に排水溝が掘られている，その全体幅は20m余であった。各地のローマ道はさまざまであるが，車を通すために舗装していること，直線的に路線をとることは共通している。）同じ古代道路であるのに，日本の道路は全く違うと考えられていたのは，ヨーロッパの人は先に道路を造り，日本人は必要に応じて道路を通すという，道路についての考え方の相違，国民性として日本人の計画性のなさなどが理由としてあげられていた。はたして日本人には計画性がないのだろうか。

古代国家の首都として8世紀に完成した平城京は，東西南北各同じ4丈（約120m）間隔の碁盤目状に街路が通る計画都市であった。また，奈良盆地一帯には条里制という，耕地を1町（約109m）間隔の碁盤目に区画する，古代耕地割計画が実施されていた。このような土地では，当然のこととして道路は直線に通る。奈良盆地には，平行して南北に通る上ツ道，中ツ道，下ツ道の三本の直線道と，これに直行して東西に直線に通る横大路の名称が早くから知られていた。奈良盆地の条里は下ツ道を境に二分され，また平城京の朱雀大路も下ツ道の延長であるから，下ツ道は古代耕地計画と都市計画のそれぞれの基準線になっていたことになる。

なお大阪平野においても難波京の朱雀大路の延長線上に位置する大道（難波大道）が存在し，これに直交する長尾街道，とくに竹内街道は本来直線道で，共に古代の文献にしばしば出てくる大津道二上大道に対応するとして，ここでも直線道が古代地割計画の基準線になっていたという。地方においても，全国の古代交通路を調査してみると，東山道の上野・下野両国，西海道の肥前・肥後国などで直線道の痕跡が残っていることが明らかになっている。

x 木下良「国府とその変遷を主にして」（教育社 歴史新書 44，1988

NO 87

DATE

x • 中央集権的律令国家の基幹組織となる地方行政区画は，国（後に郡）・郡・里（後に郷）の三段階に分けられ，国司・郡司・里長（郷長）がそれぞれの行政を担当した。これらの上に，首都圏ともいうべき畿内と，道路系を主として数国を連ねる七道があるが，大宰府をおいて九国二島を統轄した西海道以外は行政区として機能するものではなく，諸国を巡察して国司・郡司の治績を調べ，人民の窮乏などを奏聞する巡察使（按察使）や，問民苦使が派遣される監察区としての意味を有していた。

大化前代の地方組織として国や縣があって，国造や縣主がこれを統治していたが，大化後に逐次これらの再編成が進められ，701年の大宝令の制定・施行によって，令制の国・郡・里が確定したものである。こうして成立した国・郡の行政官庁が国庁・郡庁で，これらの所在地が国府・郡家とよばれて，それぞれの地方中心地を形成したのである。その成立過程からみても郡家が国府に先行したことが知られる。（発掘調査の結果）国庁の所在地を国府と称することが多いが，いっぽう国衙や府中という語もあり，従来は国衙は国庁，府中は国府と同義語であるように考えられてきたが，一般的に古代後半期，国府は両司の政庁がある国衙の所在地をさすが，発掘調査が十分でないためよく分らない。（国府跡として発掘調査が実施されたのは，周防，近江，陸奥の他，山城，和泉，河内，伊勢，尾張，遠江，伊豆，相模，武蔵，常陸，信濃，上野，下野，出羽，佐渡，丹波，但馬，因幡，伯耆，出雲，石見，隠岐，播磨，美作，阿波，讃岐，伊予，土佐，筑後，豊前，豊後，肥前，肥後，薩摩などの諸国であるが，南九州のため緊急に行われた限られた調査である。

• 諸国の国府は多く河川に沿って立地していた最大の理由は，古代都市が多くそのようであったように，内陸水運の便であったと思われる。また国府域

は一般的には分町なりしまり程度の大きさをもつので地形的には平坦な台地上か低地に立地することが多い。(武蔵、常陸、近江・伯耆・筑後など)(陸奥国府の多賀城の場合は丘陵である。しかし下野・出羽・因幡・出雲・国府・肥前・肥後などの国府は低地にある。) また古代のことながら、国土を統一支配するために中央と地方とを緊密かつ迅速に連絡する通信網と交通路の整備を必要とした。中央集権的国家体制をもった中国が律令国家も、唐の制度にならってその整備が進められた。火と煙による信号を送る烽(ほう)の通信網と駅馬(はゆま)、伝馬(つたわりうま)による連絡と交通のための駅道である。最も重要なものは、駅馬による緊急連絡の「飛駅(ひえき)」で、「公式令」に「事速ならば一日十駅以上」とあり、駅は30里(約16キロ)ごとに基準に設けられていたから、一日に160キロを疾駆したことになる。駅馬はまた、公文書の逓送や公務出張の役人の乗用にも用いられた。一方伝馬は国司の赴任・帰京の際などにも用いられた。その使用には厳格な規定はなく、駅馬と伝馬の利用区分は不合理な部分が多い。

駅馬をおく駅家(うまや)は東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道の駅路の主・支道に30里ごとを基準におかれ、伝馬は郡ごとにおくことになっていたが、平安時代に入ると駅を併置されたり、山陽道・南海道のように全廃されるところもあった。従来、日本の古代道については、駅路のような幹線道も、自然発生的な里道を若干拡幅整備した程度の、屈曲の多い小路と考えられていたが、近年の調査の結果には駅路を始めとする古代幹線道は、測量に基づいて土木工事によって計画的に建設された大道で、平野部では一直線に通り、その痕跡は空中写真や大縮尺の地図によって認められるようになった。発掘された道幅をみると、駅路が12、3mはあり、条里の余剰帯として認められる道路敷は15mから20m内外で、条里はこれを基準に施行され、坊里図・郡(郷)界となることも多かったことが知られる。これは、古代的国土計画の基準線としての役割もはたしており、国府の位置もこれを基準にしたと思われるものがある。

× 民族移動前のゲルマンは、原始ゲルマンとよばれ、タキトゥスのゲルマニアによると、勇敢、好戦的な、しかし信義に厚い素朴な民族であった。牧畜を伴う原始的農耕を営んでいた。彼らはCivitas(キビタス)という部族国家をもっていた。東西両ゲルマンがあったが、移動の頃は一つの部族国家となっていた。

7. ヨーロッパ中世の開発

× ヨーロッパの中世に入るとローマに代わりゲルマン人がヨーロッパの主役となった。2世紀の頃この民族移動の主因となったのは東方の遊牧民であるフン族のヨーロッパ侵入であった。そして地理的には、アルプス以北のヨーロッパが歴史の舞台となった。ゲルマン民族のホーム・グラウンドは、大西洋や北海に臨んだ西部ヨーロッパでヨーロッパでは温潤な気候でありそして肥沃な気候であった。北海沿岸の泥炭で埋まった湿地、ライン・ドナウ流域に広がった黄土地帯の森林やステップの荒原を別にすれば、中世初期の西部ヨーロッパはうっそうとした針・広混合林の連続であった。タキトゥス(Tacitus)の古代ゲルマニアについては森林と湿地であったようである。ゲルマンの原住地はこのようにスカンジナビア半島の南部からドイツにかけての湿地と森林地であった。しかし次第に南下してBC3世紀の頃には南ロシアにまで進出、一方ライン左岸ガリア(今のフランス)にまで進出しようとしてローマに阻まれた。しかし多数のゲルマンがローマ領内に侵入しており、帝政後期になってローマ帝国の力が衰微し始めるといよいよ侵入が進む。かくてローマの辺境地帯のローマ軍は多くのゲルマン人によって構成されるようになり、中央からのフン族(匈奴)のヨーロッパ西侵により西ゴート族はドナウ河を渡り、東ローマ帝国内に侵入、バルカンからイタリア半島に入り、410年にローマを占領、やがてガリアからスペインに入り、西ゴート国を建てた。東ゴート族も北イタリアを侵略して東ゴート国を建てた。またVandalはガリアを経てスペインに入り、のちにCarthageを都として建国、地中海諸島も領有した。さらにBurgundian族も北ドイツからガリアの東に南下、ブルグンド国を建てた。西ゲルマン人のうち北ドイツのJut(ジュート)とAngels(アングル)、Saxon(サクソン)の諸族は5世紀半ばごろイギリスに渡り、

ケルト人を駆逐して王国を建て，Franken（フランク族）はライン下流からガリアに入ってフランク王国を建てた。また6世紀半ば頃にはLangobarden（ランゴバルト族）はポイタリアに入り，ランゴバルド王国を建てた。かくてギリシヤ・ローマに代わり，ゲルマンが中心となって，西ヨーロッパを中心として，ギリシヤ・ローマの文化を多分継承しながら，新しいヨーロッパを築いて行った。

• 冬季にしか降雨をみない地中海地域は，アルプス以北のヨーロッパに比べて森林の安定性にかけ，ひとたび荒らされた植生の再生力はいちじるしく劣り。古代の栄光とうらはらに，中世の地中海地域が概して生彩に乏しい一因として，トロッケントライデン（Trockn-Treyden）は古代における建築用材・燃料・家具・造船用材などの需要に応じて，森林の乱伐されたことをあげている。森林の荒廃は泉や河水の減少に通じ，採草地や放牧地，耕地の消耗を助長し，その後には不毛な岩石が露出する。中世の地中海世界にとっては，もはや森林は開発すべきものではなく，周辺の未開地から輸入すべきものであった。中世後期，ヴェニスがダルマチア海岸に版図をひろげたのは，北イストリア，クロアチア，ダルマチアなどの豊富な船舶用材を掌握することによって海上権をはかったからである。

• 中世は大局的には開拓によるエクメネーの拡大が著しく進んだ時代である。今日のドイツで，総面積に対する森林比率を27%であるとすると，古代末期には少くともその3倍近く70～75%が森林で被われていたという。そして今は針葉樹が多いが，19世紀頃までは広葉樹が多かった。地中海地域も古代には豊かな森林で被われていた。中世ではも地荒廃の一路を辿っていた。

地中海式気候のため，夏は乾燥するので，薪炭がそそられ，地球

× 三圃農業とは，村の耕地を三分し，三つの耕圃（Feld, field）を冬作・夏作・休閑の順序で交代に利用する方法。日本の水田耕作にくらべて土地の消耗が激しく，Podsol化の危険の多いヨーロッパの畑作では，三圃農法こそ，畑の消耗を休閑と休閑放牧である程度補うことのできる点で当時としては極めて合理的な農法であった。（この農法は古代に発生した粗放穀草農業Wilde Feldwirtschaft）の改良されたものと考えられる。）

の利用も行われた。夏の乾燥により畑作にも困難な地中海沿岸では，古くから秋蒔作物と休閑，あるいは畑作と放牧の結合した三圃式農業が一般に行われていた。また肥料としては獣糞のほか緑肥（マメ科植物）が用いられた。他に木灰も灰も使用された。ローマ帝国の支配に伴ない，三圃式農業はガリヤやブリタニアの地方にも普及するようになったが，西ヨーロッパは

× 夏の乾燥がないため，春蒔・秋蒔・休閑を3年毎に繰返す三圃式農業が発達するようになった。中世の頃は，本来三圃式農業の地中海沿岸地方を除き，三圃式農業は北西ヨーロッパ全域に拡がった。作物は小麦と大麦が主体であり，アルプス以北湿潤な夏の気候を好む燕麦やライ麦が作られた。また果樹も古くから栽培され，スモモ，ナシ，アンズ，モモなどが作られたが，これらは海抜を必要としたが，その不要なブドー・オーブ・イチジクなどは乾燥に強く地中海沿岸地域の代表的作物となった。

二圃式，三圃式の様な穀草農業が散漫に適した山間地や湿潤で長く畑を放置すると悪質の牧草がアルカリ性土壌を好む良質の牧草を駆逐してしまうことから，海岸砂質土壌で休閑すると砂塵が生ずるような土地に分布した。三圃農業では，各耕圃は数十枚の耕区（Gewann）に分れ，各耕区ごとに村民々持分（Hufe）に応じ，土質・形状・位置・災害などの平等が保てるように保有地が分散交錯していた。保有地はゲルマン犁で耕せるように，細長い短冊形をなしていた。かくて各耕区や耕圃は，農民の土地保有の点で同じ構造をなしていた。このような持分の平等配分の原理をM. Weberは耕区制（Gewannsystem）とよび，毎年耕圃の土地利用を変えながら，同じ村落生活が営まれた。このようにして，村落共同体の団結がみられ，集落は集村をなす場合が多かった。そして集落の中核部や後の微高地には教会堂や墓地

の郎党がつくられ，共同体の支配が便が図られた。このような三圃農業は8～9世紀頃までゲルマンの中核地域であったパリ盆地，ライン，上ドナウ流域などにみられ，中世の西ヨーロッパの生活様式の主軸になった。イギリスやミッドランドンには13～14世紀までに二圃農法に替わり全面的に分布，12世紀前後からエルベ以東へのゲルマン移民と共に伝播し，16世紀頃にはロシアまで広がった。但し，イングランドでは気候が湿潤のために，元来乾燥地に広がっていた三圃農法はフランスやドイツに先立って崩れ，牧地化が進んだ。そしてこの牧地化がイギリス農村の近代化の先駆となった。

いっぽう二圃農業は地中海地域のものであり，夏に乾燥する地中海地域では，夏作物の栽培に不向きであり，ここでは畑作と放牧の結合は，冬作と休閑放牧の交代する二圃制の形をとる。そしてこの方法はホメロス時代のギリシャやエーゲ海地名にみられ，今日まで続いているところが多い。そしてこれはローマの拡大と共にガリア，ラインから流域，イギリスにも伝わった。この農法では耕区も不規則化し，三圃制卓越地域にみられるような規則的な長冊状の一筆耕地に代わり，方形に近い耕地が多かった。集落も散村や小村と共に巨大な集村もみられた。二圃農業は地中海地域以外，中世を通して孤島のように各地に残った。

- 中世も終り頃にいたり，ヨーロッパでは大規模な開発がみられる。一つはライン川やマース川のデルタ地帯であるニーダーランドの土地で，ここは早くから堤防工事が行われていたが，この堤防工事，築堤などの技術が発達，12世紀頃には自治的水防組合ができた。ゾイデル海の干拓によって培われた技術は，その後北海やバルト海沿岸の広大な低湿地の干拓にも力を発揮した。もう一つはイタリア北部のPo川の下流

域である。ここは10世紀頃に湿水で荒廃したが，12世紀頃から寺院や新しく興った商業都市などの手によって修復され，築堤や河床の浚渫，干拓も進んだ。これはミラノ，トリノ，ベニス等の商業都市の発達により農産物の需要が高まったからである。かくて人口の重心はイタリア南部から14世紀にはフランス，17世紀にはエルベ川以西のヨーロッパでイギリスを含め差異が増大して，移行した。

- 10世紀以後，フランドルなどの低地地方には貿易都市がおこり，毛織物工業で栄えたほか，マース川上流では金属工業，シャンパーニュなどでは定期市が発展し，いまや遠距離の重心は，従来の南欧地中海から北海バルト海へと移動していったとみるべきであろう。13世紀中葉，ドイツ商人のリードのもとにできたハンザ都市も，大部分はこの北欧地中海やその可航河川の沿岸都市であったし，内陸都市ブルンシュヴァイヒやハンノーファなどは，ウェーゼル川に通ずる運河をひらいて，人為的に北海と水路で結ばれた。12・3世紀ころからこの地方の商人たちは，都市の城壁の外側（suburbium）に特別の商業区をつくって定住することによって，自由都市の繁栄をみることになった。
- ゲルマンに視点を限ってみた場合，古代における最小の生活結体はGau（ガウ）の領域であった。今日もNiddagau，Rheingau，Allgäu（アルゴイ）などの地名の残存でみられるように，これらの領域は，周囲を原生林や沼沢地で囲まれ，ほぼ中央にはゲルマン固有の祭壇やブルクもあったと思われる点からして，最も典型的な地理的統一体というべきものであった。ヴュールゲンについてみても，—ach，—leh，—hausen，—leben，—ingenなどの地名など，或る程の古い地名の群落が，ほぼ古代Gauの領域と重なる場合が多いのが注目された。このGauが古代の百人組（Hundare），

ケンテナ(centena)の集団が選出される領域とも密接な関係があったと推定され，この9auが数10集った領域が部族(civitas)の範囲で，ゲルマニアには約40の半ば分が群立していたが，やがてメロビクスが統合合併して，フランク王国，ザクセン王国など種族国家の母体となったものと考えられ，ザクセン，フランケン，シュワーベン，バイエルンなどはこれらの種族国家を母胎とするものであった。これらの組織をからみつつ，10世紀前後から徐々にキリスト教の大小の教区の網が全土をおおい，キリスト教化の地域組織が完成したことも，また中世ヨーロッパの特色であろう。12，13世紀には一般都市相互の間には大小の荒地がとりまいていたことは眼瞭であり，これら諸地域を結節する中心地の都市が中世都市の成立であり，これら各都市の中心地は，裁判所，並館，城塞，教会，修道院，市場などを集積するとともに，遠距離貿易や種々のローカル通商ルートを出来るだけ吸引することによって，やがて大小の封建領邦形成の核となった場合が少くない。

8. 中国の開発

• 中国における居住地域の形成は中原である。ここは黄河下流の平野であって，その面積はほぼ30万平方粁といわれ，揚子江下流平野の20万平方粁よりたいへん肥沃な土壌よりなる平原で，ここは漢民族発祥の地といわれる。黄河は青海に源を発し，(最源流は玉門に近い祁連山脈に発する)，また一つの支流は巴顔喀拉(バヤンカラ)山脈に発する。オルドスを回んで流れ，流程5460km，流域面積75,240km²，潮河湾に注ぐ中国第2の大河川である。その流域は風成土壌である黄土(loess)地域を流れるため水にとけ易い黄土を多量に含んで流れ，郭満堂博士の計算によると年に6億7200万トンであるとされる。

× 東岸気候の特質をもつ。
⊠ 夏については，今の敦煌の付近に酒泉という城隊をもつ回鶻を営み，王権を確立した。

(NHKの「大黄河」では16億トンとされる。) 古諺に「一石水而六斗泥」といわれる程で，正に泥の流れの様相を呈していた。この量は揚子江の2倍半，ミシシッピー川の2倍ともいわれる。そしてその約35%が海に運ばれ，黄海といわれるような海を呈し，残りが平野に堆積した。かくて黄河下流の平野は約5千年の堆積作用によって今日の如く形成された。堆積した土壌は石灰質の肥沃な土壌で，小麦や高粱の栽培に適している。屢々洪水を惹き起したため，古くから堤防が築かれたが，このため天井川となって一たん溢流すると流域の農村に大きな被害を出した。かくて華北平野に出る箇所で黄河は屢々流路を変え，古代～中世の約2000年間は北流して渤海湾に入り，近世の5～600年は南流して淮河に注いだといわれる。この流路の変化を悪用して，華北平野に侵入した東狄は堤防を決潰せしめ，漢民族を苦しめた。

• この地域はユーラシア大陸の東部に当り，気候はMonsoon気候の特性をもつ。緯度が10°も高い西欧(西岸海洋性気候)のパリーと北京を比較すると，雨量は両者共略630mm程度であるが，パリーはこれが年間に均等に分布するに対し，北京は7，8月の2カ月に年雨量の約6割が降り，気温も最寒月気温はパリーが3.8℃，北京は−4.1℃以下，最暖月気温はパリーは19℃，北京は26.6℃で，年較差はパリーが15.2℃，北京は30.7℃となり，最高温多雨の傾向をもつ。しかしモンスーンは年による差が大きく変動が激しい。このため，有史以来，中原では旱害は2年に1度，水害は3年に1度みられたという。中原を発祥の地とする漢民族はこの自然災害と常に争わなくてはならなかった。

⊠ • この地には BC 2200年頃，夏なる国が現われたといわれるが確実ではなかった。が，近年発掘調査の進展により，その実在

× 長江の上流、四川省の成都近くの三星堆（さんせいたい）遺跡から青銅器を中心とした出土文物が（BC2500～1000年頃）（殷の時代）．当時長江上流域にも文化の一中心があったことを物語っている。

⊗ 晋は韓・魏・趙の3国に分裂。

が推察されるようになった。その後BC1600～1200年頃にかけ殷なる国が殷墟（安陽）を中心として，河南省の黄河沿岸一帯，安徽省の西北部，河北省の太行山脈の東部，山東山地の西縁などを中心として陝西省にも及ぶ領域をもったが，

× 7代の王は黄河の氾濫をさけて転々と都を移したと伝えられる．（P.72）殷墟は約300年にわたり殷の都であったところである．BC1200年頃，周は殷をたおして二十七代に代った。しかし当初の周城は殷と強さを変わらなかった。周はもともと殷の支配下に陝西の渭水流域にあった国であったが，殷をたおすと旧領土をそのまま継承し，洛陽に都を築いた。その後BC800年の頃，遊牧民の圧迫で都を洛邑に移し，春秋戦国の世となった。淮水から揚子江流域にかけ楚をはじめとする蛮，海岸地方には東，南方には呉・越などの蛮がいた。やがて楚が中原に進出，さらに呉や越がその後に続いた。中原の民族は蛮

⊗ に属したが，蛮はまた中華の文化に同化した。戦国に入ると，秦，楚，斉，燕，韓，魏，趙の七雄国が対立し，近隣の諸小国を併呑して広大な領土国家を形成した。（BC403～221頃）燕と趙は東北やモンゴリアに北で進出，遊牧民族と互に通じてその境界に長城を築いた。秦も長城で匈奴の侵入を防ぎ，四川の沃野を開拓，楚は淮水より揚子江流域を超えて呉・越の領土を含み，南は南嶺山脈の北までに達した。

• 七国のうちで秦が最も強く，BC221年，始皇帝によって天下が統一された。さらに南と北に境域が拡張され，北は匈奴を征服してオルドス（ordos）を確保，黄河を越えて北に長城が築かれた。南は南嶺，福建も中華の範囲に入り，前線は広東，広西からベトナムにまで及んだ。

秦によって開かれた領土は漢にうけつがれ，武帝の時に漢族の発展が行われた。漢の初めに匈奴の手にあったオルドスを回復，河

× 洛陽（ロンヤン）は黄河の華北の平野に出る扇頂部扇状地にある。（鄭州の西）戦国時代には漳水の水で灌漑が行われ，古くから稲も栽培されていた。

西へ進出，西は玉門関に達した。長城は現在より北遠かに北を走っていたが，後退して現在の線になったのは5～6世紀にかけて南北朝の頃である。今日のような壮大な形になったのは明代，主として15世紀のことであった。昔は集落も土壁に囲まれており，これが領土国家にも土壁がつくられ，隣国に対した。春秋に来長城が築かれ，戦国時代もあちこちに築かれ，秦に到って万余里の大長城となり，漢族と遊牧民族の間の標識になった。秦は全国に郡県制度を確立し，威勢はインドシナにまで及んだ。

• 前の項，（BC 770～221）黄河には部分的に築堤されたが，

× 漢武帝の治水，そして明帝の時，王景によって京陽より千乗に到る千余里に亘る金堤の築堤があり，また前漢の司馬遷は史記の河渠書に黄河治水の記事を残している。漢の武帝の功績を讃え，武帝は疏河と防河の法を行ったと記している。疏河は黄河の水を多くの水路を開さくして分水して洪水を防ぎ，防河は築堤して氾濫を防ぐものであった。古く，耕作のために導洫法（ニヲビゆのほう）なるものを施行したと伝えられているが，これは多くの水路の開さくであり，灌漑と共に洪水防止のためでもあった。

BC100年の頃，司馬遷は史記の中で「関中」と「三河」のことにふれている。関中とは長安（西安）を中心とする渭水盆地のことであって，当時の政治・経済の中心であった。人口は天下の3/10，富力は6/10を占めるという。三河は河南，河東，河内（河東は山西南部，河内は河内北部，河南は洛陽を中心とする地域で，かって夏殷，周の都のあったところであった。）の総称であった。後漢（AD25）に入り，西北民族が侵入し，春秋戦国以来の灌漑施設が破壊され，AD4世紀にのぞむと黄河流域には異民族の侵入が行われ，漢民族は南方へ移動せざるをえなくなり，人口が減り，江淮流域の人口の増加をみた。漢書の地理志はAD2年の統計に基づき，人頭税の徴収簿により当時の人口統計を記している。それ

× 「史記」の貨殖列伝に，「楚越の地は広く，人稀にして稲を飯とし，魚を羹とす。或は火で耕し水で耨くさぎる」とあり，当時の華南の進んだ農業状態に比べ華中の農業の後進性を示すもの。
（「火で耕す」というのは，乾期の水のないときに草に火を放つことであり，灰のあとに休をまくのである。雨期になり，休と雑草がともに生長するが，その後に休をくるぶしまで水に入れると，雑草のみ枯死する。二期作が行なわれるようになった。（飯沼二郎「風土と生活」岩波新書 1970.）

によると全国の戸数 12233062 人口 59554978であった。次いで140年には戸数 8698630，人口 49150220で減少の傾向にある。これは西北民族の侵入によって西北地区を放棄したためであった。四川・雲貴を別として，秦嶺淮水の線において北と南に分けると，AD2年には 5:1，AD140年には 3:1，そしてAD280年にはほぼ 2:1となった。（晋の統一と呉の滅亡の時には（1742年），北:南は 6:4と北が優勢であったが，唐の中頃から逆転し始め，AD1080年には 4:6となった。）

• 中国本土では一般に南へゆくにつれ，年平均気温も高くなり，（天津では 12.5℃，南京では 15.3℃，上海では 16.1℃，武漢では 17.2℃）雨量も多くなる。（概ね淮水の線で 750ミリを超え，天津では年平均雨量は 533ミリ，南京では 1072ミリ，上海では 1135ミリ，武漢では 1257ミリ）長江の下流平野はその総面積およそ 20万 Km²，肥沃なそして低平な江南デルタ地域は数多くの Creek によって刻まれている。この Creek（仏語で Criqueに）は細長い入海，潮入川，一般の川を意味し，かつて上海に来た外人が付近の土地を指して使ったものであった。かつての揚子江の分流で広大な Delta を形成したものであった。幅数米から数十米，中国人は蘇州河，楊樹浦（pu），走馬塘（tang），莊家港（gang），楊家幇（Ku）などと呼んでいるものである。司馬遷は「楚越の地，地広く米なり，稲を飯とし，魚を羹とす」と記しており，かつては異民族が住み，既に水田耕作を営んでいたことを表している。漢民族が北方から移り住んでからも，引き続き水田農業を拡大発展させ，Creek も灌漑用として利用し，水産物をとり，それに陸上交通の未発達の時代，舟運に利用して道路代わりに使い，集落も Creek 主軸に形成されていた。漢民族の長江流域への移動により揚子江下流域の開発は進み，隋が天下を統一した頃（AD581）は

× 朝鮮及び日本に仏教がいつ，どのように伝わったかは諸説あり。前二世紀に揚子江流域から南朝鮮を北九州に強く同時に伝わった。（白藤九大助）岡崎敬氏は華中→山東半島→西南朝鮮→北九州説をとった。

江南の経済は北方を圧倒しており，経済は南，政治は北といった具合であった。江南デルタ地域は縦横に走るクリークに沿い集落が構成され，クリークによって囲まれた水田農地は，圩田，櫃田，囲田ともよばれ，海岸部には塗田，沙田といわれた干拓地も形成された。景観はゾイデル海干拓地のポルダー（Polder）にもにて，クリークの結節点には鎮，城などといわれる田舎町や地方の中心都市が形成された。即ち交通（舟運）の要所であるからである。圩田村落ではクリークから揚水する足踏みの水車もみられ，村落民はこの水を圩田内の水田に水を配り，時折クリークの浚渫をし，肥沃な泥を水田内に配布して次土の高上に資したりした。このような作業はもっぱら共同で行われた。

× • 中国大陸は，河川は西から東へ流れ，大陸の東部や南部を囲む黄海，東支那海，南支那海などに注ぐ。これら河川水運に利用されていて，古くは中国大陸内での東西間の交通に利用されてきた。黄河，淮河，長江，そして西江もそのような流れをで，水運の便があった。しかし黄河は流出する黄土と三門峡のため航運が阻まれ，水運は部分的であった。いわゆる「南船北馬」も北部の水運の不便さを示している。黄河下流には黄河水運の不便さを除くために，BC3～1世紀頃人工的に運水（黄河に沿うて）が開かれた。しかし南北の交通は，陸上交通の発達していなかった往昔では，甚だ不便であった。水運は陸上交通の未発達の時代には大量高速の唯一の交通方法であった。それで，若し水運を利用しようとすれば，一旦海にまで出て改めて他の川を遡行する必要があった。揚子江流域が漢民族の南下によって開発が進み，「経済は南」になってから，南の物資を「政治の北」に運ぶために，隋代に到り，大運河が開鑿された。隋代では文帝（初代 AD581～604）が広通渠（長安～黄河），山陽瀆（江淮を連絡），煬帝（二代

NO 100

DATE

× 日本の中世は，鎌倉期，南北内乱期，室町期，戦国期の各時代を云い，12世紀末葉の鎌倉幕府の成立から，16世紀末葉の織田氏の統一制覇の時期，即ち天正時代の中頃までの約400年間を指すものとする。

AD605～616）は通済渠（洛陽と山陽渡）を設けた。さらに後には永済渠（洛陽東北の黄河～北京），江南河（鎮江～杭州）が開鑿され，銭塘江から揚子江，淮河，黄河を連ね，北京にまで到る南北の水運が整備された。特に通済渠は幅40間，運河沿に道路を設け，柳を植え，長安～江都まで離宮40，楽女を置し，高さ4丈5尺，長さ20丈の竜舟その他の舟1000隻を造らせ，煬帝は天下の民風を視察するとして竜舟に乗り，伴船数千をしたがえ，200支里の長さに亘り堤上に騎兵が引をなし，天下は奢のままであったといわれる。唐代以後，江南米の長安への輸送は「漕運」といわれ，さかんになり，多い年には700万石（唐の1石は漢石の3倍，33万トン）が揚子江流域より西北1100kmの首都長安へ運んだといわれる。しかし黄河は水運には必ずしも利便でなかったから，10，11世紀には運河の終点の汴京（べんきょう）（今の開封）が周，漢，唐1000年に亘る旧都長安に代わる首都として栄えた。

9. 中世・日本の開発

× • 條里の如き統一的で大規模な国土計画は強力な中央集権的国家の権力をバックとして始めて可能であったのであり，中世にいたり弛緩，動揺し，荘園化するとともにもはや新しく施行されることはなくなった。かくて中世には條里のような統一的計画はみられなかった。

古代に於ける人口の増加は口分田の相対的減少となり，政府は墾田を奨励せざるをえなくなった。社寺，院宮，権門勢家は既に莫大な寺田，神田，職田，位田（5位以上の者に賜った田），功田等を官給されていたが，この機会に更に広い空閑地を獲得した。畿内ではすでに開発の余地はなく，たとえあってもその面積は狭小であったが，遠国では大面積に及んだ。墾田はいかなるものでもすべて輸租田ではあったが，

NO 101

DATE

社寺，権門の墾田には不輸租田たる寺田，社田，職田（職分田）と同じように不輸租地化するものが現われ，一般公民もその名田を不輸租地とするために，その名主たる地位を保留してこれを寺社権門に寄進することとなったが，これらは分散していたので取扱上の不便を来し，互に断続を交換分合をはかり，明確な限界をもった荘園が成立するに到り，国使の入部を拒絶する不入の特権をもつものも出来るようになった。当初の間は荘園の人口も少なかったのであるが，律令政治の衰退に伴なって窮乏化した公民は郷里を捨てられて浮浪民となり，土地豊かな荘園に定住の地をもとめることとなり，人口も漸次多くなった。

• 荘園の面積は，奈良朝の東大寺領は大和・山城・摂津・伊賀等では何れも10町歩未満，伊勢・近江では70町にも達し，美濃・越前・加賀・越後等では100町を超えるものも少なくなかった。平野神でも平坦で水掛りのよい所は口分田として開かれていたので，班田制の前提に対する墾田は平地に近い丘山野丘陵，海岸河岸の低湿沼地などであった。荘園にあっては，その中心は荘家（荘園領主）であり，寺社荘園では末寺末社が荘園内に設けられ荘官がここに派遣され，ここが一荘の政治的文化的中心となり，民衆は漸次この周りに集まる傾向を示した。当時の荘園の住民は多くは自作農，あるいは地主的独立農民が主体であり，その有力者は荘園の下司（げす）に任ぜられ，荘園の不入権の発達と共に荘園の警察権を担当することになり，武士の成立の基盤となった。遠隔地の大きな荘園には荘倉，荘庫を設けて収穫物の貯蔵，荘官の住宅にあて，主として奴婢よりなる人夫の家がそれに付属して設けられた。荘園の村落形態は荘家を中心とした集村であったと想像される。墾田中の小集落は古語「保」であり，数戸程度の農家から成っていたと思われる。この保よりも大きなもの，大ノ口の家の合立した「垣内」であって

NO 102

DATE

とくに開拓者の名前をつけたものは「名田」であった。荘園内では、土豪の館を中心とする環濠集落の形をとるものも現われたが、このような所謂豪族屋敷は今日、館、陣屋、屋敷、土居、要害、垣内などの名称によってそれと思うことができる。また、環濠のものはその形を溝にとどめている。環濠集落は主として沖積平野の水田地帯、例えば筑後川中下流平野、甲府盆地、佐賀平野などにみられ、牧野信之助は奈良平野にもその存在を示した。豪族屋敷村は、豪族の館や小さな城を拠点とした中世の防御的集落であるが、その数は例えば甲斐国で265、会津盆地で約100、富山平野では120など多数であったが、土豪の根拠地は各一里にもみたないものが多かった。そして平野や盆地に拡立する弘仏や山麓の支脈端に山城が設けられ、これはとくに西日本に多い。相模川の谷口にある津久井城は375mの山上にある7ha程度の平坦地にあった。そしてその南麓には居館が置かれ、「やしき」とよばれていた。集落は根本、または本根小屋とよばれ、やしきの一段下方に、かぎ型に囲を引していた。筑紫野久恵川べりの窪田は台地城館で、今も土塁や空堀がみられる。この城の下は水田で、当時も利用されていた。台地城は東日本に多い。また平野の低湿地では、台地のへりの高地や自然堤防の微高地などに集落がつくられ、屋敷地もある。新潟平野や利根川、古利根川、荒川べりの低地に多くみられる。これらの集落は津久井を除きすべて水田を基礎にしていた。甲斐国志35～54巻によると文化11年(1814)当時に知られていた防御的施設及び豪族屋敷は総計265で、そのうち居住、防御両機能を併有する館、居館25、明かに近世成立のものを除く居住を主とした遺址、すなわち屋敷・居宅址及び屋敷跡址121となっている。

数

○谷岡武雄、「平野の地理」－平野の開発に関する地域「文化地理学的方法論」古今書院 0235,

NO 103

DATE

これらは鎌倉期にその完成形態があらわれ、室町期に入って盛行した。

- ヨーロッパの中世が大開拓期として特色づけられるに対し、わが国の中世では開拓が一般的に停滞的であると、とされる。計画的な条里制を施行し、多数の池溝を築造し、あるいは大寺院が開墾に積極的に参加した古代、荘園、町人、村民が大小さまざまな新田を切り開いた近世に比べて、中世における開拓の不振はあまりにも目立っている。これは一方では延長・天慶以後の荘園が新しい耕地の獲得よりも古い土地の再配分と経営規模の零細化に向い、錯雑した土地領有、保有関係が絡んで、エネルギーの拡大のためには何よりも安定な住民の団結を妨げ、灌漑施設造営の前提となる広い範囲での政治的統一を許さなかったからであり、他方では平和な新たな建設よりも、戦争のために莫大なエネルギーの消費があったからである。(谷岡武雄) 中世における一般的な社会不安と敵意に対する防禦の必要が溝や土手によって囲まれた集落を形成し、武士の政治的支配、封建制度がこれを助長した。日本の荘園は貴族の土地領有形態であり、イギリスのマナーのように荘園領主の強い統制下にあるまとまった経済体でもなく、荘園生活のすみずみまで浸透したものでもなかった。つまり荘園と中世村落とは別個の概念なのである。荘民は国家に対する租・庸・調を荘家に納めることになったけで、村落生活の基本は荘以後と以前とでは大差ないといわれている。(谷岡)
- しかしながら、奈良時代から戦国時代の始めまでは、大体は全く耕地の拡張、開田、開墾をめぐって展開したといってよい。それだけに、築堤、排水、溜池、灌漑水路、焼畑など、いろいろな形で耕地が拡張され、中でも湿地の開田は著しく進んだ。築堤は仁徳帝の頃(紀元4世紀のころ)、河内国の淀川に設けられた茨田堤

X、現在の茶業につながりをもつのは，1191年（建久2年）に宋より茶種をもち帰った栄西，及びそれをうけた山城・栂尾の明恵高弁である，近江の朝宮茶，政所茶は平安初期に始まるとされ，15世紀中葉に系統土壌にする蔭凉茶の製法が伝えられた。しかしこれらは何れも需要が限られ，15世紀前半の煎茶製法の発明までにはさほど大衆性を獲得していない。

があるが，鎌倉以前にはすでに畿内から東海地方にかけてかなり広く行き亘っていた。さらに鎌倉時代初期になると，関東各地にも堤防の構築並に修理に関する記事が多くなり，堤防工事は荘園の勢力が大きくなるにつれて漸次大きくなった。また鎌倉時代には庶民生活便宜としての大規模な灌漑工事が各地に施工されて，いわゆる名君の地には幾多の有名な工事が行われた。甲斐盆地の宮堰，車堰，四カ村堰，信玄堰など釜無川や笛吹川などの扇状地の水田化，駿河岡辺（現東郡の牧堰も有名），長野県更級郡の川中島用水堰，東京都の六郷用水堰などが行われた。溜池灌漑は奈良時代の中期から大いに奨励されて，先ず畿内において一般化し，平安中期には四国にも讃岐の溜池などその最盛が行き亘っていた。そして平安末期には溜池は降雨が少く，また流域の狭い小河川が並列する畿内の諸盆地や瀬戸内海一帯に広く設けられ，水利に乏しい台座平野や小高い三角州の頂部，山麓などがかなり広く水田化され，西日本における今日の溜池灌漑地帯の基礎がこの頃に確立された。そして1320年には濃尾平野の高輪輪中には潮除堤が設けられ，1335年（建武2年）には木曽三輪中が完成したといわれる。これらは江戸時代の初期に急速に発達した輪中工事の濫觴をなすものであった。そして濃尾平野では，寛喜年代の文永年間に水田二毛作（麦の裏作）が行われ，やがて西日本の各地に広まっていった。

x・室町時代における茶道の発達（茶は古来西南日本の山野に野生していたが，延暦5年－783年－最澄が種子と製法を中国からもたらした。現在の茶業につながりをもつのは，建久2年（1191）に宋より茶種をもち帰った栄西，及びそれを受けた山城・栂尾の明恵高弁であるとされる。近江の朝宮茶，政所茶は平安初期

に始まるといわれ，15世紀中葉に系統を異にする蔭凉茶の製法が伝えられた。しかしこれらは何れも需要が限られ，15世紀前半の煎茶製法の発明までにはさほど大衆性を獲得していない。

茶業は京都周辺の洪積台地や山腹斜面が利用されて，宇治，醍醐，栂尾などの茶園が開かれた。

戦後時代には戦乱に敗北した浪人をはじめ，各地の生んだ多くの流民が各地の山かげに隙田集落を形成し，階段耕作が行われるようになった。九州の一領主や四国の祖谷など，今日の隔絶山村形成の基を形成した。また伊豆，遠江，三浦，大隅などの半島や海岸には新しい漁村の形成をみた。

また，荘園の発達は都市の経済にも影響し，荘園からの年貢，その他の財貨，農産物などの都市への輸送のため，水運が利用され，港津の発達をみた。中国地方の荘園からの物資輸送に関し，兵庫津，魚住泊，室津，尾道そして淀など，北陸からは柏崎，敦賀，小浜，塩津，坂本，大津など，堺は大陸との交通の関門で貿易港であった。また宿場地として神崎，中村，博多など。当時の都市人口は京都は15万位，堺，天王寺，博多，鎌倉，兵庫津（津）は2～5万位，奈良・大津・坂本・桑名・岐阜・尾道・淀などは1万位，その他は2000～5000くらいであった。

・中世都市の特色は，そのほとんどすべてが，郷村的集落からの飛躍的な発展形式をとっていることである。集落・街路・家屋の配置のごときは極めて無計画な自然膨張的な性格を示し，かなり広い地域に亘って，数個の集落の集合から成る複式集団の形態をとっていた。すなわち，中世都市の主要な形態は多くの農地を含む郷村的集落の連合よりなる散居的構造を特色とし，一方では軍事的衛備を有しながら他方では商業的性格を併せ備え，都市と農村との境界も不分明であるのが一般的であった。門前町，城下町，宿駅町，河津町，市場町などがある。

・中世の城郭は特殊な要害の地形を利用して，峻険な山頂などに築城されたため，城下町はさほど発達しなかった。ところが室町時代に入り，守護大名や地方土豪の勢力の発展につれ，さらに戦国時代に入り，商品経済の成長，大名領地の膨張，軍団組織の整備などの理由で，築城地点が領国の政治経済の中心地，交通の要衝などの平野地帯に進出移動する形勢を示した。ある程要地点の付近の丘陵などを利用して構築されるのが一般的であった。その結果，城砦と町は密接しないで一定の距離を隔てるのが通例であった。下野足利，因幡鳥取，伊豆韮山，など。この傾向がさらに進むと，越後春日山などのように城砦は丘陵上にあるが，町屋が大手に面して密着して展開するいわゆる「平山城」の形態になった。この場合には，「城」＝堅固の城」ではなく，「堅固の城」でもなく，「所堅固の城」（治国）である。勿論中世城下町のすべてが山城あるいは平山城であったわけではない。豊後府内のように，平地の大友氏居館を都心としてその周りに町屋の展開する例もあった。

・市場町は荘園あるいは郷村内の市場を母胎として純粋な市場的機能のみに依存した町は比較的小規模なものであったと思われる。開市もはじめは三斉（下総佐倉，越中福光の例）であったが中世末に近づくにつれて六斉（山城宇治，美濃大矢田など）から九斉（下総佐倉，越中福光）に進み，やがて定期市場街から常住店舗街に進展したものと思われる。

河口あるいは河川の流域に発達する河津町は，河流を挟んだ両岸に左右相対して引村あるいは堤村の形をとることはいうまでもない。筑前遠賀川口の芦屋津，淀川沿岸の江口，神崎など。越前金津町は鳴鹿川（現在の竹田川）を挟んで河口荘諸江郷と坪江荘下郷に跨る南北金津両郷よりなるこの荘園であり同時に河津町であった。

× ヨーロッパの近世は，内にあってはルネサンスと宗教改革，外に向っては所謂大発見をもってその幕を開く。

× 10. 近世初頭の大陸発見の時代と新大陸

・大陸発見時代のEkumeneは陸地表面の約$\frac{1}{3}$（即ち4963万km²）であったといわれる。北方では古くからノルマン人（Northmen）が活躍し，AD 861年にはアイスランドを発見，983年にはノルウェーのレイフ・エルクソン（Erik de Rote-Eric the Red）がグリーンランドを発見，1003年にはThorfinnがアメリカ大陸の一部を発見，上陸しHellulandと（Steinland），Markland（Waldland），Vinland（Weinland）と名付けたと所の史家A.V. Bremenが伝えている。これらの地域は多分現在のラブラドルからマサチューセッツにかけての地域であろうといわれている。また中南米ではHernando Cortezによって亡ぼされる前に，メキシコではMontezuma王国，ペルーではInca帝国などが栄えており，またシベリア北部のTundraにはChukchi，Yukagirなどの古シベリア族の居住をみていた。このほか，北極圏の北極海沿岸にはカヤック・漁労を営むエスキモーや，オーストラリア大陸やタスマニア島にもアボリジンなどの原住民が住んでいた。アメリカ大陸のIndianは，ヨーロッパ人侵入前は合衆国内に約85万，カナダ領内に凡そ25万人の居住をみていた。そのほか，15世紀末，南北両アメリカ大陸を通じて原住民は約1500万人いたと推定され，このうちメキシコ以北の人口は1000万人余りとみられるともいわれる。米国内のインディアンは1850年に約40万，1880年に33万，1890年に24.8万人，そして1920年には24.4万人となった。アメリカ大陸では新石器時代の頃からインディアンの祖先が居住していたと思われる。現在では合衆国内に凡そ35万人が居住している。南北米合わせて総数700万人と推定される。（混血を除く）中南米では，メキシコにはAztec，ペルーでは北はエクアドルから南は4りの北部にかけ太陽帝国Inca，そしてメキシコ南部のユカタ

ン半島から中米のグアテマラにかけてはMaya文化，またコロンビア高原にはChibcha文化が栄えていた。白人侵入前，アメリカ大陸ではほぼこの4つの文化圏を中心に原住民の生活が行われていた。

• いわゆる発見の時代（Zeitalter der Entdeckung 一地理上の発見）以降，ヨーロッパ人によって発見された諸地域に対しヨーロッパ人（白人）の多数の移動をみ，原住民と戦い，これを征服し，あるいは長い間の軋轢の後，原住民を抑えて支配するに到り，新しい開発を進めることになった。ヨーロッパから新大陸への移動において最も多くの移住民を吸収したのは，いうまでもなく合衆国で，1820年より1904年の約80年間に2200万人，同じ期間にアルゼンチンは500万，ブラジルは400万の移民を迎えた。そして19世紀中期から100年間に6500万人の移住民がアメリカ大陸に移動したといわれる。イギリス人を中心とするAnglo-Saxonは主に北米へ，スペイン人，ポルトガル人は（ラテン系民族）中南米へ多く移住した。1851～1970年の間の移民では1850年までのイギリス人主体に対し，オーストリア，ハンガリー，イタリア，ドイツ，アイルランドなどからの移住も多くなっている。イギリス人はアメリカの他に北アニア，南アフリカ南部へも移住した。またアフリカから黒人が約1500万人もアメリカへ強制移住させられ，北米合衆国やブラジルなどに入った。これらの移住は，原住地における人口圧，生活の困窮，飢饉などの災害など push の条件もあるが，いっぽう新天地をもとめ，あこがれて移住したり，political motivation，支配と征服などもあった。日本は明治41年（1908）から昭和16年（1941）の間に約189000人がラテンアメリカに移住した。これらは主に人口圧が中心であったようである。（1908年には4月に4000t.の笠戸丸で合わせ名の家族がブラジルに移民の第一陣として渡

× Carpini（イタリア人）1182－1252.（東遊記） See P.18
Rübruck（フランス人）Rubruquis 1220頃～93
Marco Polo（イタリア人）1254～1324（東方見聞録）

った。）このようにして新しい居住地域の形成をみることになった。

• 発見の時代の先駆をつけたのはポルトガル人であった。当時のヨーロッパでは，中世末期の商業都市に始まった市民階級の指導から，封建領主やローマ法王などの桎梏から解放され，新しい民族国家の建設へと向う気運が高まっていた。このため，国家政策の確立が目指され，重商主義政策がとられ始めていた。当時のヨーロッパでは社会に客観的合理的なものの見方が新次復活し，地球についての球体説，そして古代ローマのPtolemaeusの地図もヨーロッパに復活，サラセン文化圏に伝えられていたものからラテン語に，さらにドイツ語にも翻訳されていた。数×師のCarpini，Rübruck，商人のMarco Poloなどによって伝えられた東洋の牡'泥は東洋の豊かな国に対する商業貿易の欲求を高めた。しかし当時のアジアの情況からみて陸路東洋への道は遠く，さらにトルコ人の興起によって長大な陸路は阻まれ，困難であった。いっぽう造船術，航海術の発達，火薬，銃砲の進歩，羅針盤などの発明は，海路，東洋への新しいルートの開拓の可能性を高めていた。そしてヨーロッパの人々が渇望する香料の入手も，その産地の東洋に対する憧れを助長していた。しかし，Ptolemaeusの地図では欧州から西へ大西洋を進めば当然東洋に到達することになる。ヨーロッパでも陸路東洋への道から最も遠く，海路東洋への途に最も近いイベリア半島のスペイン，ポルトガルでは，海路東洋への途の開拓は，特にNavigator（航海王）とよばれるHeinrich王子の海外発展，貿易奨励により，先ずポルトガルから始まったのであった。

• 1415年のJoão da Trasto の grand Canary 到達から始まり，1427～31にはD de Sevilla と Gonçalo Cabral（ポルトガル）のAzores諸島への到達，そして1482年のDiogo Cão の Congo River の河口への到達，1487～8のBartolomeu

X 当時南洋諸島の香料はアラビア人によって与えられ，使用されていた。アラビア人の手を経ずして直接香料（スーロッパ人の日常生活に欠かせない）を入手しようというのが大きな目的であった。

Diazの喜望峰到達を足，1497～8にはVasco da Gama（1469～1524）のインド・カリカットへの到着があってアフリカの外容が明かにされ，1492年にはイタリア人C. Columbusを隊長とするスペインの探検隊がはじめて大西洋を横断して，スペインのCadiz港を出帆後35日目に西インド諸島のWatlingo Is.（San Salvador）に到着した。Columbusは引き続き4回まで航海を行って西インド諸島や中央アメリカなどの地理を明かにした。その後1497年，伊人J. Cabotoを隊長とするイギリスの探検隊はブリストルを出発，アイルランド沖を北上して25日の航海の後カナダ東南端のケープ・ブレトン島（Cape Breton）に到着した。その後，カボットの後継者たちはグランド・バンクの漁列を漁業に活用しはじめ，16世紀の初期からイギリス・フランスをはじめ西ヨーロッパ諸国の漁船がここに来漁し，ニューファウンドランド島には夏季のみの集落が生まれていた。1500年4月にはポルトガルのCabralがインド航路の途次，偶然，ブラジルの海岸に到着，東岸一帯を調査し，国王に捧げた。この時本国に持ち帰った珍貨の中に土器でブラジルとよばれる赤い染料木があったのでいつしか国土もその名でよばれるようになったという。

X • 1519～20年，ポルトガルのMagellanは，南洋の香料の島へ向うスペインの第2回目の壮挙で，後に彼の名をつけたMagellan海峡を通過し，太平洋に出，西航の後フィリピンに達し，殺されたが，残りの船が1年の後，祖国の港に帰りついた。ここで地球の球体が確認されたが，マゼラン海峡通過の際，左側の陸地はあくまでPtolemaeusの地図に載っている南方大陸（Terra Australis Incognita）の北の岬と信じていた。1577年，S.F. Drakeもマゼラン海峡を通過したが，同様にTierra del Fuegoを南方大陸の北の岬と信じていた。Ptolemaeus

の地図にはアメリカ大陸は描かれて居らず，南方には南方大陸が大きく描かれ，これをめざしての探検が後に南太平洋の探検の端口をつけた。1643年になり，Brouwerがホーン岬を廻り，はじめてTierra del Fuego島なることを確認，南米大陸の南端を明かにし得た。そして1513年，スペインの武将Balboaが中央アメリカの地峡を横断して太平洋を発見，アジアと異なる新しい大陸であることを発見した。また1501年，イタリア人のAmerigo Vespucciが南米の海岸に到着，その手記により，1507年ドイツの地理学者Waldseemüller（1475～1521）が世界地誌を刊行，その中に新大陸（とくに南米）をアメリカと呼ぶことを提案し，地球儀にもそれを記したことから，今日新大陸全体をアメリカと呼ぶ端緒となったといわれる。1513年Ponce de Leonがフロリダに到着，漸次大陸の状況が明かになって行ったが，新大陸の北端については，その後，16～17世紀にかけての北西航路と北東航路の探検に伴ない，1576年にM. Frobisher N63°付近の湾に入り（彼の名をとったFrobisher Bay），1585年にJ. Davisがが Davis海峡を発見，1609年にはHudsonがHudson湾に入り，後グリーンランドからSpitsbergenに到った。このようにして明らかにされていった。

• スペイン人による新大陸の植民は早くも15世紀末，西インド諸島に始まり，その後も継続した。彼らの植民地には高度の文化をもったインディアンの国があったが，Aztecはは Cortezにより1521年に，Incaは Pizzaroにより1532年に征服された。ラテンアメリカ植民地の共通点は，当時，ヨーロッパで貴重品とされた金・銀などの富の掠奪を目標にした男子の軍人・官吏などが中心であったことと，インディアンに食料と労働力を提供せしめ，目標を達成した後本国に引揚げたことであり，この点，北米大陸のアングロ・サクソンによる（家族移民）植民とは性格を異にしていた。

このため，各地でインディアン婦人との間に雑婚が行われ，多くの混血（mestizo）が生まれ，ブラジルなどでは輸入された黒人（タバコ，甘蔗栽培の労働力として）とも混血して多くのmulattoを生み，今日のラテンアメリカの人種的基盤となった。ラテンアメリカの地域は全体の約70%が熱帯に含まれ，温帯にある地方でも砂漠や半乾燥地の占める割合が高い。このため人口分布や開発の地域がたよりが大きい，熱帯では高地が，乾燥地帯では川沿いのオアシスが生活の場所となっている。西インド諸島や中央アメリカは，貿易風によってスペインから直航できる位置にあり，高温多湿の気候と火山岩の分解による沃土に恵まれ，原住民は早くからトウモロコシ，バナナ，イタ，タバコ，などを栽培していたが，スペイン人はさらに牛と甘蔗をもたらした。

スペイン人の植民の中心地は，コロンブスによってHispaniola（小スペイン）と命名されたハイチ島で，Santo Domingoがその首都として繁栄した。1525年までには主に此処を足場に，キューバ，ジャマイカ，プエルトリコ，中央アメリカ沿岸にも白人の永住集落が成立した。かくて，プランテーションが漸次多く，広くなると共に，原住民の死亡率は白人の過酷使によって異常に高まり，その人口は減少して行った。

- メキシコは高原を形成し，東西両側に大きく東西シエラマドレ（Sierra Madre）山脈がある。高原の南部は温暖で雨がかなりあり，豊饒な谷には早くから原住民が住み，アステックもメキシコに首都を置いていた。スペインの300年の治世を通じ，実際に植民が行われたのは高原の南部で，北部は砂漠が広がって，名目上の植民地であった。南部では白人地主（メスティソ）によって農業が進み，銀山が各所に開かれ，本国に巨富をもたらした。本国からの護送船団（フロータ）は30～80隻の商船に護衛の軍艦がつき，英・和・仏などの攻撃に備えた。16世紀後半にフィリッピンが植民地になると，

本国との往来はメキシコ経由にされ，南岸のAcapulcoがフィリッピン貿易の関門にされた。喜望峰の航路はポルトガル人によってふさがれていたためであった。アカプルコからの西航は北東貿易風を利用したが，帰航は北方の偏西風を利用して北カリフォルニアのMendocino（メンドシノ）（サンフランシスコの北，注釈者）沖に来て，ここから海岸沿いの北西風に乗ってメキシコに来た。メキシコの太平洋岸の植民が捗らなかったのは砂漠のほかに，海上の北風と夏の濃霧のためであった。いっぽう，アンデスの西麓は，インカ帝国はピサロにより，黄金の探索のために征服された。しかし植民後，採掘してみると金は既に掘りつくされ，もっぱら銀の採掘に主力が置かれた。アンデス地域はプランテーション適地ではなく，植民時代の政策はもっぱらインディアンを酷使しての銀・鉛・錫などの鉱山業であった。特にPotosi（ポトシ）（ボリビア）は1545年に発見された最大の鉱山で，全盛期の1650年には市の人口は16万人で西半球最大の都市といわれた。1535年には新首都Lima（ペルー）が海岸に建設され，郊外のCallao（カリアオ）が銀の積出港として開かれた。インカ帝国時代には海岸と高原の間に舗装道路がつくられ，リャマの背に荷を積んで上下していたが，スペイン人はラバも駄獣として持ち込んだ。インカ時代は地形上，統治のために縦谷道路が幹線であったが，植民時代になると山脈越えの横断道路が幹線となり，日用雑貨と鉱石が相互に運ばれた。これらの道路は現在は，海岸と高原を結ぶ鉄道に変わっている。

- ラ・プラタ川（La Plata）流域の低地は，スペインの植民地の中でも開発の遅れたところであった。川の上流の鉱山（銀）を求めて遡行した探検隊は，1537年，Asuncionを建設，植民地の基地となった。ここを根拠として1573年にはSanta Fe，1580年にはBuenos Airesの諸都市が開発され，発達することとなった。広大な低地にはスペイン人を惹きつける鉱物資源はなく，北

× (escarpment)
急崖

半は亜熱帯性のsavannaとなす. Gran Chaco, 南半は温帯草原のPampas（パンパ）であった。かくて植民時代の産業は粗放な牧牛だけであった。白人の地主のもとでgauchoと呼ばれるMestizoが牧牛を営んだ。牛の生肉の輸出ではなく、牛皮、乾燥肉、羊毛などが輸出された。また生牛のままコンデスお面へ輸送された。陸路のなかでラプラタ川が交通路として利用されたが、河口のBuenos Airesは1764年になると本国や他の植民地との貿易港に指定され、12年後には新設のラ・プラタ副王領の首都としてこの地方の中心となった。

• ポルトガルの植民は本国が人口の少い小国のため、多くの植民者を送れなかったこと、本国の政策が東南アジア植民地の開発に重点が置かれたためにあまり進まなかった。またブラジルの大半はツピ＝グアラニ族（Tupi-Guaranies）の住地で不断の襲撃に悩まされたこと、また国土の周辺が不健康な熱帯密林で囲まれ、海岸低地の直ぐ背後に山地の縁のEscarpment（急崖）が迫っていたため奥地への進出は困難であった。バイア付近の海岸も仏人に占領されたこともあり、これを駆逐したのは1531年のことである。また17世紀には数十年に亘り北東部がオランダ人によって占領されていた。海岸のプランテーションには、インディアンが少かったため、黒人奴隷が大量に輸入されたためmulattoが多く、mestizoが少ないという特色があった。また農牧林業による開発が主力で他のスペインの植民地のように鉱山開発が主力でなかった。初期の開発は北東部の海岸低地とSão Paulo 中心に行われたが、特に港のBahia（=Salvador）を中心とする甘蔗のプランテーションであった。高温多湿の気候でインディアンが少なかったので、アフリカのポルトガル領アンゴラから19世紀の始めまでに輸入された黒人奴隷はおよそ600～800万人と推算される。17世紀

× Bahia, Pernambuco, Ceara, Maranhão
△ ミナスジェライスの鉱山，パンパの鉄道，アタカマの硝石など

になりヨーロッパの砂糖の大半はブラジルから輸入されるようになり、主産地のバイヤやペルナンブコ（ペルナンブコの北）（バイアす北）あたりには砂糖貴族も生まれ盛況であった。おくれて綿の栽培もペルナンブコやセアラー、（ペルナンブコの北）マラニアン（ceará の西）などの州で盛んになった。海岸低地と高燥な高原の間は、密林に被われた急な山腹があったため、少数の横谷に沿い交通が行われ、白人と開化インディアンとの混血が進み、Mestizoが多くなると、これらの河谷を通って奥地の開発が進められた。その主力はパウリスタ（サンパウロ人の意）は植民の初期から快適な気候のサンパウロ高原の開発を進めながら、マットグロッソ（Mato Grosso）へ進出した。17世紀末にミナスジェライス（Minas Gerais）に金鉱が発見され、ゴールドラッシュが生じ、高原に多くの小都市が発生した。かくてブラジルの経済的重心は次第に南に移り、1792年にはRio de Janeiroに首都が遷された。16世紀末にはブラジルの海岸の人口は白人2.5万人，開化インディアン2.9万，黒人奴隷4.3万であったが，18世紀末になると総人口324万人，メスチソを含む白人は100万，インディアン25万，被解放奴隷40万，奴隷158万（うちmulattoは22万）であった。ラテンアメリカの植民地支配300年は19世紀の初めに終わり、スペイン植民地の各所に独立運動が起り、本国軍とあちこちで激戦が行われた。そして1810～30年の間にいずれも独立を完了，多くの共和国が成立した。ブラジルは本国から皇族を迎えて皇帝とし、1822年，ラテンアメリカの最初の独立国として出発，1889年，奴隷制廃止により帝政が終わり，共和国となった。しかしスペイン系の諸国は軍閥や独裁者の血生臭い争いが繰り返され，民心の不安定がつきまとった。

△ このようなラテンアメリカに対し，産業革命の先進国であるイギリスが製品の市場を南米にとめたのみならず，鉱山，鉄道などに多くの投資を行い，19世紀の半ばすぎまで経済支配を行ったが，

× 1615年, シャンプランが五大湖を探検, ラサルはミシシッピー河口まで辿りついた。

合衆国のモンロー主義によって政治的野望は遂げられなかった。

• 北アメリカ大陸へのAnglo-Saxonの移住は16世紀末から始まる。1620年12月にmayflower号がプリマスに上陸, スペイン人はフロリダ半島とカリフォルニア南部に, フランス人はSt. Lawrence川を遡り, 五大湖からミシシッピー河口へ, ロシア人はアラスカから南下してサンフランシスコに至り, 何れもインディアンとの毛皮取引や教化を行った。16世紀の初期, イギリス, フランスをはじめ西ヨーロッパ諸国の漁船がグランド・バンクに出漁し始め, ニューファウンドランド島(Newfoundland)には夏季のみの集落が生まれ, 漁網の製造や漁船の修理が行われた。1535～42年にはフランス人のカルティエがセントローレンス川を遡ってモントリオール(Montreal)に達したが, 17世紀になると5回の探検隊によって五大湖の一帯からミシシッピー川の

× 沿岸まで明かにされ, フランス植民地として宣言された。

この地域は地形的に交通が許され, 五大湖とミシシッピ(Mississippi)水系とを合水嶺は緩かな丘陵で, 洪積世の氷期の終りに五大湖の水を排水した河川の跡である溝れ谷があり, インディアンが内陸旅行に用いた樺皮製の軽いカヌーを使い, 溝れ谷を陸路運ぶ(portageと呼ばれる方法), 長距離の内陸旅行が自由であった。しかしフランス植民の定住はセントローレンス川沿岸の平野のみで, 他は, 当時ヨーロッパで貴重品であった毛皮の取引に終始していた。カナダの針葉樹林には毛皮獣が多く, インディアンは狩猟に巧みであったので, フランスの商人達は酒とか火薬を引換えに毛皮を手に入れ巨利を得た。このため, フランスの植民者は少く, 18世紀半ばを過ぎてもセントローレンス川沿岸に6万人, 五大湖南岸に1500人, ミシシッピー沿岸に3200人, ほかに奴隷2000人を数えただけであった。イギリス人達は合衆国の東海岸に植民地をつくっていて, アパラチや山脈はフランス人と

の境界をなしていた。山脈を貫くハドソン川, モホーク谷, シャンプラン(ーレン)湖の凹地帯には勇猛なイロコイ族が居住しており, 両者の関係は断たれていた。しかしイギリス人はHudsonの探検でカナダ北部にも進出, 16707年にハドソン湾商会を設けて毛皮貿易による利益を得ていた。本国同志がフランスとイギリスがオーストリア継承戦や7年戦争で交戦している間, 北米でも激しい攻防戦が繰り返され, ついにフランスが降伏, 1763年のパリ条約でカナダの全植民地をイギリスに割譲した。スペインの植民地におくれること1世紀, フランスのカルティエの探検におくれること半世紀で, イギリスはヴァージニア海岸に来航, 1607年, 初代プアイン・スミス総督でヴァージニアのジェームスタウンに最初の永住集落ができた。そしてやがてその周辺に煙草のプランテーションを開拓した。北方ではメイフラワー号の上陸(後), 清教徒の移住が行われ, ニューイングランドの開発が始まった。かくて冷涼な北部は製材, 造船, 漁業を伴なう自給農業地として, 亜熱帯的な南部は企業的プランテーションを中心として発展した。温暖なこの地方の海岸は主に, オランダ, スエーデンなどの植民が行われた。殊にオランダ人はハドソン川を遡行して毛皮貿易に活躍し, 1623年に河口にニューアムステルダム(のちのNew York)を建設した。イギリスは航海条令の発布で先進海運国の勢力を圧倒し, 1644年には大西洋岸全部をイギリスの主権のもとに統一することができた。

• イギリスの植民地は, フランスやスペインの植民地と異なり, 堅実な白人の農業に支えられており, 白人の人口増加がめざましかった。1721年に50万だった人口は, 1743年に100万を越え, 1770年には250万に達したが, さらにここへ来住する白人はイングランド人のほかスコット系アイルランド人やライン川流域のドイツ人など, チュートン系の多数民族が含まれていた。移住者の多くは年期契約の従僕で, 渡航

× fall-line cities（滝線都市）アメリカ・アパラチア山脈東麓，その他の地域で滝や急流に沿って線状に分布する都市群。山麓台地との境界の，河川の勾配が急変する地点にあり，急流，早瀬である，河川交通の終点ともなり，水力利用の工業が行われたりする。トレントン，フィラデルフィア，ボルチモア，ワシントン，リッチモンド，コロンビア，オーガスタ，メーコン，モントゴメリーなど

費や農業資金のないため5～7年間の契約によって農園の労働者となり，年期が終ると自営農民になり，もっと地価の安い内陸へ転じの農地を求めて進出した。当時の農法は粗放で地力がすぐに消耗したので，絶えず内陸の処女地を求めて開拓する必要もあったのである。

やがて13州植民地の独立運動が起り，本国との戦に勝って1783年にその独立が承認された。このような複雑な諸民族の集合体がなぜ政治的に1国家な13州植民地として統一され，本国から独立して合衆国を建国したのであろうか。Turner F. J.「The Frontier in American History」1920, New York によると，彼は「Frontier」に見出している。Frontierとは単なる国境の意味でなく，白人の開拓地の前線で，インディアンとの接触地帯を指すのである。そこには新天地開拓の意気に燃える白人がインディアンとの不断の闘争に対処するため，民族の別を捨てて常に緊密な協力体制をとっていた。またFrontierが奥地へ進むほど，本国の統治権はそれだけ弱くなり，植民者の自主的意志力のみが障害に打勝つ手段になった。海岸にあった最初のフロンティアーはいわばヨーロッパの
× 前線だったが，17世紀末にfall-lineまで，18世紀前半にはオハイオ川上流部やペンシルバニア西部までもフロンティアが前進するとすでにその性格はアメリカ的なものに変っていた。このようにして，「多数のヨーロッパ民族」ではなく「一つのアメリカ国民」が形成されたとTurnerは述べている。イギリスの13州植民地は，加盟と同時にミシシッピー川本流以東の地を本国から譲渡され，一挙に2倍以上の面積になった。（アメリカ合衆国として）1803年にはフランスからのルイジアナ買収によってまた面積が倍加，（ルイジアナは現在のルイジアナ州だけでなく，ミシシッピー本流とロッキー山脈との間の土地の総称である）（パリ条約によってスペインに割譲したフランスはナポレオンの権力によって1802年に回復したが，この間合衆国

× ミシシッピー河口からメキシコ湾沿岸，フロリダ半島を含み，当時スペイン領であったが1810年にはその西部が，1819年にその他の全部が合衆国に併合され，湾岸のスペイン都市は一掃された。
△ 朝倉「史地理講義」2巻 P284～286. 図版参考

との間に條約が成立し，15のマイルでこれを買却することになった。かくてそれまで国境河川であったミシシッピー川は河口付近
× 1ヶ所を除き，すべて合衆国の国内河川になった。そして1845～48年に今日の領域が確定した。19世紀の初頭にはテキサス地方全部で人口は2000人だったが，そこへ新興の合衆国民が綿作適地を求めて来住し，1835年までに約4万の入植者をみた。メキシコの力を軽侮する合衆国はその翌年，リオグランデ以東のテキサスをメキシコから独立させ，1845にはこれを併合した。メキシコはその翌年単独断交し，テキサスの併合を承認させられた。そしてその西境から太平洋岸まで続く領土を一挙に合衆国へ割譲させた。それはカリフォルニアの沿岸貿易と山岳地帯の毛皮資源を早くから合衆国が注目していたからである。北西部のオレゴン地方は初めは合衆国とイギリスとの共同管理に置かれていたが，合衆国の毛皮商人や宣教師が多数入り込むに及んで合衆国の強い関心の的になった。カナダからのイギリスの移民はほとんどなかったが，合衆国からの移住者は1843年から急に増加，3年間に5000人を越えた。1848年に両国間に協定が成立，従来ロッキー山脈以東について確定されていた49°Nの国境線が新たに太平洋岸まで延長され，それ以南のオレゴン地方が合衆国領と認められた。

• 合衆国の領域の拡大は，その人口の西漸に立脚して実現されたもので，未開の森林や草原を横切って新天地の開拓に向う移住者の流れは堰を切った激流のように力強く押し進められた。この現象を一般に西漸運動（Westward movement）と呼んでいる。
△ 第1回のセンサスの行われた1790年にはフロンティアーはまだアパラチア山地をあまり越えていないが，20年後にはオハイオ・ケンタッキー・テネシーの地域を通り過ぎ，世紀半ばにはミシシッピー本流よりもいちじるしく西へ進出している。進出の速度は中央部がやや北寄りと最南とにおいて最も大きいが，前者は開拓初期からのオハイオ川水運の利用と，

沿岸のトウモロコシ地帯（corn belt）の形成，後者は綿花地帯（cotton belt）の発展を夫々反映しており，テキサス併合が決定的な運命であったことを教えている。

1870年には中央の空白地帯を貫ぬき越えて太平洋岸に初めて白人の居住圏が現われたが，これは1848年のカリフォルニアのGold rushの影響であり，それと共に1869年に最初の大陸横断鉄道がシカゴ・サクラメント間に開通したことも見逃せない。またこの時期に五大湖から西方へフロンティアが活発に前進しているが，これはプレーリーの春小麦地帯開拓の時期を示している。1890年になると内部に空白地帯が残されているにせよ，東西から進出した白人居住圏がまだに接触せんとしており，以後は居住圏の拡大というよりも人口稀薄地の網密化という方向をとる。

フロンティアの西進につれて人口重心も西へ動いた。1790年にボルチモア付近にあった人口重心は，19世紀の半ばにはすでにアパラチア山地を西に越え，世紀末にはシンシナティの西方へまで移動した。19世紀の後半以来，東部において近代工業の発展が著しく，そのため巨大都市が急速に成長したにもかかわらず，合衆国の人口重心は20世紀においてもなお西漸の傾向を示している。歴史の古い東部よりも新開地である西部の方が，今なお多量の人口吸引力をもつことを示すものであろう。

このような人口の西漸は，一方においては絶えず移民が流通な富と自然増加率によって支えられていると共に，19世紀大西洋を越えてヨーロッパから移住する人口によって可能になったわけである。1870～80年頃まではイギリスを筆頭にドイツその他のゲルマン系移民が中心であったが，それ以後になるとポーランドや南ヨーロッパからの移民が多くなった。移民の入国数は1820～60年に600万，1861～1900年に1400万人であった。（奴隷としての黒人は含まず）1619年に初めてバージニ

アのプランテーションへ輸入された黒人奴隷は，1790年にすでに80万人になっていた。南部における綿花地帯の発展と七月1日の奴隷の入国数は激増し，南北戦争当時は400万人に近ずいていた。この戦争によって黒人は解放されたが，19世紀の終り頃から工場労働者として北部の工業都市へ移住するものが増し，黒人の分布状態は多少とも変化している。

- 国土が開けて人口が西へ西へと発展してゆくのは，交通路の整備を待って初めて可能になる。植民時代には河川や海岸に沿って帆船やハシケが往来し，自然の路上を徒歩，騎馬，馬車などで交通が行われていた。新政府は国土の開発のため交通路の改良が急務であると考え，1790年から Turnpike road の建設を始めた。これは迅速な馬車交通を目的とした官営の有料道路で，人口の密な東部地方に細かい網目が作られたばかりでなく，アパラチア山地を横切るカンバーランド街道などが西部開拓の基線となった。

合衆国の交通史はやがて内陸水路時代に入る。1807年にはフルトンがハドソン川で汽船の試運転に成功，4年後にはオハイオ川に最初の汽船が現われ，1816年にはミシシッピー川本流の汽船の定期便が開かれ，汽船の実用時代が到来した。この頃メキシコ湾岸のスペイン領が合衆国に併合され，ニューオーリンズは河川と海洋の航路の連結点となり繁栄し，国内最大の商港になった。それは五大湖南方の肉類の市場であり，南部の綿花を集めイギリスへ輸出する基地であった。1825年，エリー運河の開通があり，五大湖とハドソン川とを結ぶ360哩のこの閘門式運河は，アパラチア山地を横切る唯一の gap に生まれて交通の大道としたもので，ニューヨークの後背地は一挙に大内陸地方にまで拡大された。世界最大の商港になる基礎はここに定められた。かくて合衆国の東部には異常な運河熱が起り，多くの河川や湖沼は網目のように運河で結びつけられた。このような運河のコースはほとんどがインディアン時代の portage

(運搬)ルートであり、後にはこれに沿って鉄道や自動車道路が開通した。

• 19世紀の半ばまではこのように内陸水路が広い国土の主要幹線であった。1828年、ボルチモアに最初の鉄道が通じたが、20年間位は未だ鉄道の量産は本格にのらず、1850年の鉄道網は北東部で密だったにすぎなかった。(新企業の前途に確信をもてなかった) 1850年を過ぎると初めてミシシッピー本流以西へ鉄道が延び、東部でも長距離鉄道網が形成されてくる。しかし西部の交通の主役は依然、郵便馬車であった。北東部で密であった鉄道網も幹線交通路としての水路の補助交通機関の感があった。やがて東部においても急速に長距離鉄道網が形成されてゆく。そして1860年頃になると鉄道と水運の併用によって能率は高まり、北はミネソタ、西はネブラスカ、南はテキサスの東部までがニューヨークから一週間で旅行できるようになった。かくて急速な人口の西漸や交通路の発展と併行して未開の森林や草原は東から西へかけて次第に耕地や牧場に変わり、特にアパラチア越えの比較的容易な北部において最も早かった。そしてエリー運河が出来た頃には既にトウモロコシ地帯(corn belt)の東部は形成されていた。そしてこの運河の開通で東部に大市場が獲得され、穀物・肉類の取引市場としてのシンシナティ(Cincinati)の地位は1833年頃に確立した。そして南北戦争の頃に至るとシカゴがこれに代わるようになった。また綿花地帯は西へ西へと拡大されたが、1793年ホイットニーによって綿繰機械が発明され、またイギリスの産業革命の進行に伴う綿花需要の増大はその発展に拍車をかけた。1811年には綿作の中心は東部にあり、西部ではテネシー・ルイジアナ両州合わせてようやく全国の1/6の産額であったが、1821年になるとアラバマ・ミシシッピーを加えた4州の産額はすでに全国の1/3に達し、1834年には全国の2/3を越えるようになった。また南部の綿花輸出数量は1810年の500万ポンドから1820年には3000万

ポンド、1834年には1億64000万ポンドに増大している。そしてミシシッピー川の汽船航路の確立がこの発展を助長したといえる。このような新興産業の発展は政府をしてテキサスを併合せしめ、奪取させたと考えてもよい。

11. 近世におけるヨーロッパ諸国の確立

• 産業革命は18世紀中葉のイギリスにおいてまず発生した。当時のイギリスでは、羊毛工業が問屋制家内工業または manufacture の形で広く営まれた。(工場制手工業、機械がまだ発達しない以前、同種の手工業者が一つの作業場に集まって、分業的協業を行う資本制生産形態をいい、ヨーロッパでは近世初期から産業革命までの間にイングランドを中心に発展した。日本では江戸時代の末期から交通・商品流通の発達と共に起こり、問屋制家内工業の問屋や地主の中から現われた)

16~18世紀のイギリスはマニュファクチュアの発達、政治的には市民革命や立憲政治の発展などを通じて近代的な資本主義的・民主議会的国家体制への先駆者となった。イギリスは島国であると共に、隔絶した大洋上の孤島に位置するのではなく、ヨーロッパの大陸に接近し、大陸からの影響を容易に感受し得る位置にあった。12世紀中期には、ノルマン王朝よりプランタジネット王朝に受けつがれたイングランド王国は、北はスコットランドとの境界が小南はピレネー山脈にまで及ぶ大な地域を支配した。イギリスではフランドルへの羊毛供給を通じて早くから貨幣経済が浸透し、荘園制が崩壊した農村では、ヨーマン(yeoman 一自由な独立自営農民)が生まれ、富裕化した農民の中には農業経営の傍ら毛織物業を営むものが多く、また地主(gentry)達は開放耕地(open fields)を囲い込んで(第一次 enclosure)、牧羊を行ない、土地を失った多くの貧農は賃労働者化した。一方、都市の問屋商人の支配下にあった手工業者の中にも、ギルドや問屋の束縛から逃れて農村に移る者があり、富裕な自営農民と共に、マニュファクチュアの形で毛織物業を発達させ、土

地を失った貧農を賃金労働者として吸収した。かくて16世紀末には先織物輸出が羊毛輸出を凌駕するに至った。16世紀前半までの商業は国内商業が主であったが、絶対王制を確立したエリザベス一世(1558～1603在位)の時代に海外貿易も大いに発展し始め、1588年のスペインの無敵艦隊撃破、1600年の東インド会社設立などを通じて海外進出の地歩を固め、クロムウェルの航海条例(Navigation Act, 1651)と3次の対オランダ戦争によって海運国オランダを抑え、世界貿易の主導権を握った。16世紀中葉までは、農村部の人口増加の方が著しかったが(農村工業の発展のため)、16世紀末頃から都市人口も増大し始め、ことにロンドンの人口は、1485年の8万が1582年に12万となり、1700年には67万人に達してパリを凌ぎ、ヨーロッパ第一の人口を擁するに至った。

当時のイギリスでは、羊毛工業が問屋制家内工業またはマニファクチュアの形で広く行われていたが、技術的変革が起ったのはこのような伝統的羊毛工業ではなく、Lancashireを中心とする新興の綿工業に於てであった。農業上の条件に恵まれたランカシアには17世紀以来fustian(ファスチアン)(亜麻と綿との交織綾織物)工業が発達しており、新大陸(ブラジル、及び北米カロライナ)からの綿がLiverpoolの港にもたらされるようになってから、ここに綿工業が発展し始めた。1767年、J. Hargreavesがジェニー紡績機と称する多錘紡績機(人力)を発明し、1769年にR. Arkwrightが水力紡績機を発明し、さらに1779年にはS. Comptonが両者の特色を折衷してミュール紡績機を発明し、細くて強い糸を大量に紡げるようになった。水車で動かす大型の紡績機械の登場は工場という形をとることを必然化し、これに沿って多くの工場が立ち並んだ。1787年、E. Cartwrightの力織機が次第に改良されて1820年頃から普及し始め、織布工程も工場制工場に変った。

×石炭は産業革命前からすでに燃料として利用され、17世紀にはダラムからロンドンやオランダへ石炭が供給されたが、産業革命の結果、蒸気機関及び製鉄業という大きな用途が加わり石炭産出額は急激に増大した。

125

DATE

• このような綿工業の機械化は、新しい動力源の開発、すなわち蒸気機関の発明と結びつくことにより、大きな力となった。初期の蒸気機関は、炭坑の排水ポンプに利用されていたが、J. Wattはそれを改良し、ピストンの上下運動を車軸の回転運動に変えることに成功してから、蒸気機関は工業用動力として採用され始めた。18世紀の第4四半期にボウルトン＝ワット商会が製作した蒸気機関のうちイングランドに設置された289の内訳は、繊維工業104、製粉・醸造業32、製鉄業31、炭鉱30、鉱山(炭鉱以外)22、運河18、給水施設13、その他39であり、繊維工業に最も多く使用されていた。この蒸気機関の採用は、工業立地を従来の水流のほとりから

× 石炭の得やすい交通の便利な地点へと移動させ、工場の大規模へ導いた。従来の製鉄業は、鉱石をとかすのに木炭を用い、送風のふいごやハンマーを動かすのに水力を用いたので、製鉄業は森林資源の豊富な地方の河流沿いに発達した。Midlandの製鉄業の発達も、当初は豊かな森林のお陰が重要な要因であった。しかし森林は次第に涸渇してきたため、1730～40年代からコークスを燃料として鉄鉱石がつくられるようになり、18世紀末にはコークスでつくられた銑鉄の量は木炭でつくられたそれをはるかに上回っていた。さらに水車の代りに蒸気機関が用いられるようになり、製鉄工場も水流・森林のほとりから解放されて、炭田地帯へ集中するようになった。19世紀に入るとイギリスの銑鉄生産高は飛躍的に増大し、1806年には24.8万トン、1830年には65.4万トン、1852年には270.1万トンとなり、地域的にもミッドランドの他に南ウェールズ、北ウェールズ、ノーザムバーランド(Northumberland)、ダラム(Durham)地方などに製鉄業は発展した。かくてイギリスでは、産業革命の結果、主として炭田地帯を中心に工業地帯が発展し、多くの人口がそこへ集中した。

• イギリスの13世紀以後の歴史は、大陸への版図（123P. の下から9行目のところ）が失われ、イングランド王国が島嶼性の中へ還元していく過程であるといえよう。1204～1206年の間で、ジョン失地王（John Lackland）はフランス王と戦い、フランスの西半に広がる所領のうち、ガスコーニュ、ギエンヌ地方のみを残し、ノルマンディー、アンジュー、メーヌ、トゥレーヌ、ポアトゥなどを失った。ガスコーニ、ギエンヌ地方は当時すでにぶどう栽培、ブドウ酒の産において すぐれ、それゆえ、イングランド王の大陸支配とは、ガスコーニ、ギエンヌを経済的に重要な拠点として確保したものである。それにつづく1337年に始まる英仏間の百年戦争は王位継承問題に基づきながらも経済的裏面としては、ヨーロッパの最大の毛織物工業地フランドルの争奪と並び、ガスコーニ、ギエンヌをめぐる立地权の争いがそれそんでいた。しかし究極には、イングランドの努力はガスコーニ、ギエンヌからも駆逐され、僅かにカレー（Calais）を大陸への橋頭堡として維持するにすぎなくなった。このように島嶼性の中に還元したことは、世界が16世紀後半、スペインの無敵艦隊破れの後、イギリスが海洋国家として成長していく遠因を定めたものと考えられる。一方イギリスには山地・海峡によって隔離された二つの平地（イングランド平原、スコットランド低地、アイルランド平原）がある。イングランド平原は最大の面積を有し大陸に最も近く、グレート・ブリテン島における最大最強のイングランド王国形成の地盤となった。またスコットランド低地、アイルランド平原にはイングランドとは別個の歴史・文化が展開した。（また別にウェールズの山地の中にも封鎖的な環境のもとに独自の歴史が展開した。）

• フランク王国（フランスの前身）の隆盛を図るための地理条件として、1610年より始まるルイ13世の治世はリシュリュー（Richelieu）を宰相とし、絶対主義の強力に推進された時代であり、そのための地理条件として2）国土の領域を大西洋、ピレネー山脈、アルプス山脈、ライン川などによって形成する自然の枠づけにまで拡げることであった。このような自然国境の思想は16世紀中頃のアンリ2世によるヴェルダンなど3司教区占領の際の指導原理でもあったが；今やリシュリューにとっては、国家統一、領域拡張、国威発揚のための理論的裏付となったのである。しかもまた、これら自然国境によって区画される範囲は、ほぼ古代ガリアの地域と一致し、ガリア領域の回復という歴史的・古典的根拠によっても、自然国境の思想と膨脹政策は裏づけされた。

• ヨーロッパ大陸諸国の産業革命はイギリスよりもかなりおくれたが、最も早く工業の近代化に向ったのはベルギーである。ベルギーのフランドル地方は中世以来経済的先進地であり、近世初期にはイギリスの工業技術の発展にも大きな影響を及ぼした。フランス革命以後、ギルド制その他の諸制約が廃止され、石炭・鉄鉱資源の開発が進み、1831年の独立以後は工場制工業の発達が一層助長され、ベルギーは19世紀の前半にイギリスとほぼ同じテンポで工業化を進めていった唯一の国であった。フランスの産業革命は、1830年代から1870年代にかけて行われた。ここではベルギー同様、18世紀には亜麻工業、羊毛工業が広く分布していたが、機械化がまず行われたのは新興の綿工業であり、ルアン（Rouen）その他のNormandie地方やアルザス（Alsace）地方を中心に綿工業が近代化した。フランスの工業の発展が妨げられた原因の一つは石炭の不足と、それに伴う鉄の高価であった。ウィーン会議によってベルギーの石炭産地を失い、その後国内北部の炭田開発に努めたが、1847年の石炭産出高610万トンはイギリスのそれの3分の1にすぎず、また炭田と鉄鉱産地が離れていたため製鉄には長らく木炭が使用され、それが鉄の高価を招いていた。フランスの産業革命が本格化したのは、鉄道の普及により、原料・製品の輸送が容易になってからである。

• ドイツ帝国成立の原動力となったのは Hohenzollern 家の Preussen

王国であった。そのプロイセン王国はプロイセン地名そのものよりは、ブランデンブルグ(Brandenburg)地方を王国生成の核心として誕生したものである。ブランデンブルグは(ベルリンの西)、エルベ・オーデル両河はドイツ平原で相互に最も接近し、エルベの支流ハーフェル(Havel)並びにその支流シュプレー(Spree)の流れが貫流する、東西の帯状の地域を占める。6世紀以来この地方にはスラヴ系ヴェンド人(Wends)が居住し、ドイツにとっては東の辺境にあたった。ヴェンド人を制圧し、エルベ川より東方への発展をはかるため、10世紀にドイツ王によってエルベ左岸にMarkmark(リルトマルク)(後のAltmark)が設置された。12世紀アスカニア(Askanier)家のAlbrechtがこの土地に封ぜられた後、東方スラヴ領域へ、Mittelmark, Uckermarkなどを加え、それらを合して1157年ブランデンブルグ辺境伯領が形成されるに到った。このような領域の拡張につれ、ブランデンブルグは重要な内陸水路エルベ、オーデルの二川に接触し、しかも東方スラヴに対する辺境の地として枢要な位置を占めた。

それに伴い、ザクセン、フランドル、ヴェストファーレン、フランケンなどから多くのドイツ移民が招かれ、ゲルマン的な荘園・村落が生成し、ドイツ的農業、生活様式、およびキリスト教が導入された。このような領域の完実に伴ない、さらに14世紀中期にはブランデンブルグ辺境伯は、神聖ローマ帝国皇帝を選出する7選帝侯の一に選ばれたのである。しかし辺境のため、東方ではポーランド王国の侵攻をうけ、また周辺の諸侯からもその領域を剥奪されることもあった。1415年、ホーヘンツオルレン家のフリードリッヒ1世(選帝侯)がこの地に封ぜられた。このホーエンツオレルン家によってブランデンブルグは漸次回復した。次いでフリードリッヒ2世の代、ベルリンがブランデンブルグの首都として選ばれた。現状地勢にありながらシュプレー川沿いにエルベ水運とつながり、またエルベ、オーデル両川の中間、バルト海とボヘミア山脈との中間に介在し、ベルリンは将来の発展を予想させる位置にあった。

プロイセン地方は元来スラヴ系のプロイセン人の住地であったが、ポーランド王の要請で、その教化と征服のため、13世紀にドイツ騎士団が植民したものである。そして1618年、ブランデンブルグ選帝侯は、プロイセン公国を同君連合によって獲得した。15世紀、ドイツ騎士団はポーランドと戦って敗れ、西プロイセンをポーランドに割き、東プロイセンをポーランドの宗主権の下に確保、1511年以後、東プロイセンはホーエンツオレルン系の統治に入り「プロイセン公国」と名を変え、後年、同族のゆえにブランデンブルグと結合した。かくてブランデンブルク＝プロイセンとして膨張し、エルベ、オーデルのほかにヴァイクセル(Weichsel)、プレーゲル(Pregel)、メーメル(Memel)の流域にもまたがり、東プロイセンのメーメル、ピラウ両港によってバルト海に接触するに到った。しかしこれら両領土の間にポーランドの統治するスラヴ領域が介在し、また東プロイセンに経済的・宗教的関心を異にする土着勢力が強存していた。それゆえ領域の保全のために強い軍事力が不可欠であった。

王位を望んだフリードリッヒ3世は、1701年、皇帝より王位をうけ、1世と改め、以後ブランデンブルグ＝プロイセンはプロイセン王国と名を変えた。しかし王国の中心は依然としてブランデンブルグにあった。

• ドイツの産業革命は、政治的統一がおくれたためフランスよりも一層おそく、1840年ごろから始まった。ここでは機械化が最も早かったのは繊維工業とくに綿工業であった。ヴッパータール(Wuppertal)やザクセン(Sachsen)地方に発展したが、ドイツの場合は特に重工業にあった。ルール(Ruhr)炭田は、炭層が地表に露出しているルール川の谷から開発され始め、19世紀に入ると北方のエッセン(Essen)、ボーフム(Bochum)、ドルトムント(Dortmund)など、今日のルール地方の中核部で数百メートルの竪坑による採掘が進み、またアーヘン(Aachen)付近や上シュレジエンの炭田も開発さ

れて，19世紀中葉にはドイツの石炭産額はフランスやベルギーを凌駕した。鉄鉱業や鉄の加工業はライン片岩山地の鉄鉱と森林資源を基礎に，山間渓谷で行われていたが，19世紀にくるとルール炭田地方で製鉄業が発達し，ここに1870年の普仏戦争によってロートリンゲン（Lothringen）の鉄鉱を得てからは飛躍的発展をとげることとなった。

• プロイセン王国の内外にわたり，東西に広く分散する所領を統合・防衛するためには強大な軍事力を必要とした。三十年戦争中，フリードリッヒ＝ヴィルヘルム（F. Wilhelm der Große Kurfürst 大選帝侯）によって創設された常備軍は，絶対主義の確立したフリードリッヒ＝ヴィルヘルム1世の代（1713～1740）には ヨーロッパ諸国中，人口第13位，面積10位にかかわらず，常備軍は第4位の強大さであった。かくて広大な領域を拡張した。（Schlesien 戦争によってオーストリアよりシュレジエンを獲得した。また1772年の第一次ポーランド分割により良好な耕地と交易で知られた西プロイセンを得た。これで東プロイセンを地続きとした。また西ドでは東フリースラント（Ostfriesland）を加え，Emden 港を通じてプロイセンは北海への足場を得た。かくてフリードリッヒ大王1代の間にプロイセンは50％の領域を増し，人口も倍加した。さらに1793，95における第2，3次のポーランド分割でワルシャワを含む南プロセル川中流域から東方のメーメル川西岸までを得，ポーランドを地図より抹消した。

このような領域の急激な拡張はナポレオン戦争によって頓挫した。1806年，Jena（イエナ）における敗戦によって，プロイセンの領土はエルベ以東のつづきのマグデブルク，シュレジエン，ポンメルン，東西プロイセンの範囲に限定され，面積・人口を半減した。ナポレオン没落後のウィーン会議において，アルトマルク，ポーゼンを回復し，別にザクセン北部，スエーデン領ポンメルン，ヴェストファーレン，ライン

ドなどを新に加えた。ポーランドにおける旧領の喪失は，異質的地域を切断し，プロイセンをドイツ的色彩のはるかに強い国家とした。しかも旧領よりもヴェストファーレン，ラインランドなどを得たことは，プロイセンのドイツ統一事業に重要な経済的地盤を提供した。ウィーン会議は神聖ローマ帝国に替り，ドイツ連邦（Deutscher Bund）を1815年に成立させた。その後連邦内ではオーストリアとプロイセンとの間に主導権が争われ，その結果は1866年の普墺戦争によるプロイセンの勝利によって決着をみた。ドイツ連邦は解体され，ビスマルク指導のプロイセンはマイン（Main）以北に新に北ドイツ連邦（Norddeutscher Bund）を結成（1867），その盟主となった。それに対し，オーストリアはドイツから除外され，ドナウ川沿いに東方との関係を強めることとなった。ウィーン会議によって成立したドイツ連邦は分立状態をそのまま約40の国から構成され，それらの間に統一的地域の確立がみられず，産業，交通などの発達に大きな障害をもたらした。しかし，ドイツ民族多年の宿望であったドイツの統一は，このようにプロイセンによって実現されていった。

• イタリアは中世以来，神聖ローマ皇帝をとなえたドイツ君主の干渉をうけ，加えて，15世紀末以来，19世紀に至るまでスペイン，フランス，オーストリアの活発な対立抗争の舞台となり，久しく外国勢力のもてあそびものとなった。しかしこの受難時代を経て国民的自覚が生じ，中世以来の分裂割拠を止揚し，19世紀のイタリア統一が実現する。その統一の担い手がサヴォイア（Savoia）家のサルディニア（Sardegna）王国であった。サヴォイア家はジュネーヴ湖の南方，アルプス山脈中のサヴォイア地方に発祥し，13～15世紀に亘って次第にその所領（公領）をピエモンテ（Piemonte）地方（ポー川上流に当るアルプス東側の山裾）など周辺に拡大し，ポー川を支配した。山地のため，不毛の地が多く，生活資料を外部輸入に依存しなければならなかったサヴォイアにとり，豊沃な平地のピエ

モンテは，穀物・ぶどうなどの産に富み，17世紀初頭においては年間に2千台の穀物，ぶどう酒，大麻，牛を生産し得たと伝えられる。サヴォイア公国，ついではサルジニア王国は，サヴォイアを発祥の地としながらもこの豊饒なピエモンテを基盤として躍成されていった。この現象は，スイス国家がアルプスの森林諸州（Waldstaaten）を核としながらもルツエルン（Luzern），チューリッヒ（Zurich），ベルン（Berne）などアルプス山麓ならびにスイス高原に位置する諸州の参加によって堅実な基盤を得たのと同様であった。サヴォイア公国は，モンスニ（Mt. Cenis）峠，サンベルナール（Petit St. Bernard）峠を越えてフランスを北イタリアへ結び，またピエモンテはスペインをその領域ミラノ（Milano）に結ぶ交通路にあたった。そのため，16世紀全初期，この両国の争いに際しては一時フランスによってサヴォイアを，スペインによってピエモンテを奪われ，サヴォイア公国は僅かにNiceのみを確保する悲運にみまわれた。元来アルプスの両斜面を含領域としたサヴォイア公国が，ピエモンテ，サルツオの領有によって漸次東斜面，すなわちイタリア側にのみにその領域を限定したことは重要な意味がある。サヴォイア公国が両斜面に領域を拡張していたならば，その以後の歴史は強力な絶対主義国家フランスに吸収されつくしていたと思えられるからである。カルロ＝エマヌエーレ1世（Carlo Emanuel 在位1580～1630）道路の整備に意をつくしたほか，オランダより織布工を招くなど工業の育成に努め，あるいはニースの港湾を拡張して，ポルトガル，オランダ，イギリスとの交易を活発にした。17世紀末頃より，ローマ，ヴェネツィア（Venezia）を抜いてイタリア随一の政治・経済力を蓄えてきたサヴォイア公国では，サルディニア王国の成立と共に，みずからの手で新しいイタリアの建設を主導しようとする要望が各階層の間に高まっており，しかも現実にはイタリア統一のためにはスペインに代ったオーストリア，および，フランスの勢力をイタリアより駆逐することが必要であった。

サルディニアは18世紀前期，オーストリアよりノヴァラ（Novara）などピエモンテに隣るロンバルディアの西縁くを得，ナポレオン失脚後のウィーン会議で旧領（フランスに侵略されたサヴォイア，ニースなど）を回復し，新にジェノア（Genova）地域を獲得した。サルディニア王国の動静とは別に，ナポレオンによるイタリア征服は，イタリア統一に一つの転機をもたらした。各地の旧君主国はフランス流の共和国に改められ，さらにはナポレオンを国王とするイタリア王国として統一され（1802），彼の兄を国王とするナポリ王国とともに，イタリアの大部分はこの2国に服属した。外国支配に対する反感を感じながらも，イタリアはフランス革命のもたらした自由と平等の精神を体験し，旧来の分裂割拠を打破して国民的統一をはかるべくめざめたのであった。しかしウィーン会議後の反動時代にはイタリアを覆った。ナポリ王国以外は旧来の君主国が復活，オーストリアは再びロンバルディア，ヴェネツィアを領有した。フランス革命の啓示によって，1820～30年代ナポリ，サルディニアをはじめ各地に起った革新運動はすべてオーストリアの干渉によって成功しなかった。1848年，オーストリア支配下のロンバルディアの首都ミラノに暴動がおこり，これを機としてサルディニア王カルロ＝アルベルト（Carlo Alberto）が主導する独立・統一のための戦いが生じた。しかしこの戦いは全イタリアの統合が失敗に終わり，オーストリアの支配を依然としてイタリアにとどめる結果となった。カルロ＝アルベルトは退位し，ヴィットリオ＝エマヌエーレ2世がサルディニアの王位をついだ（1849）。彼と，その宰相カヴール（Cavour）のもとで10年後，サルディニア王国は再びイタリア統一の主導権をとる。1859年，ナポレオン3世の援助を得，オーストリアと戦い，サルディニアはロンバルディアを手中にした。翌年，王国はサヴォイア，ニースをフランスに割くかたわら，サルディニアの統一を熱望する中部イタリアのパルマ（Parma），モデナ（Modena）

× このオーストリアとの戦いには経済的利害の清算をもとめていた。1849年以来，サルディニアはジェノヴァ湾よりスイスに運ばれる塩の通過税を免税としたが，これはピエモンテを経由してスイスより塩の西送給の利益を得ていたオーストリアに大打撃をあたえた。このためオーストリアはピエモンテ産のブドウ酒の関税を倍増してサルディニアに報復した。サルディニアとオーストリアとのあいだに，国交悪化以外にこのような経済問題がはらまれていた。

・中国の王朝
殷(?~C.1027 BC)
周(1027~771 BC)
東周(771~256 BC)
秦(221~206 BC)
前漢(202 BC~8 AD)
後漢(25~220)
魏(220~265)・蜀漢(221~263)
西晋(265~316)
東晋(317~420)

トスカナ(Toskana)などを併合させた。一方南イタリアのナポリ王国ではサルディニア中心の趨勢に逆行する反動主義者が支配していた。共和主義によるイタリア統一を理想としたガリバルディ(Garibaldi)は1860年,シチリアおよびナポリ本土を征服し,その主義を捨てて征服地をサルディニア王に献じた。この広大な支配地を基礎にイタリア国王となった,さいぜんまで亡命していたヴィットリオは1866年の普墺戦争に介入してオーストリアより得た。また最後の外国勢力としてローマに駐屯していたフランス軍は,1870年,普仏戦争によって本国に引揚げ,ここにイタリア統一が完成した。
(就会,「史地理論集」第1巻)

12. 中国の村落と都市

・黄河の中・下流域で,古くから食料として生産されていたものは,粟,黍,高粱,大麦であった。人々はこれらの穀物を蒸して常食としていたのであった。淮河の一線から北がだいたいこのような地域で,とくに今日の河南省北部を中心とした平野地帯では,春秋戦国時代すでに集約な農業が行われ,人口も相当に稠密であった。ところが淮河から南に揚子江流域へ行くと全く米作地帯となるが,粗放な農法しか行なわれず,人口密度は農業でも極めて低くかった。その稲作技術は,「史記」貨殖列伝に火耕水耨(かこうすいどう)と表現されているように,基本的に原始的なものだったのである。それが,2世紀の末頃から,北方の漢民族が進歩した技術をもって移住してくるにつれ,南方の稲作は次第に発展をとげた。呉の建国や晋の南渡などの大事件がこれを促進したのはいうまでもなく,隋の時には,ついに大運河を開いて米を北に輸送するようになった。唐末(9世紀後半)には水利開発によって水田が増加し,五代を経て宋に入ると,北方の人口は南の補給米に頼らなければ維持できない程であった。単位面積収穫量の高い米は,その地

宋(420~479)
斉(479~502)
梁(502~557)
陳(557~589)
隋(581~618)
唐(618~907)
遼(916~1125)・五代(後唐・後晋・後漢)(907~960)
宋(960~1127)・南宋(1127~1279)・金(1115~1234)
元(1271~1368)
明(1368~1662)→清(1636~1912)

に増加する人口を養って,なお十分の余裕を生じたのである。南宋(12~13世紀)になって北方が金国に占領され南北の交通も杜絶すると,にわかに多くの漢民族が南に移住したのはそのためである。そのうち,元・明・清はみな政治の根拠地を北においたので,南方はあたかも本国に食料を供給する植民地のような役割を負わされていた。したがって,あまりにも人口が増加すると,その役を果しえなくなるのである。早く宋代に開けた太湖周辺の江南平野が穀倉としての地位を失い,明代になるやかつて湖広平野がこれにかわったのはその結果である。

北方では粟や黍がいつまでも主食としての地位を続けていたかというとそうではない。前2世紀頃に西方から入ってきたと考えられる小麦が次第にたくさん栽培され,これを挽いて粉食にする風習が普及した。そのために粟や黍がなくなった訳ではないが,小麦は中国本土の西から北につながるかつての牧畜地域に拡がり,南に向っては稲作地域にも進出して,その間にはまりこんだ混合地帯をつくっている。

甘蔗と茶は共に揚子江以南に栽培され,その歴史も古い。砂糖もすでに南北朝時代から製造されていたようであるが,四川や福建などが特産地として史上に現われるほか問題にされる程ではない。茶のほうは,唐の中頃には南北を通じて漢民族の間に喫茶の風が普及し,西・北の異民族までがこれにならうようになった。かくて宋の頃から茶の生産は増加し,とくに福建がその名産地として知られた。しかしやがて江南が産額で他を圧倒し,湖北,江西の隣接地を含む洞庭湖周辺の丘陵地が中国一の産地となった。綿は中国が原産地ですでに古い時代から栽培されていたことが実証されており,西方では珍重される2,ギリシャ人が中国をセリカ(絹の国)と呼んだ。その産地は山東から河南にかけての平野であったが,漢代から四川がこれと

産を並べるようになった。絹の産地は引き続き唐の中頃（8世紀前半）まで北方であったが，次第に揚子江流域に移り，宋以後には南北その地位を換えた。大湖周辺の平野が蚕香とともに絹織物の中心となって今日に及んでいる。古くからの四川も維持し，明いらい広東の珠江流域が発展して，現在も中国の三大蚕業地となっている。一般人の衣料としては麻が用いられ，麻の種類は大麻と苧麻で全国的に栽培された。北より南に移り，苧麻の優良品は今日，江西，湖南，湖北，四川にみられる。しかし数百年来，木綿が普及するにつれ，麻の衣料としての利用は減じ，現在では南北を通じて大麻が栽培され，麻袋や麻縄などの原料となっている。木綿はすでに唐いらい広東，福建で栽培されていたが，宋代の小草綿が輸入されて南部北に進み，西北方面から木綿が入れられて有利であったので明代中期（16世紀以後）以後に産額は増した。主産地はじめ揚子江下流域の海岸地帯であったが，次第に中流域に及び，北では黄河の中，下流域がその中心となった。今日では河北，山東，河南，山西の4省で全国生産量の3/4を占めている。

- 多量の殷周古銅器でわかるように最も早く開発されたのは銅であった。春秋・戦国時代から黄河中・下流域の諸国では銅の貨幣を鋳造し，漢代には ますますその量が多くなったので，需要にたえるため，北方の銅鉱は多く採掘された。南方の銅山は漢代から注目されていたが，唐以後に急に開発が進み，それから宋にかけて江西・福建・広東の産銅額が激増した。明・清になると雲南方面に新鉱山を求めるようになり，それでも足らず，日本から多量の銅材を輸入していた。各時代を通じ銅の用途は貨幣鋳造である。鉄は春秋から戦国に入ると，武器だけでなく，農具の材料として需要が増大したので各国では競って鉄鉱の開発に努めた。漢代には鉄官という政府の鉄製農具の製造配給所が各地に設

けられ，「漢書」地理志にはその所在地を示しているが，大部分が北方にあって，これは当時の鉄産地と一致するものと思われる。唐・宋の時代には揚子江流域から南にも及び，江西・湖南・福建・広東の諸州でさかんに採掘された。なお銅と違って鉄は北方でも引き続き生産され，特に宋代には木炭の乏しい北方で石炭が燃料として使用されたため，産額は非常に増加したといわれる。石炭は宋代に山西・河北をはじめ山東各地からも採掘され，製鉄や製陶などの工業に用いられるほか，すでに都の開封などでは市民の日常の燃料となっていた。中国は海岸線は長いが，内陸面積が広いので，交通の発達しなかった古代には塩の獲得は重要であった。山東に国をたてた諸国は春秋・戦国時代に製塩と漁業でもって繁栄し，北方諸国を圧倒することができた。中国では幸い海岸が遠い奥地にも内陸塩の産地があって，山西省南部の解池をはじめ，西北地方にはいたるところに塩池が散在し，四川省にも塩井があった。とくに解池は産額が多く，古くから広い地域に塩を供給してきた。

- 絹織では絹織物の中心は唐，宋以後次第に揚子江下流域に移り，製糸業は浙江が第一で，とくに湖州産のものが最上品とされた。したがって，湖州はもっぱら絹糸の産地として知られ，この地方で農家の副業としてつむがれたものが，商人の手をへて機業地にもたらされたのである。明・清時代に絹の機業地として最も栄えたのは蘇州・杭州・江寧（南京）で，高級織物はほとんどここでつくられた。綿織物も揚子江下流域が盛んで，江蘇の松江が明いらいその中心として天下に名を知られた。この地方の綿花だけではなく，北方の綿花も大部分がそのまま南に運ばれて綿布の原料となった。絹織は農家の副業として広く普及し，製品は商人によって集荷され全国に行き亘ると共に，南京木綿の名ですいて国外にまで輸出されたのである。この状態は清末まで続いたが，外国資本の進出によって綿織の機械化が始まり，工場が

× うわぐすり
△ 辰砂は中国の特産の磁器，釉薬を用いて着色したもの
辰砂は光沢の強い朱色の鉱物。硫化第二水銀。
染付は染め付けること。藍色の模様を描き，うわぐすりをかけて焼く。
ロ 仰韶（韶）

上海，青島，天津などの新興都市に集中するに到って事情は一変した。
繊維物と並んで，中国独特の技術を誇るのは陶磁器である。
× 釉薬をかけた陶器はすでに殷代から行われ，漢代には，緑や黄の美しいものもつくられたが，南方ではこれが発展して青磁が生まれた。三国の呉の年号をとうわした青磁などもあって，その発生はおおむね早かったらしく，産地は主として浙江であった。その原因は，高温を出すのに適した木材が，南方には豊富だったことにもよるのであろう。
北方で磁器がつくられるのはこれよりのちで，唐代には邢州の白磁が有名であった。宋代になると，定州をはじめ耀州・磁州などで各地で優秀な製品がつくられた。江西の景徳鎮の歴史は唐代までさかのぼるが，南宋以来，急速な発展をとげ，元代には早くも
△ 染付や辰砂などの技術があらわれ，明・清を通じて中国第一の製造地となった。その製品は上下を通じて国内に行き亘ったのは勿論のこと，世界各地に輸出されてその名を知られた。
漆器もまたおもに河南，山東でつくられたらしい。漢代には四川が主産地となり，唐代では湖北省の襄陽が有名である。宋代になると浙江に中心が移った。明・清では福建や広東でも製造され，今日では浙江と並んで重要な産地となっている。

● 中国で都市に対して村落という言葉が現われるのは新しく，古く一般に自然的な集落を意味するのは邑であったと考えられる。邑の字は元来人の住居の周囲に城壁を築いた形を表わしているといわれるが，古代人は治安の good くない集居して生活するのが普通であり，まして広漠たる華北の平原においては，集落に城壁をつくる習慣は早くから行われていたものであろう。集落の規模もかなり大きかったようである。河南省の仰韶の遺跡は1辺 0.5km の方形に及び，陝西省の半坡（はん）村遺跡も南北 200m，東西 100m の面積をもある。集落発生の立地条件としては，古代中国では，丘陵の存在が大きな意味をもっていた。

農業生活に入っても，土砂や建築材に富む森林を控えた谷口扇状地や沖積段丘の斜面などが，格好の地とされたに相違ない。また，黄河の氾濫にみまわれた華北の平原にかいては集落の発生にとって丘陵は不可欠の条件であったであろう。古地名に商丘，宮丘，帝丘などの丘の字を伴なったものがみられるとともに，陶，陳，陝などの阜の字を偏に持つ字が少なくない。殷では王をはじめ諸部族はみな邑をもち，周囲の地域は鄙と称してその領内によって東鄙，北鄙などと呼んだ。周になると，諸侯の封邑はとくに国といい表われたが，旧来の邑とは何の変りのないものであった。国都でさえも，一般に集落という意味において邑と呼ばれていた。若し村落を農村という意味に限定すれば，古代中国においては純然たる農村は存在しなかったろう。農村の発生は春秋から戦国にかけて，統一国家の成立と時期を同じくしているのではないかと思われる。それ以前の城郭国家においては支配者といえどもとりまく貴族・武士団はもちろん，工人・商人をはじめ農民もすべて城郭内に居住していた。城郭をはなれて鄙の中にいたるところに農村が成立すると，はじめて都市的なものと村落的なものとが判然と分かれてくる。工人や商人もまた一般に邑といわれ，ある場合には聚，里などと区別された。殷代には落を表わす里落，部落などの語があるが，落とは元来落籬すなわち人家の周囲をかこう垣根を意味する。大規模な集落の周囲に設けられた土を固めて作った壁が城であるのに対し，落とは主として木や竹を立てて作った垣根や小規模な土壁をさしたものと考えられるのである。

● 中国の村落形態は一般的にみて北方は集村，南方には散村の発達が顕著であると認められている。北方の平坦な黄土平野においては焼畑は簡単で年中耕地にする必要はなく，冬の烈しい気候や，外敵を受け易いことは集村をつくらせる有力な条件であった。その周囲を土で築いた囲郭が囲まれているのが北方村落の標

識であることは当然のことである。一般の農家にしても，正面の門を入ると中庭があり，他の3面はいずれも家屋または土壁に囲まれているのであって，これが黄土地帯における堅穴式住居に基づくという考えは興味深い。これに対し揚子江下流の水田地帯では耕地の管理には1年を通じて手を抜くことはできず，縦横に走るクリークが主要な交通路となるために，住居の位置もそれらの制約をうけ集落は自ら散本的とならざるをえない。この地方は唐宋のころから圩田が発達するが，これは余分の水を排除するために周囲に溝渠を掘り，その内側に堤防を築き保護した水田であって，こうした溝渠の連続がクリークである。住居は堤防の上や圩中の高地を選んで営まれ，楊柳の林や竹藪に囲まれているので，北方とは異なった村落景観を呈している。そしてこれらの村落では水利工事など極めて密接な共同作業が行われている。

しかし，北・南の村落形態の相違はどの地域にもはっきりしている訳ではない。北方でも都市の周辺には散村が多く，囲郭村落が少ないのが普通である。南方でも大きなクリークの交叉点などには必ず集村が発達しているのであって，地形的な関係上，囲郭をつくるのが困難なことは想められるであろう。四川の成都平野をとりまいている孤立荘宅のごときは南方にあってもむしろ特異な景観というかもしれない。したがって囲郭のある否が南北の村落の相違であるとも云えるかもしれない。囲郭は純防衛的な意義を有するものであって伝統的な防禦物でなく黄土平原に於いても必要であっても，南方ではクリークや湖沼が十分にその役目を果している。湖北や四川の山地の集落では，囲郭がなくても一旦事ある場合には1村あるいは数村が挙って立てこもるべき山寨が山の絶好な場所に設けられているところが少くない。現在，北方各地に囲郭村落が極めて多いのは，清朝末期から民国にかけての

教乱や内戦に当って村民が自発的にまたは政府の奨励によってみずから築いた結果である。1896年，山東の長山，周村間で F. Richthofen が囲郭村落の連続に驚いているが，それらは数年前の捻匪の乱にさいして自衛のために築かれたものであることを指摘している。

- 漢以前の村落形態については，里，聚のうちには周囲を土壁に囲まれ，それに幾つもの門を備えたものもあったようであるが，大部分はそのような設備をもたなかったとされる。後漢から三国にかけての戦乱期になると古い集落は破壊され，戦禍を避けた農民が有力者を中心として要処に塢・壁・堡などを築いてたてこもった。あるいは人里をはなれた山間に平和郷を見出して，そこに新しい集落を営むこともあった。これらの新たに開かれた集落を村と呼んだのであって，以後，村は中国の自然村落の一般的な呼び名となった。塢や壁は北方から辺境の前線に築かれた土壁をもつ要塞であって，今なおモンゴリアやエンゴル沿岸や敦煌北方の長城線に漢代の遺跡がみられる。このような軍事的施設が内地にも造られ自然村落発達のもとになったということは，中国における村落にとって，外敵の防衛がいかに重要な要素であったかを語っている。

7代乱の後をうけて新政府が成立すると，前代の官有地や所有者のない土地を収め，流民を招いて新しい農村をつくるとともに，それらを政府の荘園とし，あるいは功臣などに賜与したのである。唐・宋時代になると，貴族，寺院，官僚などの荘園が発達して村落の形成を促すにいたり，さらにこれが中核となって小都市に発展するものさえあった。元来荘園とは郊外に設けられた別荘のことで，荘田・荘宅・別墅などとも呼ばれ，邸宅には田園が付属しているところから，後にはもっぱらその田園のみを指すようになった。そこでは各地から集ってきた流民たちが，小作人，すなわち荘客として土地

として，主人から流遣された荘吏のもとに耕作に従事していたわけであって，自然に発達した村とは別個のものである。その大規模なものにおいては，住居である窖穴の数も大きく，それには隠し工・商人の住むものもあって一般の村と異ならないものもあり，こうして荘園が発達して村落となり，宋代になると普通の村落でも某荘の名で呼ばれるようになるものも現われた。その他，定期市の開かれる場所，街道上の郵駅や旅店，河川水路の併泊地や渡し場，寺観を中心に発達した村落もあった。かくて中国の一般村落名として村や荘の名のつくものが多く，村荘というのが村落の普通名詞となっている。

- 古代の自然集落はすべて邑と称せられたが，自然集落としての邑は農耕地をその周辺にもって自給自足を営んだ。邑が発展してもその大きさは一定の限度があり，ある段階を越えると自ら分裂しなければならなかったであろう。新しい邑がどのような計画でつくられたかよくわからないが，それぞれに城壁をもって囲まれ，相当の規模をもっていたことは疑いない。殷墟からはまだ城壁が発見されないが，それは前の王都ではないかと思われる河南の鄭州白家荘から紹介された四方の城壁が発見された。周代になって封建諸侯の居城はとくに国と称せられたが，これを中心として分邑が行われ地方の開発が進むと，その全領域を国というようになった。これは領土国家の発生とみるべきで，支配者の勢力が城壁内外の狭い範囲を越えより広い地域に行きわたるようになったことを示す。かくて邑が領土内に増加し発展するとともに一方では農村が発生して都市と村落との分化がみられるようになった。これは，春秋から戦国にかけて行われた鉄器の使用，牛耕の普及，水利の開発などに伴う農業発展の大勢に応じるものである。かくて，分与された土地もすべて農地となり，農業の規模が大きくなり，それを背景にして都市が発達し，都市と農村とを

結ぶ商業も走るようになった。国の中でも諸侯が一族を分邑したものは都とよばれ，自身の居城よりは小さいが，他の一般の邑よりは大きかった。かくて都は本来の国邑と並んで一国の政治，経済，文化の中心を意味するようになり，後にはもっぱら国邑そのものを都というようになった。都には周囲が3里の城，7里の郭などというのは珍らしくなく，万家の邑というものも至るところにみられるようになった。諸侯の都城のうちでも，とりわけ規模の大きさが喧伝されるのは宋の睢陽（山東）である。もともと宮邸という小丘を中心として発達した都市で，2重の城壁をめぐらしていた。今日なお湲水の西に3条ある。周囲20kmにも達する古城址はその外城のあとであって，古文献の伝えるところと一致する。城中には人口7万，一戸から1人の男子を出すとしてもたちどころに2万の軍隊が編成できる。市民はみな富裕で，音曲や娯楽にふけり，路上を往来する車は車軸がふれあい，人は肩と肩とがすれあう。人々が一斉に襟をつらねると幕となり，袂をあげると蓋となり，汗を流すと雨となる繁昌ぶりであったという。東方第一の強国たる宋の都として，絹・麻などの織物生産の中心を占め，魚，塩の類を内地に輸送する要衝に当る臨淄の繁栄は格別のものがあったであろう。周の洛陽をはじめ，魏の大梁（河南，開封），韓の鄭（河新鄭），趙の邯鄲（河北），楚の鄢郢（湖北，宜城），燕の薊（けい）（北京），秦の咸陽（陝西，咸陽）など大国の都はいずれ劣らぬ大都市であったに相違ない。これらの大国には政治的中心である国都のほかに商工業をもって栄える多くの有力な都市があった。宋の定陶（山東，菅県）は天下の中に当り，諸侯四通し，貨物の交易するところといわれる。湲水の南に当り，それより東南，運河によって泗水に通じ，さらに淮水にくだり，揚子江に通ずる要衝を占めるこの地は，春秋以来中国東部の経済中心であり，戦国に入っては列国争奪の目標であ

った。

• 戦国時代に繁栄した都市は，ほとんど漢以後までその生命を維持した。司馬遷は「史記」の貨殖伝において，天下は各地域にそれぞれ物産を異にしているから，それらを集中することのできる交通の便利に恵まれたところに都市が発達し，経済・文化の中心になるのだと説いている。春秋から戦国にかけて陶は天下の中なりといわれたが，漢代になると，天下の中心は三河に移った。河東・河内・河南を総称した地域で，今日の河北・山西・河南の交界付近を含み，天下の交通路はすべてここを起点として，あらゆる物産が集中するところと考えられる。その中心都市は河南の洛陽であった。西に国都長安を，東に商業都市の陶，雎陽（河南，商邱）をひかえたこの地はまことに天下の中なるにかなわしい。前漢時代，洛陽・邯鄲・臨淄・宛・成都を5都と称し，王莽の時これらと長安とに五均官という経済統制の役所をおいたことからもわかるように，代表的な都市はみな北方にあった。「漢書」地理志について糸の分布をみると，兗・豫・冀の3州，今日の山東・河南・河北の地が著しく稠密である。しかし後漢になると都は長安から洛陽に移ったので，関中の諸都市はさびれ，三国時代には西の蜀の成都に対し南に新興都市建鄴（南京）が出現した。南方の都市では古くから栄えた呉のほか，西では襄陽（湖北），東では京口（江蘇，鎮江）などが南北の交通路にあって発展し，会稽（浙江，紹興）も盛んとなった。北では鄴（河北，臨漳）が洛陽とともに魏の都となり，その繁昌は邯鄲や臨淄をこのいだ。かくて隋・唐になっても長安・洛陽は勿論のこと，代表的な都市はなお北方に集っていた。隋は洛陽を東都と称し，これを中心として運河系統を整備したので，都市はその沿線に発達し，江都（揚州）などはそれ以後長く江南第一の商業都市となった。「新唐書」の地理志（8世紀と場の中頃の天宝年時

の統計によったと思われる。）で人口数をみると，10万以上は滄（河北），冀（同），晉（同靖河），魏（同大名），河南（河南，洛陽），相（同安陽），汴（同開封），宋（同商邱），瞥（山東），太原（山西），など。宋の「元豊九域志」にみえる11世紀初の統計によると10万以上の府州は北方が14，南は3（四川の2は別）となる。都市は城壁を築くべきであるという原則は北方中国には適用するが，南方では村落もそうであるように小さな土塁ていどのものが多かった。隋に至るまで城壁を築くようになったのは比較的近世のことである。一旦，城壁をもったとすれば，城門と城門を貫いて直線道路が開かれるなど都市計画が行われて，自ら城郭都市の形態が整ってくるのが当然である。前漢の首都長安は，秦の咸陽の東南，渭水の南岸に秦の離宮を中心として発達した都市である。城壁は前2世紀の末に築かれたが，周囲60余里（25km）で，伝統に発達した諸侯の国都にめぐらされたものでなく，すこぶる不整形であった。それでも4面に各3門，計12門が開かれ，城内には8街9陌といわれる大通りがあり，その間に160の里という市民の居住区域があった。1つの里はほぼ300歩（約200m）平方で，周囲に土塀を築き門によって出入したものと考えられる。市は9つあって，城の内外を通じて交通の便利な位置に設けられ，城内のものは里を4つ合わせた大きさであった。最近の調査によれば，各城門には3つの入口があり，これに通ずる大街は3條に分かれていて，それぞれ幅約8m，中央は一段高く馳道といって天子専用の道路で，左右が一般の通路であった。この都市の人口は10万どまりであるから，戦国時代の臨淄にくらべると，約$\frac{1}{4}$で，決して繁華であったとはいえない。隋唐の長安は確実な計画都市で，6世紀末隋に入って着手されたものを唐がうけついで完成したもので，漢の長安の東南にあり，その外郭城は東西18×里余（9.7km），南北15里余（8.2km）に亘る広大なものであった。

今日の西安市街はその北部に僅かに当時の古を止めるにすぎない。
隋では漢魏以来の洛陽の西に新都市を建設して東都と呼び，この交通の便に富んだ地を経済都市としたが，唐でもやはりこれを受けて長安と並ぶ北方の二大中心とした。しかし，さらに便利な開封が次第に発展して，五大の諸王朝はこれを国都とし，ついに宋にいたって新時代を象徴する大都市となった。

• 今日における代表的な北方都市はいうまでもなく北京である。ここが中国全土に君臨する首都となったのは13世紀の中ごろからであるが，すでに遼金征服王朝のときからその漢地支配の根拠地であった。しかし元の世祖は旧来の金の中都の東北に全く新しい構想のもとに新都を建設し，これを大都と称した。周囲60里，南北にやや長く，城壁には南東西面に各3門，北面に2門を開き，その中には周囲9里30歩の宮城（紫禁城）を囲んでさらに皇城があり，面朝後市，左祖右社という中国の伝統的な理想をほぼそのまま実現したものであった。この城は明代になってから北部を縮小し南部をやや拡張して，現在の北京内城ができ上り，さらにのち，南方の城外に溢出した人家を保護するために，外城が築かれ，清朝をへて今日にいたっている。内城の周囲40里，外城は28里である。宮城も元代に基礎がおかれたと考えられ，明になっても大きな変化はなく清も大体これを受けついだのであった。

• 清末に建設された近代都市としては開港場では16世紀後半にポルトガル人によって建設された澳門（マカオ）がある。最古の西洋都市として珠江河口の要地を占め，ポルトガルの極東貿易の最大根拠地として，特に日本と関係が深かった。約100年の会盟をへてオランダに商権を奪われてしまった。広州と付属地とはその後ポルトガル領となり，今日にいたった。1842年，の南京条約によって仲リスが獲得した香港島はその対岸に

近く，やがて広東の貿易を奪い，世界航路の寄港地となった。市街ヴィクトリアはイギリスの経営した純粋の西洋風都市で，後に接続した対岸の九竜市と共に英国の領土であったが1997年中国に返還された。中国は南京条約によって上海，寧波（ニンポー），福州，広東，厦門（アモイ）の5港を開いた。広東は中国の最も古い貿易港で，とくに清朝では西洋貿易をこの1港に限っていたところである。寧波や福州もそれぞれ唐以前にも遡る歴史をもっており，厦門も漳州の外港として明初から知られている。上海もまた宋から秀州華亭県の上海鎮として現われ，元になって発展したところである。しかし，揚子江口に近く広大な後背地をひかえた上海は，それまでこの地方の中心であった蘇州に代って急速な発展をとげることになる。旧上海県城の北，蘇州江左岸にまずイギリス租界が設定され，ついでフランス・アメリカ租界ができ，後にイギリス・アメリカ租界を合して共同租界と称した。太平天国の戦争に際して，西洋風に設計された市街に多数の中国人が入りこんで，西洋風中国都市ともいうべきものが出来上った。そこでは中国の主権は全く行われず，行政は工部局という独立の市政機関によって運営され，100年の経営の結果，453万人（1997のデモグラフィック・イヤブックによる。）に達する国際都市として発展した。

13．近世における日本の開発．

• 近世以降の開拓地は一般に新田と称せられる．新田の文字はすでに中世の文書でみられ，東寺文書の仁寿4年（854）に現われているが，これがさかんに行われるようになったのは江戸時代にはいってからである。新田の名は本田に対して用いられ，本来の創立当時，検地の上本田と定められた田，畑，屋敷に対して，それ以後開墾されてそれを検定，石高を定めて高入として林帳に編入した田，畑，屋敷地をいう。新田には代官見立新田（官営的色彩の

× 現在の日本の耕地面積は1991で520万4000haほど田が282万5000ha，1965年には600万4000ha，なお8世紀末（奈良時代から延喜時代まで）では86万2000町歩（水田多数）（今の面積では103万4000町歩）。

濃いものと民営的なものもある。幕府の役官がその任地において開発の適地を見立て，完成後，その10分の1の斗代を給与の報酬田として受ける条件で，村，町人などをして開かしめるもの），村受新田（村が引き受けて相当範囲の耕地を開き，新に分村，子村をつくる場合あり，子村の農民はすべて高持ちである。），持添，切添，打添（古村の農民が地続きを開発してこれを自らの耕地に加えるもの），町人請負新田（資力ある町人が開くもので，国内商業の枠が限られていて，商業自体の発展のために蓄積した資本を投ずる余地が乏しかったため）などの民営新田，大規模なものが多いのはやはり，幕府の経営による代官請営などの官営新田であった。

新田開発は先ず，沖積平野より一段高い位置にある台地で行われ，灌漑の便を欠くために長く原野として放棄されていたものを開拓したものであり，次に沖積平野のうちなお未開であった低湿地，あるいは沼沢地，あるいは又最も若い沖積地であった干潟地の排水干拓による新田がみられた。干拓や埋立による海岸の土地開発は一つの新しい陸地の造成であり，これは土木技術の発達と共に内陸の開発の飽和状態によるものであった。わが国における大平野前面の干潟の干拓は，この時代にその大部分が完成された。この時代はおかくて，干拓時代あるいは湿地開田時代とよんでよい。

• 近世初頭の全国の耕地（田，畑，屋敷地）は約200万町歩と推定される。それが中期には約300万町歩，明治初期には約400万町歩（302万ha）となった。台地や干潟などが未開発のまま残されていたのは勿論，開拓技術の未発達であったことが理由であるが，いっぽう開発を促進させた積極的理由としては幕藩の政治的理由（窮乏を救う），戦国浪人の土着，兵農分離による武士の帰農，人口増大に伴なう米及び耕地の不足

× 矢嶋仁吉「武蔵野の集落」古今書院 1954.

を補うための耕地の拡張，封建的農業生産関係の拡大の手段など，種々考えられる。

× • 武蔵野台地は青梅市付近（標高190m）を扇頂部とする大な傾斜地形地である。台地の東端は標高約20mのところで多摩で荒川の形成した沖積地に臨む。台地の南縁は多摩川，北縁は荒川とその支流の入間川などによって囲まれ，一つの地理的単元をなす。中央に紡錘状の狭山丘陵，台地の東部では標高約50m付近で南北の一線上に分布する池沼群あり，ここより流れでる水系によって台地面が侵食され樹枝状の侵食谷が発達する。台地を刻む河川はこの泉を水源とする。柳瀬川，黒目川，白子川，石神井川，妙正寺川，善福寺川，井，頭川などである。台地の表面は全域に亘り厚い関東ローム層が被う。その下は厚い砂礫層と粘土層が互層をなす。基盤は凝灰岩。ローム層の厚さは大体5～10m。台地は一般に地下水位が深く，乏水性の台地としての性格が顕著である。この為開発がおくれた。台地の東部に分布する湧井地帯。散居村落や狭山・加治丘陵の麓及び多摩川に沿う河岸段丘の上などに分布する塊状村落の大部分は自然発生的集落で，先史時代の遺跡も分布する。台地中央の標高50～60mの南北の一線上に分布する井，頭，善福寺，妙正寺，三宝寺などの地名泉のあるところ，その湧泉や地表水を水源とする樹枝状の浸食谷に沿うところに先史時代の遺跡が多い。しかし，台地上は歴史時代に入っても永く無住地。武蔵野台地の開拓が行われ，居住地域化が著しく進んだのは江戸時代に入ってから，とくに中期以後にさかんであった。新田の集落はすべて江戸時代の新開集落で，概ね寛永以後の開拓である。開拓の歴史を大別すると，

第1期　江戸時代初期より正保（1644～48）年間まで。
第2期　慶安（1648～52）年間より元禄（1688～1704）年間まで。

第3期 寛永(1704~1711)年間より幕末まで。
第1期は徳川氏の江戸入府以後日が浅く、大規模な新田開発はみられず、しかし荒蕪地の開拓は着手され、新町(青梅の東にあり、古い市場集落。)はその例である。第2期には大規模で整然たる計画的開拓集落の出現。砂川新田、小川新田、三富新田(三芳町)などがその例。とくに青梅街道、五日市街道、川越街道などの主要街道に沿って設けられる。承応年間(承応3年-1654)に玉川上水が開かれその分水も開かれる。第3期は台地の開発が最も活発に行われた。享保年間はその最盛期であった。この時代の新田を特に武蔵野新田という。多摩郡40カ村、入間郡19カ村、高麗郡19カ村、新座郡4カ村、計82カ村に達する。(このうち高麗郡の全部と入間郡の一部が入間川口北の地、多摩郡の2カ村が日野台地に属するほか他は全部武蔵野台地。) 新田集落の設定の際の人口移動の方向は、台地の周縁部や丘陵の裾などから台地面へ向う。台地の開発に際しては、先ず"飲料水の確保"であった。御頂部付近の早い開発地では、掘抜井戸(青梅線福生駅の東方の神社にその旧跡がある。)が掘られた。おおみそかに丁度収穫にかたつむりの殻のように路がつけられ、その路を除りのところに井戸が掘られていた。)掘抜井や七曲井の伝説がある。開発の契機は、江戸の発達に伴う上水道・玉川上水(承応3年-1654-)及びその分水(野火止用水、砂川上水など)の開さくによるものであった。新田集落は主に街道(青梅街道のような)や用水路に沿い、列状集落をなした。土地も道路や用水路に対しほぼ直角の方向に短冊型の土地割で行われた。ほぼ1~3町くらい。全部畑であった。青梅の東約3km程のところにある新田下は慶長年間(1596~1615)に住まり寛永(1624~44)頃までの間に成立したものである。

青梅街道に沿い列状集落を形成する。かつては市場も開設された。元武州忍の城主成田氏の家臣・吉野織部之助は主家の没後、加治丘陵の南の金岡村に居住したが、彼(浪人)の主導によって開かれた。はじめは、水がないため、出百姓の希望者もなかったが、古村より道路(水汲道路)で水を運び、ねり力者を得て開発した。地下水の深さは12m以上で、井底まで20mもあった。慶長18年10月より翌年3月までに3井が掘られ、共同で使用、現在も戸数は135戸くらいだが井戸は20井くらい。今も集落裏の雑木林の中に掘井の跡がみられたが、その後どうなったか?
小平町では小川が最も古い。(他に野中、大沼田、鈴木、回り田新田などあり。) 小川は明暦(1655~58)年中、岸村の小川九郎右衛門が主導で開発したもので、五日市・青梅街道に沿い列状をなす。農業集落であると共に宿屋でもあり、上・中・下宿があった。地下水面は10~15m、台地の深井地帯で井底の深さは16m、野中では19mであった。標高90~70mくらいのところにこれらの集落は分布した。玉川上水の小川分水が役割をもち、住民の飲料水、生活用水を供給し、水車も設けられて農事に利用された。のちに井戸が掘られ、それを神社にした。今も集落毎にその名残りとどめ、小川家も史蹟として保存されているが、背後に流れる用水の分水は現在ドブ川化している。(前に見た深谷の水はきれい。)
東上線の鶴瀬駅の西南の三芳町にある三富新田は、元禄年間(1688~1704)に幕営新田として開かれたもの。かつては2カ村の入会林場であった茅野1,300町歩を、時の川越城主柳沢吉保の家老荻原根太夫の指揮で開発したもの。元禄7年1月に起工、上富、中富、下富を元禄9年にかけて開発した。まず幅6間の道路を整然と設け、1カの間口を4間、奥行を375間として土地を割り、道路に面し宿屋を、その背後を畑として、未端に雑木林を、堆肥と燃料とするために残した。出百姓は早く集

5 10 15 20 25 30 35
18 17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1 0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17

まり，上富村は忠右衛門，中富は喜平次が中心，この2人は台地の北東端の亀久保村より移住した。下富は台地北端の大笹新田より移住した広右衛門が中心となった。勇福寺，新願所とも2多聞堂を建立，元禄9年の竣工から5ヵ年間完祖であった。三富の開発に続き台地北半の新田が次々に開かれた。はじめ11井を掘ったが地下水面は15～17m，井底は16～25mであった。今も勇福寺境内に井戸の跡が保存されている。

• 干拓の先輩は肥後国の緑川尻の鏡塘村におけるものといわれ，宝巌禅師（柳島加藤第3皇子）が南宋・杭州の銭塘の堤（堤防）に準じ，文永（1264～）年間に行ったものといわれる。ヨーロッパのオランダのゾイデル海のPolderも中国の江南デルタ地帯の塗田，沙田も多くこの時代に開かれた後り，東西時期を同じくして，干拓による土地造成が進められたといえる。

干拓新田の開発には内海型と外洋型ともいうべき2つの型があり，加藤・細川氏による八代海，鍋島氏の有明海，先利氏の周防灘，池田氏の児島湾，徳川氏の伊勢湾などの藩営干拓は内海型の例である。この型の特徴は，1.リアス式海岸，2.遠浅，3.潮流・海流が緩やか，4.干満の差が大などの特質をもつ海岸でみられた。外洋型は一般に日本海沿岸にみられ，内海型とは正反対の地理的条件のところ，1.海岸は単調，2.遠浅でない，3.波も荒く，潮流・海流が早い，4.干満の差がわずかなどの特徴をもち，海岸に砂洲が発達して潟湖のあるところに，潟湖を潮堤により潟湖に入る河川を直接海に注ぎ，潟湖に水の入らないようにして潟湖を干拓する方法がとられる。九十九里平野の北の椿海干拓もなども先の例で，寛文11年（1671），周囲10里8町6間1尺，面積約3方里の椿海が幕府の手で干拓され，176町は27000石余の耕地が出来た。干満9万石と云い，近世最大の湖沼干拓であった。天保期後

× 信濃川 367km 11900km², 石狩川 268km, 14330km²
（アマゾン川は 7050000km²）
利根川 総延長 4402km, 流域面積 23万㎢
灌漑用水取水箇所 149

平野の勇雲寺潟の干拓（寛保年間，1641竣，1680余石，740戸の農家を移住させた。（越後の竹前和左衛門・小八郎兄弟による。今から250年前）（江戸の町人開発の経営といわれる。）このような干拓による開発は，内陸の開発の飽和状態によるものであり，山が国の大平野前面の干潟の干拓は2つの時代にその大部分が完成された。筑後川，遠賀川，本明川，揖斐川，利根川下流などの低湿地で現在の70～90%，信濃川下流，鳥海湾，岩木川下流などは現在の70～80%にのぼっている。

• 上越国境の毛後山（1809m）に源を発し，関東平野を貫流して銚子で太平洋に注ぐ利根川は幹線流路322km，流域面積は本邦第1の16,840km²，吾妻川，烏川，渡良瀬川，鬼怒川，小貝川など多くの支流を集め，関東構造盆地の中心部で史上幾多の乱流と河道変遷をみながら今日に到り，関東地方の産業，社会，文化の重要な地理的基盤を形成してきている。その水は現在，農業用水，工業用水，発電，都市用水などに広く利用され，その河道は古くは水運にも利用された。しかし河道の変遷からもわかるように，古来，屢々洪水が流域の集落を襲い，住民達は利根川の水と絶えず戦わねばならなかった。流域の開発も集落の盛衰も利根川の流れに関連し，その水との戦いのもとに行われてきたといえるであろう。

利根川流域は山地部約40%，平地部約60%で平地部の占める割合の高い点が，本邦の河川としては特色がある。源流より支川付近にいたる間は山間地を流れ，その流路はほとんど変わらないが，石倉が漸次広くなり，前橋付近で関東平野の北西隅に流水出て河床の傾斜が緩くなると共に乱流が始まる。中流部一帯に見られる自然堤防や河跡湖は，かつての激しい流路変遷の跡を示し，赤麻，石川，印旛，霞が浦などの湿地池や沼沢は，洪水調節の役割を果してきた。流出する厖大な土砂は，河床を高め，流域各所

○中田薫「利根川流域の変遷に関する諸問題」上
(「史地理学紀要」10号「変遷の「史地理」「史地理学会」
「水利科学」No.65, 1968. 水利科学研究所に同題で)

に排水不良地を現出した。また下流地帯は常陸風土記のいわゆる「香取海」があったところであり、牛貸沼、印旛沼、霞ヶ浦、北浦などは香取海の入江であったが、河川の堆積作用と人工的変化により低湿水田地帯と化し、今日の下利根平野が出来上った。関東構造盆地の運動によって、銚子では0.01/mの隆起、江戸崎・土浦にかけては沈降地域となっており、かかる構造盆地運動が荒川、利根川をして中流において乱流せしめる基礎を作っている。中流部における流路の変遷については、すでに明かにされているように、かつて川俣付近から今、川を通って東南流し、加須付近から今の古利根川筋を流れ、春日部市から吉川(越谷の東)で荒川を合し、陽田川で東京湾に注いでいた利根川は、徳川氏の江戸入府後、関東郡代伊奈氏(伊奈忠治・忠次)の手によって、約60年の年月と費して(親子三代)河道の付け替えが行われ、承応3年(1654)以降、今日の流路をとるようになったのである。元和7年(1621)に新川通が開さくされて、川はかつての渡良瀬川からその下流の太日川に流下することとなり、同時に非堤川を掘って思川の支川であった元川にも水を流したが、その後寛永2年(1625)、承応3年(1654)および文化3年(1806)に赤堀川の拡張工事が行なわれ、利根川は現在の流路をとることになった。

以上のような利根川河道の付け替えは、まず江戸の水害をとり除き、葛飾平野を江戸の穀倉とし、流末を香取海の低湿地に向けて陸化を進めるとともに、耕地を開発、さらに利根川水系を江戸城の第一線防衛線として東北地方の雄藩に備え、またそれまで房総半島沖の荒海を廻って航行していた航路を、銚子から利根川を遡行し、関宿からかつての太日川に通じて掘られた新川を通って江戸川を下り、容易に江戸に達するようにする、などのために立てられた方策であった。このような伊奈氏によるいわゆる関東流

×.関東流の治水法。河道を蛇行させ、霞堤(洗堰)や霞堤などをつくり、洪水を静かに溢れさせて沿岸を遊作地とし、遊水地を置いて洪水調節をした。(伊奈流)

治水法によって河道が付け替えられた後、近世中期頃から紀州藩士井沢為永(井沢弥惣兵衛為永、一当時60万石8代将軍吉宗が紀州藩主時代の井沢弥惣兵衛為永を幕府の勘定奉行新田吟味役に召し出した。綿、茶種、藍、蜜柑、桑、サトウビなどの商品作物の増産、町人資本の導入、町人請負新田を増やし、日本の河川を一定させた。)の策によって紀州流が採られ、河道を垂直にして堤を堅牢かつ高大に築き、遊水地の湖沼や遊作地を水田とし、下流の低湿地を水田化した。しかし、このために、新しい河道の流域一帯は、河床の上昇に伴い、風水害をうけることとなった。

- 利根川流域の年降水量は大体1200mmから1700mmくらいで、とくに8・9月の台風期に多い。洪水は80%以上が台風によるものであり、とくに台風によって前線が刺激された場合に起り易い。江戸時代の洪水として天明6年(1786)の洪水は有名で、权現堂堤の破堤によって水は江戸にまで及んだ。天明3年の浅間山噴火による降灰が利根川の河床を高めた結果であるといわれる。明治43年の洪水も著名で、山王堂、中条、权現堂などの破堤で、氾濫面積は18万町歩に達した。昭和に入ってからは、昭和10年9月、そして昭和22年9月15日のカスリン台風にお洪水がある。特にカスリン台風による洪水のときは栗橋本位標は9.170mに達し、埼玉県北埼玉郡大利根村地先で右岸堤338mの破堤をみ、水は東京都に達し、耕地冠水面積8万町歩、東京で死者6名、負傷者3名、行方不明1名、浸水は10万3672戸に達した。明治に入り、内務省は明治8年以降32年までに低水工事を行った。これは主に水運のために施行し、ファン・ドールンやムルデルなどのオランダの技術者によって指導された。当時鉄道が未だ完成せず、内陸の輸送はほとんど河川水運によって行われ、利根川は淡川にのびて物資輸送路として重要な役割を

果していたのであった。しかしその工事中，明治18年，23年，29年等の洪水があり，明治33年度より高水改修工事に転換した。そしてその後は洪水の度ごとに計画高水流量は改定され，改修計画は増補された。かくて全川に亘り掘削，築堤をし，堤防の嵩上げを行ない，一部に引堤し，河状の整正を行った。以上のような明治以後の数次に亘る治水工事によって，利根川はその相貌を全面的に変えるに至った。すなわち曲流は実直に改められ，川幅は広げられ，堤防は高大となり，渡良瀬遊水地は調整地化され，本川・支川の上流には多くの多目的ダムが構築された。

- 利根川は古くから農業用水に広く利用されており，古くは慶長9年(1604)に伊奈備前守忠次によって築造された備前堀をはじめとし，万治3年(1660)以降伊奈忠克によって開かれた葛西用水，享保13年(1728)井沢弥惣兵衛によって開かれた見沼代用水，あるいは古海から引水して邑楽郡下流を灌漑するために天保10年(1839)名主白石弥五右衛門によって計画され着工された利根加用水など，そのほか右岸左岸に幾多の用水路が開かれて流域の農村を潤してきた。(第二次世界大戦後にいたり利根特定地域総合開発計画のもとに新しい用水が開かれ，農業用水のみならず，工業用水，都市用水にも利用されている。)
- 利根川の利用に関して重要な意義をもつものに水運がある。河道の付け替えは利根川の経済的価値を著しく高めることになった。鎌倉幕府が置かれていた頃は鎌倉が政治の中心であり，交通系はいわゆる鎌倉街道によって鎌倉に集中していたが，江戸開府以後は交通系は一変し，五街道をはじめとする江戸中心の諸街道が整備されて宿駅伝馬の制が定められ，利根川，江戸川，荒川などの諸河川の水運が開かれた。奥羽地方からの回米を安全に行うためにも，房総沖の荒海を避け

て利根川新水系の利用が要求され，銚子で川船に積み換えて潮来，出島を経て関宿にいたり，それより江戸川を通り，小名木川の運河を経て江戸の本所・深川へと運ばれた。内陸水路網は利根川本流－江戸川を幹線とし，鳥川・渡良瀬川・巴波川，思川，小貝川，霞ケ浦などを支線とし，さらに旧河道や前記の用水までもが利用され，江戸の人口増大とともにますます輸送された。輸送物資の大宗は天領からの年貢米などを中心とする江戸への回米であり，利根川上流，秩父盆地，関東山地などの物産，さらに信州，越後地方からも積み出された。利根川下流からは魚や魚油も運ばれたが，その帰荷の主なものは肥料や塩であった。船は主に高瀬船が用いられたが，上流の浅い所や水の涸れた時には小型の船が便利された。普通は貨客混載だが，とくに客を主とする者は行徳船，成田船，佐原船と呼ばれるものであった。大型の高瀬船すなわち元荒川の可航水路は水量と流路の化現象による水勢によって変化するが，通行終点は上流の五料，山王堂，平塚，中瀬等であり，水の少い冬季は下流に終点をもち，載貨数量も夏は多く，冬は少なかった。かくて本流・支流の沿岸には，物資集散の中心として多くの河岸場の発生をみることとなった。その開設は江戸回米や諸城下町の物資輸送のためであり，常に領主の保護のもとに設けられた。その場所は，主要街道との交叉点や二河川の合流点などが多く，河岸場にはいくつかの川船問屋があった。そして通行船舶の取締りに奉行所に関所が設けられたが，とくに全航船が必ず通過する関宿が重視され，元栗橋には番所と改番所が設けられた。利根川の水運は明治に入ってからも続いたが，明治23年には利根運河が開かれ，東京への高瀬船はこの運河を利用し，関宿通過の船はみられなくなった。従来の高瀬舟にかえて新しく外輪蒸気船が登場し流行となった。しかし明治16年には高崎線，同18年には東武鉄道と東京間に鉄道が開通した。

には東北線，同31年には常磐線，同34年には成田線と，同30年には総武線，そして昭和6年には東武鉄道が開通し，さらに道路が整備されてトラックやバス網が発達すると利根川の水運は急速に衰え，河岸も衰微し，閘門も没落して，昭和10年頃には川には船はほとんどみられなくなった。利根川には架橋されていなかったが，少数の船橋と多くの渡船があって，交通に利用されていた。しかし第二次大戦後にいたり急速に永久橋の架設が進み，渡船が廃止された所が多く，現在ではところどころにみられる程度である。

• 利根川流域では西先地方を中心として古墳時代の遺跡が広く分布し，古くはやくからの居住地域の形成を偲ぶことができるが，中・下流の低湿地は概して開発がおくれ，江戸時代に入ってようやく干拓が進み水田が開かれていったが，たえず水害に悩まなければならなかった。したがって沿岸の古くからの農業集落は比較的高燥な自然堤防上に設けられ，中・下流部では沼地の干拓や湿田の改良に多くの労力が捧げられてきている。現在も幸手東南から杉戸方面にかけての後背湿地では，低位生産性の掘上げ田地域がみられ，排水による土地改良が進められている。古利根・江戸川の河岸低地においては，その集落は，連続的集村は広大な自然堤上に，列村は微高な吹上げ州上に，散村は島上微高地にあることが報告されている。天正～寛永の頃に開かれたといわれる下利根北岸の十六島新田も16の川中島（自然堤防）の上に設けられたものであった。低湿地が干拓され耕地化されるとともに，各方面から入植移住が行われて村落がつくられた。下利根平野では常陸の国の人々が進出し，開拓して村落を建設した。布鎌新田や印旛沼の逆デルタの埜原新田は常陸国の，新利根川沿岸の人々であったし，十六島新田は常陸国の江戸崎～潮来の人々であった。中流部の北川辺領でも新田村は周辺の自然堤防上の古村から少しはなれ微高地をおもとして開かれている。古利根・江戸両川の河間デルタでは，河川氾濫に備え，えらぶべき微高地がない場合は自然堤の高まりにさらに盛土加工してまで宅地を設けた。板倉・明和・北川辺などをはじめとする中流から下流へかけての沿岸の村々や，渡良瀬・鬼怒・小貝下流の沿岸の古い農家には，いわゆる「北堀」が随所に見られ，倉川下流の水倉，渋川下流の校倉，多摩川下流の倉屋と似た景観を呈している。

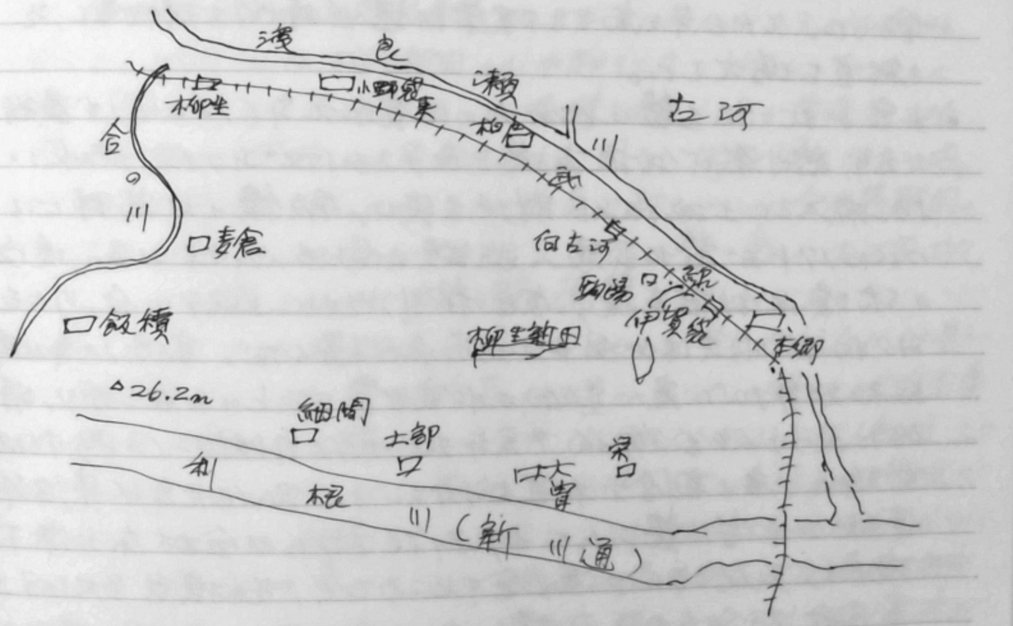
自然堤防上は一般には宅地・畑地として利用され，低湿地は排水をよくして水田として利用されてきた。すなわち，主として自然堤防上に耕地をもつ部落はいわゆる「オカドコロ」であり，その宅地は「ヤマ」であり，そして低湿地の水田を多くもつ部落は「田どころ」であった。畑は古くから大豆・麦・陸稲，後には桑が植えられ，棉も作られたことがあったが，昭和7・8年頃，羽生市の三田ヶ谷で始まったといわれる陸田は，第二次大戦後にいたり養蚕の衰微と食糧増産のために急速に拡がった。現在ではそのほとんどが陸田化され，一部にはビニールハウスによる野菜栽培が行われている。いっぽう低湿地は排水に苦しみ，田ドコロである加生市新郷の中新田では，保井（ぼい）と呼ばれる深い湿田は僅かの雨でも湛水し，泳ぐようにして田の草とりをし，収穫も低かった。農耕の労苦と家計苦から他部落より中新田へ嫁ぐ者もつくに居らず，「中新田に嫁にゆくか，それともはま（畚）かついでバラを背負うか」とさえいわれた。第二次大戦後にいたり客土をし，用排水を整備することによって土地改良が進められた。麦の水田利用を必要とする陸田では，用水が不足し新たに引水したり，揚水ポンプで地下水を汲みあげているが，湿田の排水は重大で，湿田をもつ田ドコロの部落では，大落その他の排水路にも負担金を支払っている。昔は米のとれる田ドコロは湿田に悩むところは別として，概して

オカドコロから羨望の眼でみられたといわれるが，いまでは灌漑可能の陸田に変わり，蔬菜栽培も行われるオカドコロの方が有利のように云われている。

- 渡良瀬川の合流点から鬼怒川の合流点にいたる中利根の左岸にはかつては大小の沼地があった。これらの沼地はまず飯沼が寛保から天保にかけて干拓され，大山沼は大正15年に，飯塚沼も大正15年に，長井戸沼は大正13年に，鍋戸沼は昭和30年に，そして一の谷沼は昭和29年に次々と干拓が行われて水田となり，現在は菅生沼を残すのみとなっている。
- 近世における利根川の瀬替は，江戸幕府初期の水害を防ぐのに役立ったが，新しい河道の流域は河床の勾配を失って頻々と水害をうけることとなった。瀬替が行われた近世前半には比較的少なかったが，後半にいたり河床が高まると共に，洪水は頻繁に沿岸を襲い始めた。享保13年(1728)，寛保2年(1742)，宝暦7年(1757)，天明3年(1783)，同6年，明治29年(1896)など史上に名を残す洪水が目立っている。利根川本流と渡良瀬川に挟まれ，四囲の堤防は延長約2里余に達するといわれる埼玉郡北埼玉郡北川辺村は，縁辺部の飯積，小野袋，伊賀袋や中央の柳生新田から古墳時代前期においてすでに居住地域となっていたことを示している。面積20.86km²，1465世帯，7788人(昭和40年，平成11年3月末では3736世帯，13820人)の農村(現在では東京などへの通勤者多い)であり，全戸数の7割強(平成7年10月では790戸，18.8%)が農家である。総耕地面積は1147町余，うち田775町(畑372町)であるが大正10年には田600町，畑620町で畑の方が多かった。村の中央部にあった湿沢地が排水され，土地改良が行われ，さらに昭和30年頃から畑の陸田への転換が行われた。一般に周辺の自然堤防が畑と

なっており，中央部に水田が広がっている。古くは北多郷太田庄の中にあり，延徳2年(1490)石川信濃守源吉が陣屋を構えて32000余石を領したといわれる。その後古河領に属した。明治維新になり，埼玉県の所管となり，明治22年には寺倉，飯積，柳生，小野袋など西部の地区は利島村また，柏戸・向古河・駒場・本郷・栄・伊賀袋などは川辺村となった。そして昭和30年4月，両村合

北川辺要図



して北川辺村が誕生した。村の西端に遍照寺山とよばれている26.2mの砂丘が認められるが，この山より東方へ扇状に低くなり，中央の柳生新田から三軒在辺では最低の14mになる。南部は比較的高く，利根川沿いの細間，土部，本郷付近は自然堤防で当り，ほぼ16m前後であるが，昭和32年3月に埋められた。また越中沼は後背湿地の最深部であったと推察される。集落は一般に利根川や渡良瀬川に沿う自然堤防上に密集して設けられて

いるが，新田村の開設に当っては，これらの古村より中央部の低湿地の中の自然堤防の微高地を求めて開拓が行われたものと考えられる。利根・渡良瀬両河川は一部工事として築度かの改修が行われ，破堤による水害の防除には成功したが，堤内における湛水害については，その防除は困難を極めた。以上のような地形である北川辺では，一度湛水すれば渡良瀬の水位を低下を待たねば"排水"できなかった。しかも年々高まる河床は湛水時間を連動増し，その被害を増大した。

- 水害が北川辺を襲い始めたのは寛永元年（1624）が最初であり，新川通が利根本流となってからであった。洪水によって流入した土砂のために耕地を失い，飯積の北高師ではついに17戸が富士山麓へ逃避したとも伝えられる。堤防の決潰は利根本流，渡良瀬川，それに西部の合川にもみられ，北川辺は四周からの洪水に悩んだ。寛保2年以降昭和22年までに実に81回の水害を蒙ったといわれており，明治に入ってからも3年から43年までの40年間に13回，すなわち3年に1度の割合で水害をうけている。弘化元年以来，3年連続で水害に襲われたが，弘化2年には全村が床上床下浸水し，弘化3年には浸水しない所もなく，その損害多大なることを名主がまとめた文書がある。昭和22年9月の洪水の時には向古河の渡良瀬川の堤防が，約200mにわたって決潰し，全村は一瞬の中に濁水の渦と化し，死亡9，床上浸水1473，流失全壊110，半壊327，牛馬被害623，水稲全滅661町歩，同じく陸稲87町，大豆102町，そして桑園108町が3分の1枯死し，教育は15日間中止されるという大被害を被った。洪水の激しかった北川辺では，全戸の16.6%，農家戸数の22.6%（1956年4月）が水塚をもっており，中央部

に位置して冠水の期間も高く，湛水期間の長かった柳生新田においては，総戸数の43.2%が所有している。（昭和55年の調査によると，調査家数746のうち水塚のあるもの173，塚だけあるもの35，かつて水塚があったもの225，揚げ舟があるもの386，かつて揚げ舟のあったもの169，田舟のあったもの380，かつて田舟があったもの194であった。うち水塚の現存は柳生新田が最も多く13，揚げ舟の現存も柳生新田が17で最も多い。）（なお昭和50年の総戸数は729戸，1906人である。必検昭和56年7月では柳生新田の山中静江宅を訪ねた。）一般に土盛の高さは2～5m程度，水塚建物は6坪が普通で，2階建てが多い。平時には米倉を兼ね，周りに榛や梅を植えて洪水による崩壊を防いでいる。納屋の軒などには今も避難用のアゲ舟を吊している家がみられる。以前は壁の厚くてある家に広く，ワスーリを敷くものが多く，壁も荒壁が殆どであった。

- 洪水に対して地域住民の間で古くから水害予防組合が村毎で組織されており，組合長は村長であった。耕地の所有面積によって1番から3番までに分け，大体1.5町以上は1番組，1.5町～5反しかいまでは2番組，それ以下（主に小作）は3番組であった。かつて利島村は5区に，川辺村は4区に分かれていたが，1番組は各区で30人程度で，各区それぞれ堤防を部分的に分担した。増水と洪水の怖れがあると村が鐘組が出て見張りをし，漏水があると土俵を積んで行ってとめた。いよいよ危なくなると2番組が出動し水防作業にあり，一方では収穫可能なものは急いで収穫した。3番組出動となるといよいよ全村あげての体制で，ここまで来ると危険度は最高であった。水害の怖れがあると2番組以下が水防器具を水塚に片付けた。洪水の危険区域で利根川が決壊すると低い北川辺には水が来る怖れがあるので，時には遠く応援にかけつけたことをあった。このようにして

流域各町村の組合間の協力もあったのである。河川改修の進捗
明治43年以前には1番組出動は毎年のようにあり，多い時は年に
4，5回，2番組は1，2年に1回程度の出動であった。もち
ろん出動はすべて無償奉仕で，地主階級の1番組出動は最
も多いことになる。しかしその後は改修工事も進んで出動の機
会もほとんどなくなり，耕地改革後は地盤格差も縮まって1番
から3番の区別もなくなって，今は流域団がその任にあることに
なっている。耕地改革前の村の大地主は東金の K家（今おなの）
で150町程度の所有であった。村の農家でこの K家の小作を多
少とも行っている家はかなりあった。利根川対岸の大起村でも
K家・I家などの大地主があって，北川辺の土地を有っていた。
水害のあとで土地を担当にして金を借り，ついに返せなくなっ
とりあげられたものであった。北川辺のこのような水害は，
川改修工事の進捗と排水機場の設置によって免れることが
出来ることになった。（明治以後）

- 利根川利用の推移に関連していちじるしい変貌をみた流域の集落のうちには，水運の衰退に伴って衰微をとげた河岸集落がある。もともと水運によって発生したものだけに，小野川問屋や旅籠屋，商店などからなる都市的機能をもつ交通集落であり，水運の衰退はさらに致命的なものであった。竹袋より利根に木を下したことからその名がおこったといわれる木下河岸（現在は千葉県印旛郡印西町木下）は，「利根川図志」によるとはじめはわずか10軒であったが，寛文の頃から行program（木下茶船）が設けられてよりその繁栄がはじまり，三社詣り（香取，鹿島，息栖）と銚子浦の遊覧客によって賑わったといわれ，これは明治34年の成田線開通まで続いた。30mの台地の末端が背後に迫まり，利根川の堤防に沿って成田に至る街道には両側に町並が続き，台地と町並の間を成田線が走っている。木下の町並は東に延びる日光道

となり，木下馬入前を過ぎて間もなく大軒にいたる。大軒は木下町で現在，商業活動の最も盛んな地区である。布佐に向かう街道に面し商店が並び，利根川堤防との間に手賀沼の排水路となっている手賀沼落堀（東端は内川とも呼ばれ，大軒近くで新堀と大軒堀の2つに分れる）がある。この堀は木下馬入の北で再び合するが，第二次大戦後，手賀沼干拓の湛水防止と干拓の目的をもってここに排水機場が設けられ，昭和31年に竣工した。この排水機場ができるまでは，手賀沼落堀は木下集落の北を流れ，その東端付近で水樋が設けられて利根川に結ばれていた。機場設置後は，機場付近よりかつての水樋に至る間の堀は不要となり，最近埋めたてられた。「利根川図志」に掲載されている木下河岸の図ではこの堀に橋が架けられ，現在の堤防の内側にあたるところに河岸が設けられて旅籠屋や茶店が並んでいた。河岸に並ぶ淡山の船は三社詣りの行program である。背後の川船問屋は寛文年中設立の「鶏鳥衛」で，現在もこの位置にある I家（当主は東京で開業医）である。

- 木下のこのような繁栄の基盤には，利根川流域から江戸への最短距離にあるという地理的位置の良さがある。木下河岸から今の木下駅の南を通り，大森・鎌谷・行徳を経て江戸にいたる水運で利根川を遡行して木下まで運ばれた貨物は陸揚げされ，陸路を小荷駄で江戸へ運ばれた。魚も多量に運ばれて俗に坐街道ともいわれた。三社詣りの基点としても，この交通の便利であったと考えられる。木下印旛沼の渡しを通り佐倉に至る陸路も重要であったようである。明和9年（1772）の戸数193，人口708，宝暦10年には200戸600人であった。そして茶屋20軒，小料理2軒であったが，この茶屋の多いところに木下の特色があった。かくて繁栄であったが，この茶屋の多いところに木下の特色があった。かくて寛政元年（1789）頃には年平均4200俵の米が出入したといわれる。明治にのこり I家でも70人くらいの外輪船を購入して会社

子一東京間を運航させた。明治41年には木下河岸の乗客3892（うち降客2866），貨物は12237俵（うち到着7763）であった。壬申戸籍に載っている当時の木下河岸を含む竹袋村の戸数は314であるが，うち農業は106，船乗20，旅籠10，水菓子商12，日傭稼18が主で，商店や加工業などがその他を占めている。

三社詣りは成田鉄道の開通で衰退したが，舟運は昭和のはじめまで続けられていた。しかし，河岸集落としての機能を大きく変えたのは，明治42年の利根川改修工事による堤防の構築であった。河岸には10軒程度の旅籠屋，料亭，飲食店などがあり，内川の橋を越え，成田街道に面して問屋や旅館，商店や船頭の住家などがたち並んでいた。改修工事により二の河岸の部分が移転を余儀なくされ，大正のはじめには「利根川図志」の図にみられる「かぎなしや」「三角屋」などの旅館も転業し，馬尽付近へ移転した。

六軒にあった大森河岸は古くは木下河岸ほどでないにしても，やはり小さな河岸としての機能をもち，河岸近くには回漕店や船頭の住家もたち並んでいた。この河岸の機能としては，いっぽうにおいて手賀沼干拓を通じ手賀沼の水運に関連していたようである。手賀沼沿岸の村々からは，米・材木・薪などが小さなサッパ舟で六軒へ運ばれてきた。明治34年に成田鉄道が敷設されると木下駅の設置場所が問題となり，当初は井内（現在の木下駅より成田寄り約1kmくらいのところで，木下河岸に最も近いところ）に設置の予定であったが，地元民の「汽車の火の粉がとんで危険だ」とか，「木下が衰微する」とかの理由による反対にあい，木下集落と六軒集落の間の桑畑の中に設けられた。そしてこの桑畑の中を両部落から木下駅へ通じる道路に面し，木下河岸からの移転者や六軒からの移転者などが移り住み，やがて木下と六軒とが連続して町並を形成するようになり，現在の

駅前の目抜通りができ上った。河岸廃止後の木下集落の衰微は著しく，やがて背後の農村地帯を通り，佐倉，臼井，船橋，中山方面と木下駅を結ぶバス路線がこの2つの関係で六軒集落を通るようになってからは，商店街の主力はむしろ六軒に移ってしまった。

14. 北海道の開発

× ・北海道はその面積 78,512 km²（北方領土を含め 83,424.08 km²）で日本の約1/5を占めているが，日本の最北端，古くは原住民にちなんで蝦夷地あるいは単に蝦夷とよばれていた。古く6，7世紀頃から漁業者が出漁し，戦国時代には漁民の定着する者が多く，その開発は海岸地域から始められた。特に道南には和人小豪族の根拠地が12以上もあり，津軽の安藤安東氏（北条義時の代官として蝦夷管領を命ぜられたが，南北朝内乱期以後，南部氏に敗れた安東氏が蝦夷地へ逃亡した。）の支配下にあった。これら小豪族は館を構え，漁師や商人達から産物の一部を貢納させ，さらにアイヌと交易した者もあった。産物は若狭の小浜や敦賀の商人の手で上方へ運ばれ，蝦夷3品（鮭，鰊，昆布）として知られていた。和人は東は渡島，西は余市あたりまでアイヌの間に雑居して漁業を営み，アイヌと交易した。アイヌの漁場は和人に奪われ，交易にも詐欺を伴うなりしたので，アイヌは和人と衝突したが，結局アイヌを抑え，武田信広（後に松前氏と改姓）が覇権を握り，やがて安東氏の代官になって蝦夷島和人地の支配者となった。その根拠地を福山（後の松前）に置いた。

天正18年（1590），蠣崎慶広（よしひろ）は豊臣秀吉より蝦夷島主としての朱印状が下ろされ，のちに姓を松前と改め，慶長9年（1604）に徳川家康より黒印状を下ろされ，蝦夷地支配権を得た。慶広は家康に領域地図を献上したが，のち寛永12年（1635），検分の結果を正保図絵図，さらに寛文1年（1661）の調査による元禄国

× 平成11年3月末現在，総面積 83452.28 km² 総人口5694737人．
総世帯数 2381997世帯．密度．68.02人/km²）

絵図を提出したが，これには北海道本島のほか，樺太，千島の大部分が描かれていた。そして本島には和人居住地8ヵ所，夷人居住地14ヵ所が記入されている。松前藩は和人地をのぞく松前（福山）を中心に西は熊石あたり，東は亀田（函館）までを松前地と称し，福山以西を西在または上在，東を東在または下在と称し，その奥は東西蝦夷地とした。そして和人の居住地は松前地以外に許さず，熊石と亀田に番所を置いてこれを取締った。松前藩の経済的基礎はアイヌとの交易権であった。（交易場所は商場である。）いくつかのアイヌとの交易地（番所）を設定し，それを藩主の直領，または上級家臣の知行（支配）とした。交易品は時代により推移はあるが，こんぶ，さけ，にしん，ラッコ皮，クマ皮，ワシ羽，タカなどのアイヌの漁猟品が主で，アイヌに対しては米その他の食料品や日用品であった。北回航路の頃，商人は敦賀・小浜の商人であったが，やがて近江商人団が進出，西回り航路が主となった。そして藩または知行主の直接交易から商人に委託して一定の運上金（取引に課した重税）を徴収する所謂場所請負制度へ移行した。（寛文一166ページ～172，～享保1716－ページ35にかけ）かくて請負人の漁場経営へ進展し，アイヌは場所請負人使役される労働者となった。場所請負人は生産をあげるために，進んだ漁具や漁法をもち込んだが，強制労働や苛酷な行為などにより，アイヌは漸次奥地に追われることになり，アイヌの抵抗（騒動）も起った。場所請負人も近江人商人から江戸系商人へと変わって行った。天明6年（1786）には東蝦夷地38場所運上金578両，西蝦夷地40場所運上金3932両が記録されている。そして西回航路の開発により，18世紀に入ると大阪に松前問屋仲間ができ，さけ，ます，たらの干物や塩物，魚油，しばりかす，干しあわびなど，さらににしんかすがほしかにかわり近畿の綿・藍

作地帯の肥料として需要が増大，こんぶ産地は道東にもひろがった。松前（福山）は全島経済の中心地として繁栄し，諸国の大商社300店が集まり，有力商人の店も置かれた。18世紀初めの人口は5,000人（全島和人の$\frac{1}{4}$）であった。（江戸時代には道南の和人は約2～3万人，奥地の蝦夷もほぼ同数であった。）

• 18世紀に入り，ロシヤは毛皮獣を追って千島に南下，1775年（安永4）に松前藩は，択捉・国後の酋長が赤蝦夷（ロシア人）が千島に根拠を置いていることをきき，幕府はこの付近を探検させ，以来国防上の要地とされた。寛政4年（1792）にロシアのラックスマンが根室に，次いでイギリス船も蝦夷に来航，北辺多事となり，幕府は再び調査を始め，寛政11年（1799），幕府は東蝦夷地を幕府の直轄とした。しかし文政4年（1821）には蝦夷地を松前藩に還した。安政1年（1854），日米和親条約で箱館が翌年開港となり，一転して近代文明流入の門となった。江戸時代に蝦夷地の開拓が進まなかったのは1.松前藩と場所請負人の独占体制　2.本土の農法が北海道の風土に合わなかったこと　3.農民の土地緊縛のため，移民が集まらなかったこと，などがその理由である。これらは主に封建社会に内在する条件なので，その解決には明治期にいたるのを待たなければならなかった。

蝦夷地内陸部の開発については天正16年（1588）に近江の人がはじめて鉱山をおろし，その後奥地の開発を志す人が輩出した。寛政11年（1799），八王子の同志が勇払・白糠方面に開拓を試みたが失敗に帰した。明治のはじめに於ける北海道の耕地としては，函館平野の東部の扇状地，とび半島部の海岸段丘に多少の畑，また函館西部の沖積地の一部に少しばかりの水田が散在していた。江戸幕府成立後，維新政府は明治元年（1868）に箱館裁判所を設け，直ぐにこれを箱館府に改めた。間もなく旧幕脱走軍がこれ

×明治4年，開拓判官島義勇の構想のもとで，岩村通俊の手において札幌が建設された，整然とした街路区画もこの時の計画であった。そして開拓使も農学校も札幌に移った。

海道を占領，榎本武揚と旧幕臣は青森・津軽へ逃げた。翌年5月，新政府軍の攻撃で旧幕軍は降伏，7月に開拓使が置かれた。開拓使はじめ亘の増上寺内にあり，札幌農学校×の前身の開拓使仮学校も増上寺内にあった。開拓使の移転に伴い(明治2年)農学校も札幌に移った。8月，蝦夷地も北海道と改称した。明治初年，藩政によって東北各藩に分割された開墾が進められていたところとして，仙台亘理藩の有珠開墾(明治3年)その他宮薗付近(明治3年)，静内(明治4年)の開墾があった。しかし，北海道の開拓は在来の技術をもってしては困難であったので，開拓使は外人の技術を借りるべく，明治9年(1876)には開拓使仮学校(札幌農学校－北大の前身)の教頭として来朝したW. S. Clarke(アマスト州立大学の学長)や明治4年に開拓使の招きで来朝した顧問のHorace Capron(アメリカ農務局長)，そして同明治4年に開拓使地質として来日したThomas Anticellなどから北海道開拓の方途について意見を聞いたところ，何れも実作主否定した。(しかし，札幌近辺の移民はすでに試作に成功していた。)(内村鑑三，新渡戸稲造らは札幌農学校の又聞き。クラーク直接の弟子でない。クラークは札幌に8ヵ月しかいなかった。)

かくて，冷涼地に適するてんさい，はっか(明治10年頃)などを中心とした畑作農業を中心に，燕麦，馬鈴薯，大豆，菜豆などが栽培され，開拓使も，札幌・新冠に牧場を官営，醸造やビール，ガラス通などの工場も経営した。そして内陸の，特に畑作に適する緩傾地や台地の開発が進んだ。かくて明治30年頃には開拓はほぼ全道にまで拡った。交通も不便で内地から孤立していたので困難が多かったが，商品作物を主として，本州からみると企業的商業的経営を目指したものであった。札幌，琴似，丘珠，月寒，豊平，白石，野幌，江別，対雁，篠路，当別，札苅，発寒，手稲，銭函，小樽，余市，古平，美国，積丹，岩内，寿都，黒松内，八雲，長万部，森，函館，大野，七飯，鹿部，砂原，森，八雲，長万部，黒松内，寿都，岩内，積丹，古平，余市，小樽，銭函，手稲，発寒，札苅，当別，篠路，対雁，江別，野幌，白石，豊平，月寒，丘珠，琴似，札幌，岩内の開発も重要な政策で，石炭を運ぶために，日本で3番目の鉄道が小樽－幌内間に開設された。開拓使は明治14年(1881)に廃止され，札幌，函館，根室の3県に分け，農商務省北海道事業管理局も設けられた。そして明治19年(1886)3県1局にかわり，北海道庁が設置された。

• 北海道は4つの弧を描く海岸線で囲まれた菱形の月同体部と，間に石狩・勇払低地帯を挟んで南西方面に突出する半島部とからなる。月同体部では，樺太から南にのびる蝦夷山系と，カムチャツカ半島から南西に延びる千島弧とが菱形の対角線の位置を占めて山地の骨格を形成し，河川は大体4斜面に分れて流出する。半島部は東北日本弧に属し，西半の渡島山地は出羽山地の延長に当り，石狩・勇払低地は千島弧と東北日本弧が接する位置にある。それは千島海溝と日本海溝との会合部から北西に湾入する凹地の延長にある。地質構造からみても，石狩・勇払低地帯を境とし，半島部と月同体部に大別される。山地は一般に従順で，山頂には平坦面をみることが多く，そこからのびのあらい大まかな山腹斜面がつづいている。河川上・中流部の谷底平野は砂礫質で，谷中には河岸段丘が連続的に発達している。下流部の平野の多くは，後氷期の縄文海進で浸水した入江が堆積され，海退に伴って成長した平野であり，海岸砂丘，自然堤防，沖積前浜地以外は低湿な湿地のところが多い。海岸地帯には数段の海岸段丘が連続的に発達する。北東低地には化石周氷河地形の発達をみることがその特徴である。

根釧台地は南東隅を占め，東西の低辺約50kmの三角形状の平面形と，3～4段の段丘地形を示す海岸平野である。石狩・勇払低地は，日高造山帯とグリーンタフ変動帯の間にあって，新第三紀末の地殻変動によって生じた構造性凹地を原形とし，その南は洪積世末に噴出した支笏火山噴出物からなる火山麓台地で占められている。北半の石狩平野は，石狩川下流地域の沖積平野(扶

義の石狩平野）に，美唄より北方の深川盆地に延びる空知低地帯を含めており，石狩川・雨竜川・空知川・夕張川などの沖積平野や河岸段丘と，豊平川・発寒（はっさむ）川などの扇状地からなる。南部の勇払平野は低平な火山灰台地（千歳台地）と，それを開析する勇払川・安平（あびら）川・厚真（あつま）川などの堆積物や噴炭岩，樽前山の噴出物が埋めた低湿で泥炭地の多い海岸平野とからなる。中央低地帯は，樽太の豊原低地帯に続く構造性の窪地帯と考えられている。名寄・上川・富良野などの諸盆地帯は，扇状地性の段丘と氾濫原平野からなり，ところによっては自然堤防にせきとめられて低湿地となっている。襟裳（宗谷）平野はオホーツク海岸に開き，その海岸段丘面は海岸段丘面に，宗谷平野面は沿岸低地面に連続している。半島部を二分する黒松内低地帯は，奥羽脊梁山地西側の諸盆地を連ねる中央窪地帯（median trough）の延長とされる。黒松内低地帯北部の寿都（すっつ）平野も南部の函館平野も入江を埋める沖積低地の周辺に，河成ないし海成の段丘や扇状地性台地の発達をみる。日本海沿岸北辺の天塩平野は，海岸に平行する南北の砂丘列の内側を，天塩川とその支流のオンネベツ川，サロベツ川などの堆積物が埋める湿原で，泥炭が発達し，天塩原野・サロベツ原野とも呼ばれている。宗谷湾に面する暑寒別平野は入り江を埋める沖積低地と周辺の海岸段丘からなる。

十勝平野は日高山地と千島弧との会合部の南東側に位置し，西を日高山脈，北を石狩山地，東を白糠丘陵で囲まれ，周辺山地から中心に向って新第三紀丘陵，扇状地性台地，沖積低地が配列して段丘地形をなし，構造盆地性の平野で，南は太平洋に臨む。上川盆地は中央低地帯の中央部を占める盆地で天塩・夕張山地との間にあり，北は石狩・天塩両境の低い宇山岩山地の鞍部である塩狩峠で剣淵盆地と境く，南は富良野

盆地と十勝溶結凝灰岩の台地で境されている。盆地底の高度は100～200m，石狩川は愛別付近で盆地に出て蛇行となって南西流し，旭川市街付近で東から牛朱別，南東から忠別・美瑛などの支流を合せ，近文付近でオサラッペ，江丹別などの支流を入れ，神居古潭の峡谷を開削して石狩平野に出る。盆地の地形は主として扇状地性の砂礫質の沖積平野からなり，その沖積平野は河床面と比高5m前後の段丘化した沖積面とから成る。

- 北海道の平野の開発と利用に関して最も重要な自然的条件は気候と土壌，それに関わる植生であるといえる。年平均気温の分布をみると函館8.2℃，札幌7.8℃，九四川6.2℃，稚内6.3℃，網走5.9℃，帯広5.9℃，根室5.7℃で，半島部を除くと，低地の年平均気温は大差はない。しかし気温年較差，すなわち最暖月最寒月の月平均気温の差では，函館25.4℃，札幌26.8℃，旭川29.4℃，稚内25.0℃，網走26.1℃，帯広29.0℃，根室22.7℃で内陸と海岸部の差が明かである。（山岳部ではもっと大きく，雄阿寒岳－13.7℃－31.8℃，佐幌岳－10.3℃－旭満峠の北－31.0℃で日本では最大である。北海道では，オホーツク海沿岸から根室にかけた地域では2月が最寒月となるが，他の地域はほとんどが1月に最寒月となる。1月の月平均気温は，南西部の沿岸部では－2～－4℃，内陸では－6℃で，山地では－8℃～－10℃となる。南西部海岸では，暖流の影響でとくに温暖である。最暖月は8月で，南西部海岸で24℃以上，他は21～22℃である。内陸の平野部は21～22℃である。1月の月平均最低気温では十勝の陸別の－21℃があり，山間盆地では何れも－20℃となる。冬季の気温逆転がみられ，十勝平野では盆地底の帯広－15.9℃で盆地周辺の斜面には温暖帯がみられる。また8月の月平均最高気温では根室半島から厚岸にかけては－16.2℃であるに対し新得－12.0℃，釧路－15.9℃で盆地周東部北海道の海岸では22℃内外，根室半島から厚岸にかけては海霧に影響で，厚岸は23.2℃，納沙布岬19.5℃であり，これは海霧に

とるところが大きい。石狩平野では海風の影響が強く，河口部では18.0℃，砂牧，美唄では共に20℃である。極値では，十勝の新得で1944年8月18日に39.7℃，網走の津別では1925年8月28日に39.3℃を記録している。最低では，1902年1月25日に旭川では−41℃，天塩の美深で1931年1月27日に−41.5℃を記録している。これは日本の最低記録である。この他，同じ1931年1月27日に上音威子府では−41.3℃，1931年1月27日に富良野で−40℃を記録している。−35℃以下の低温を記録した地域は根釧台地，十勝平野，富良野盆地など，北部北海道の海岸部以外の地域である。北海道における霜の初日は，平地，雄内10月20日，網走10月18日，旭川は10月4日，札幌10月7日，函館は10月14日である。しかし年によっては十勝の清水，上士幌で1945年9月3日，上川の各地で9月4〜8日頃，帯広では1913年9月14日に霜が降りた。このような日には農作物に被害が出る。根室では晩霜は平均5月19日だが，1911年7月23日に降りた記録がある。早霜よりも晩霜による災害の方が過去80年間の記録では約2倍も多い。北海道では夏の低温の高低が農作物の作柄に影響を及ぼす。夏の低温はオホーツク海や三陸沖に初夏に現れる高気圧から吹き出す冷湿な気流によることが多い。稲作限界は7・8月の平均気温が19℃といわれる。20℃以下になると急激に収量は減少する。昭和41年には牧草・畑作普全道の被害は面積で76,806 ha，当時推定610億円の被害をだした。

• 北海道の降水量は，胆振の南東向き斜面で登別など年降水量2000 mmを超すところがあり，日高山脈南部の東向き斜面でも1600 mm以上のところがあって，日高山脈から石狩山地へかけた中央部，天塩山地から石狩・空知へかけた山地，後志・石狩・胆振の山地，知床半島の山地，道南では年1200

mmを超す。しかし一方，十勝東部と網走には700 mm以下の地域，釧里などでは662 mm，本別674 mmなど日本の降水量最少地域がある。上川・富良野盆地などでも1000 mm以下となる。雪は渡島半島や太平洋岸で11月上旬，他は10月下旬に降り始める。終日は函館は4月13日，網走5月8日，降雪日数は釧路の約60日，雄内では約140日である。積雪深の最大深は全道ではほぼ50〜60 cm，記録では帯広で1970年3月16日の142 cm，右尾で870 cmである。冬の雪は季節風ではなく，太平洋岸を通る低気圧によってもたらされる。根雪は日本海沿岸で11月下旬，オホーツク海沿岸で12月になってから，太平洋岸では12月下旬である。最深記録では1970年1月31日に倶知安で236 cm，3月25日に372 cmを記録した。

北海道は高緯度にあるため，全般的に冬の日照時間は長く，特に日本海側では冬の季節風により雲量が多く，日照時間は少ない。しかし，特徴は海霧によるものがみられることである。春に道東の根室や釧路にかけた海岸部は5月中旬から6月下旬までの霧が多い。冷い寒流が道東の海岸を南下し，上の方に南から暖い海流が北上してくると，海面付近に気層が生じ陸上へ押し寄せる。海岸付近で表面水温と気温の差は3℃くらい，沖合では6℃くらいの時のことが多い。海霧発生する水域は表面水温が20℃以下の冷海面に限られ，4〜9月の間に水温20℃の線の南下，北上に従って30〜45°Nの間を移動する。海霧は海岸から内陸に入るに従って地表面から熱せられて消える。この霧のため海岸地帯は日照が不足し，気温は上昇しにくく，湿度が高い。十勝地方では40 km内陸では海岸よりも日最高気温は10℃も高く，釧路地方では約7℃高い。釧路における霧の出現頻度は日高し，朝5〜6時に多く，消霧時刻は7〜8時頃で，霧前線の侵入速度は20 km/時で海岸で速く，内陸でおそい。内陸では霧の侵入により30〜70分の間に気温が10℃下降し，相対湿度は5〜12%上昇する。霧と

防ぐために防霧林が道東の太平洋岸でつくられている。防霧林は乱流拡散，遠度，捕促の3効果が考えられる。林の前を1とすると林の後方90～340mで約50%に霧水量が減少している。

- オホーツク海の沿岸では流氷がみられる。紋別では初日は1月17日，網走で1月14日，根室で1月29日である。終日は共に4月5日(79日)，4月18日(95日)，4月20日(94日)である。簡潔にいうと沿岸結氷と流氷の二つの現象がある。沿岸結氷の初日から流氷の終日までを海氷期間とすると，紋別は98日，網走は111日，根室は98日となる。結氷は流氷より早く始まる。年による差が大きく，その原因は気温，水温，風向などによる。また卓越風の方向は，冬は北～西の季節風，夏は南東よりの季節風である。北海道の気候区をケッペンの気候型によると，Cfbは渡島半島の南東・南西部で，内部はDfa(石狩平野にもある)，他はDfbとDfc(胴体部の東端)である。

- 北海道の土壌は山地・丘陵にはPodzolがみられ，エゾマツ，トドマツなどを主とする亜高山帯はPodzol性土に被われている。火山地帯には風化火山灰土，石狩平野やオホーツク海沿岸台地などには泥炭土，黒泥土など有機質土壌に被われ，また山地には褐色森林土がある。羊蹄山麓，石狩平野，十勝平野，根釧原野，上川盆地などには沖積世に活動中の火山周辺を除き，腐植を多く含んだ黒色火山灰土があり，馬鈴薯，麦類，てんさいなどの畑作物に利用されている。北海道の河岸，海岸の沖積地には本州以南に比べ遙かに広い泥炭地の生成がみられる。有機質土壌といわれるこの泥炭地は20～50%の有機物含有率をもち，強酸性，肥沃性に欠け，排水不良の条件とあい俟って農耕には適さない。根釧・網走・天塩などの未開拓の泥炭地は，そのまま泥炭土や黒泥土によって覆われている。全道で1mを超す厚さもあるといわれるが，石狩川流域平野にその約3割があるという。岩見沢西

の篠津原野では新しい計画開田区域11730haのうちの泥炭地は客土によって開発が行われている。

- 北海道(蝦夷地)の開発は海岸の漁場から始まったが，内陸に関しては，天正16年(1583)に近江の人がはじめて金採をおこし，その後も奥地の開発を志す者も出た。寛政11年(1799)には八王子の同志が雲払・白糠方面にまで開拓を志したが，すべて失敗した。そして明治のはじめには，北海道の耕地としては，函館平野の東部の開拓地及び半島部の海岸段丘上に多少の畑，また函館西部の沖積地の一部に少しばかりの水田が散在していただけであった。かくて北海道の耕地による開拓は，全く明治以後に俟たなくてはならなかった。明治初年，藩毎による開墾が着手され，明治3年の仙台藩の有珠開墾をはじめ，宝暦，静内の仕越などが開墾され，いっぽう民間の資本家も集団移民を募り，開墾団体を組織して開墾事業を進めたが，冷涼な気候にまた，東北以南の温暖な気候のもとにおける農業生産の方式をもって開拓したため無理があり，失敗した。開拓便の招いた外人の顧問達も水田を否定したので，その後は畑作を中心に開拓したが，明治10年頃から冷涼地に適するてんさい，はっかなど，その他燕麦や馬鈴薯，大豆，菜豆などによる農業が漸次効果をあげるにいたった。そして明治30年頃には3泊ど全道にまで開拓が拡がった。交通も不便であり，内地からも遠ざかっていたので困難が多かったが，商品作物を主とし，本州からみると企業的商業的経営を目指したものであった。

- 北海道の平野の開発については，一つは国による屯田兵の開墾，もう一つは明治21年(1888)に始まる植民地区画法に基く一般の開拓である。屯田兵村は明治7年(1874)，黒田清隆の建言で，士族授産の一方策として国防と開拓を兼ねて設置された。明治29年(1896)に旭川に第7師団(屯田兵司令部と第7師団司令

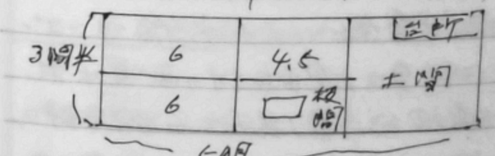
部と改称）が設置され，国防の機能が師団に委ねられるにいたり，屯田兵はその使命を終え，明治39年（1906）には屯田兵令も廃止された。明治8年（1875）に琴似に宮城，青森，酒田三県及本道管内の士族198戸男女計965人が屯田兵第一大隊第一中隊として入植してから，明治34～37年の間に解散されるに至る間に，道内各地に約7000戸，4万人の兵員とその家族が定着した。明治9年には札幌南部の山鼻村に第2中隊として240戸が入植し，以後次の順序で全道各地に屯田兵村が設置されていった。

1. 札幌・江別地区（札幌防衛の為あり）―明治8年（1875）～19年
2. 根室地区―明治19年（1886）～22年（1889）
3. 空知地区―明治20年（1887）～22年（1889）
4. 屯鶴（剣淵の東）地区―明治23年（1890）～明治24年（1891）
5. 滝川地区―明治22年（1889）～明治27年（1894）
6. 美唄地区―明治24年（1891）～明治27年（1894）
7. 雨竜（滝川の北）地区―明治28年（1895）～明治29年（1896）
8. 上川地区―明治24年（1891）～明治26年（1893）
9. 常呂地区―明治30年（1897）～明治31年（1898）
10. 湧別（紋別，サロマ湖の西）地区―明治30年（1897）～明治31年（1898）
11. 天塩地区―明治32年（1899）

屯田兵は普通移民とちがい，各種の保護があったので，応募した人達の話では，現役期限（現役3年，予備役4年，後備役13年計20年となったが，明治36年―1903―兵役解除となり，翌37年に条令が廃止された）が済めて故郷を返し，解除後内地へ帰るつもりの者が多く，最初は土着した者は少なかった。また保護の反面，兵村全体が軍律下にあったため，種々の制限をうけ，不自由な面が多かった。創設の事情から察されるように，最初は士族のみに限られていた。明治23年に制度が改革され，平民にも入植の資格が与えられた。そして明治23年以

降は17～25才までの身体強壮なもので，兵員のほかに農耕に従事し得る者2名以上いることが資格とされた。満期は一般に現役8年，後備役12年，補充役10年とされていたが，数度にわたる改革によりまちまちとなった。

- 屯田兵村は一般に一個中隊200戸以上の戸数を収容するように敷地をきめたが，土地によりその条件を満足させることのできる者とそうでないものとがあり，集落は旭川の宇前の納内，滝川，美唄のように疎居に営まれたものもあったが一方，琴似，山鼻など，あるいは常呂地区の野付牛などの兵村では集居となったものもあった。琴似では村の中央部の狭い地域を限り，中央に幅10間の道路を十字形にとり，4つの地区に幅3間の道路で50間×30間の長方形を区切り，この長方形区内に町口10間，奥行15間，即ち1戸分150坪の敷地をとり，その区画内に兵屋10戸ずつをつくり，小市街のようにした。上川兵村では，間口30間，奥行150間の地割とし，この宅地を含む15町歩の給与地を1ブロックとし，残りの給与地と公有地とはその周辺に配された。一般に兵屋は間口5間奥行3間半，木造の平屋で本正葺屋根の中央に煙出しと称する高窓を設け，内部は6畳2室，4畳半1室，台所，土間があり，当初により建築，給与された。集居制をとったのは軍事的意義のため日常訓練のために1個中隊ぐらい緊密な団結をなす必要があったからであった。これらの村落では，やがて開拓が進み，農業に専念するようになると，耕地への通作の不便を痛感するようになり，兵屋を耕地の中に移転する者があらわれて来た。兵の義務を終わり軍事的束縛を解かれると，集団の結束の止むなきに至った。



屯田兵屋
（琴似，剣淵兵屋）
17坪5合
（公称坪数の倍大）

●屯田兵の入地すべき土地の選定
1. 国防上，重要な目的の1つで，輸送，宿営上，

NO 180

DATE

太田（釧路近郊）などの屯田はこの目的で。

2. 開拓上，将来開拓すべき地域の先駆地帯として，兵隊給民の兵役区をつくるため。

3. 農耕適地と地積。【中隊（凡そ200戸）を移住させるためには少くとも農耕適地 600万坪は必要であった。】

• 右新の屯田兵用地としては次のようなものがあった。

a. 給与地。明治23年以降1戸に付5町歩。

b. 公有地。兵村公有財産で1戸に付5町歩。

c. 練兵場。一兵村 約2万坪。

d. 官舎敷地　e. 本部敷地　f. 射的場　g. 墓地。

h. 道路敷地　i. 防風林　j. 番外地，兵村に必要な物品を販売する商人用。

• 屯田兵に対する扶助並びに給与。　イ. 土地。1戸に付5町，その他耕地5町，30年間免租。土地については30年間譲渡，質入等は禁じられていた。　ロ. 家屋 5間×3間半（17坪5合）1軒。　ハ. 支度料。1戸に付5円。旅費・日当1人に付30銭。運搬費1戸に付2円60銭　ニ. 扶助米。5年間，家族5人まで1人米が支給された。　ホ. 塩茶料。5年間，家族5人まで。　ヘ. 農具。鍬，鎌など。　ト. 家具，夜具，鍋，茶碗，鉄瓶など。　チ. 種物，麻，大麦，小麦，大豆，小豆，馬鈴薯。

兵村は中心の宅地の配置が一定の基準に従ったので，疎居列状集落をなし，一般の散村とは異なる配置秩序が今に残る。多くは平野内の交通要地を占めたので，開墾後に都市的発展をとげたものが多い。兵村は各種農作物，果樹などの実験農村の役割も演じたので，兵村崩壊後も農業に転進した後継者などにより，水稲・リンゴ・酪農などの先進地の栄を担った例も多い。屯田兵村の配置は札幌防衛の目的をもつ琴似の建設を最初とし，第1期は石狩平野に，第2期は沿岸の海港付近に，第3期は空知平野，上川盆地

× 明治22年に紀伊山地の十津川村に大災害（山崩れで谷止堰をとめて水没家屋が出た。）があり，被災集落の住民は集団で北海道に入植。

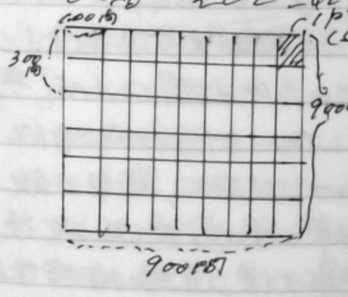
△ 植民地区画の策定に当り大きな影響を与えた人物に"佐藤昌介"（1856～　）がある。（アメリカのジョンズ・ホプキンス大に留学）札幌農学校の初代教頭となるクラークとの接点。後に北大の総長。

など…に進められた。各戸に割りあてられた耕地面積は時期により差はあるが，一村は200前後の戸数からなり，各戸は短冊型に仕切られた耕地の一端に位置し，道路を挟み，2列に並んだ。そして各村に本部，練兵場，学校などの共同施設を設けた。はじめはかなり家屋が接近してつくられたが，農業経営の自立を確保するため，各戸の耕地を1.5万坪（5ha）に拡張するようになると，地割が大きくなって，散村風になっていった。

• 明治19年に北海道庁が設置され，道内の開拓を強力に推進せしめることになり，開発は面目を一新することになった。明

△ 治21年（1888）植民地区画法の制定があり，翌22年には，全道の原野の植民地選定は終り，明治24年にはアメリカやカナダの植民に含まれた Township system に準拠した土地

× 区画制度が大規模に実施されるようになった。そして明治23年（1890）の新十津川（石狩川の近く，現在町制）村の入植を皮切りに，道庁の手によって全道に亘り実施された。900間四方の土地を大区画と定め，これを9等分して中区画とし，さらにその各の土地を小区画と定め，これを9等分して中区画とし，さらにその各の土地を小区画とした。そしてこれに農家1戸を配した。かくて各戸は100×150間（5ha）の農地の中に家屋を建てるので散村風となった。米国の Township 制に依るが，必ずしも東西南北の基準方向に従わず，その地形に応じてつくられた。基線とこれに交叉する基号線に平行して走る格子状の区画線には大道路が設けられ，散



在する農家300戸ないし500戸の農村を背景とし，集落雑地点に市街地が建設された。この市街地は散村における生活センターの機能をもったのであって，そこには役場，郵便局，学校，修理工場，小売商店，加工場などが置かれた。これらの中の鉄道の要衝や豊かな農産地を控えるようになったものの中には，後に内陸都

市として発展していったものもあった。江戸時代における城下町の根山（松前）や港町の江差，過渡官庁は別として，北海道の都市はいずれも明治以後に出現した。しかも当初から雄大な都市計画に従って建設されたもので，札幌はその典型であった。これが函館，地見などの奥地の都市には，ヨーロッパ風に対角線をとりいれられたり，四角な広場を設けたりしたものもあり，本州の都市と比べ異色がある。植民地区画法の区画は，たんに農地の区画だけでなく，農村計画を包含したものであり，一部落又は村を1つの区画とし，300戸ないし500戸に対する農地のほか，道路，排水渠敷地，中4間ないし10間の保有林（防風林，風致林，水源涵養林），学校敷地（3000坪），病院敷地（1500坪），神社・寺院敷地（各1000坪），公園・遊園地・墓地・火葬場・町村共有地（耕地30万坪），薪炭林・採草刈場（薪炭林は1戸当り2000坪，草刈場は5000坪），旧土人開墾地（1戸に付き15000坪）などであった。このようにして，制度的に散居せしめられ，整然とした土地所有は，個々の土地所有を熟知せしめ，土地境界に問題・争いがなく，かつ役畜や動力の使用に便宜なものであった。そしてこのような散村の中に市街地を統合300～1000戸，ただし1戸の間口6間，奥行14間，3.4坪以下の密集区域を予定した。また地域の自然条件を考慮し，一律に散居制をとったのではなく，台地で飲料水の取得困難な場合は水の湧出箇所に集め，天塩泥炭地のようなところでは，土地の改良，飲料水の便，道路維持など の見地から街村形態をとった。しかし，農業経営の必要上，結局，民家を耕地の中へ移すことになって，二次的な分散がみられることとなった。

• 一般に新開の北海道では，農業にきびしい気候条件が悪い関係から，1戸当りの耕地面積が大きいところにあっては，自家の耕地の

中に宅地を経営することが耕作に便利で，朝夕のすき間を利用して園芸の管理にあたることができ，宅地に制限をうけないため，小動物の飼養に容易であるばかりでなく，ことに畑作が多く，酪農経営の場合においては畜舎，サイロなどの建物，または運動場などを実情に応じ家屋の付近において適当な位置に設定し得るなどの大きな利便を有している。したがって新開農村にあっては農業生産上は散村を有利としたのであった。いわんやこの新植民社会を構成した移住者は各地より集まったもので，慣習，宗教，教養などの相違，あるいは郷里における人々が，かりに新天地を目指してとった行動力と決心とは相似たものがあっても，その動機にいたっては大きく異なり，ことを一丸として比較的に一定地域を限り，組織的な社会関係を結ぶことは至難のことであった。しかしこのような散居は，厳しい自然の北海道では種々の不便を来すことになった。児童の通学（冬にはとくにスキー），役場への距離，農事指導，保険，医療，共同作業，共同経営など，農家の団結，社会的経済的生活には種々の不便があった。しかも開発の進んだ北海道では，交通・通信が不便であり，物資の搬出や購入に多大の労資を要し，販売物の廉価，購買品の高価に悩まされた。しかも自給自足の生活が奨励されたが，こうした孤立的生活は地方開発とともに漸次許されなくなった。そして自給自足の困難な事情となることにより，散居の不便さが増大した。それで十勝の拓北部落（十勝国広尾郡大樹村拓北）などでは，昭和9年に入植したが，最初から集居として経営された。（拓植実習場の卒業生が経営したもの。）この拓北部落は散居と集居の関係を十分検討し，農業生産上便利な散居，社会生活上便利な集居の長所をとり，活動において20戸で1部落をつくり，宅地を比較的広くとり，耕作地は遠くて10町くらい，通耕しても大して苦労のないようにした。

NO 184

DATE

• 幕末期における北海道の田畑面積は，渡島地方に1000町歩程あったがけであったが，水田は300町歩に達した。封建社会以来の自給経済に基礎を置く農村が広く成立していたわけではなかったから，この地に移民が定住し，農家が本格的に成立するためには，生活資料の購入に必要な所得をあげる農業，即ち商品生産としての農業が成立できる条件の確立が必要であった。それはまず，農産物の市場の形成であり，また風土の相違に対応した農業技術の確立であった。明治初年から1880年代の後半にいたる時期は，日本の資本主義にとって本源的蓄積期であって産業資本は未成熟であり，交通機関は未発達であって，北海道の農産物が本土の市場と結ばれることは困難であった。そのため，開拓使は人為的に道内市場の造成に努め，明治5年(1872)以降農産物買上制度をとり，穀物，豆類や麻・なたね等の工芸作物を各地で買い上げ，また農産物加工場を経営した。官営加工場には，みそ・しょうゆ・ビール・ぶどう酒などの醸造のほか，製粉，製糸，製綱，製油，製革，製糖などがあった。風土に適する北方系の農業技術を導入するとともに近代的農業経営の確立をはかるため，外人顧問を招いたが，彼らは小麦を主要食糧作物とする畑作農業を確立し，輪作，有畜，機械化と伴う農法体系を導入することを主張した。かくてアメリカをはじめ各国から多種多様な種苗，家畜，農具が輸入された。大麦・小麦・とうもろこし・いんげん・えんどう・ばれいしょ・にんじん・キャベツ・大麻など，その他リンゴ・おうとう・西洋ナシ・ぶどうと若干の乳牛類が輸入され，役牛，乳牛，役畜，豚，めん羊などの家畜も導入された。これらの導入品種は，北海道の畑作畜産経営の基礎となっただけでなく，日本農業における商業的品種の源流ともなったものが少なくなかった。しかしこれらは，資金に恵まれ，組織的経営の行い得た士族移民団などに普及したが，一般の移民にとっては，経営耕地を狭く，

× 耐冷性水稲は赤毛の他黒毛，魁（さきがけ）など。明治の終りには坊主，5，6号などの育生があり，上川・空知の平野はこれで水稲作の安定をみた。

NO 185

DATE

家畜と合理的輪作をとり入れることは無理であった。

• 明治6年(1873)，篤農家中山久蔵によって石狩平地における稲作の技術的可能性が立証された。稲作に対する施策は，1890年代に積極化し，明治34年(1901)には稲の育種事業が試験機関で行われるようになった。とくに明治35年(1902)公布の北海道土功組合法は大地積の水田を造成する上で大きな役割を演じた。1880年代の石狩平野における稲作の成功は，札幌町豊平の中山久蔵によって発見された耐冷性品種「赤毛」に負うものであり，その本格的展開は早生品種「坊主」の普及と直播栽培の考案が重要であった。土功組合は北海道独特の制度で，灌漑水利を事業内容とする点では，村落の水利組合と変りないが，主として水田開発を目的として設立された公共団体であって，広大な未開地を水田化する上で大きな意義を有していた。設立総数258，昭和10年(1935)には全道水田の67%は土功組合によって灌漑されていた。国や道の保護助成は周到を極め，多額の投資が行われ，大正9年(1920)には8万haであった水田面積は昭和7年(1932)には20万haとなり，12年間に2倍半となった。明治末年に耕地面積60万町歩中水田は8%の5万町歩，大正末年には70万町歩中15万町歩で20%となり，網走地方も大正7(1918)年の冷害から大正14年(1925)には4500haを超え，十勝では600haから7000haに急増した。かくて明治初年には半島南部の一部にみられた水田は，明治35年頃(1902)には黒松内低地帯から石狩平野にはじまり，さらに中央盆地帯に進んだ。また明治の終りから大正にかけては十勝，日高方面へ，さらに網走方面へ，そして大正の終りから昭和の初めにかけ道北地方にも拡がった。道北の天塩川流域では特にたこつぼ灌漑を行って水田の造成を行い，収量を増し，稲作の安定化を図った。移住の最下位段丘上に大きさ1aくらいのたこつぼを掘り，移住上段より水田を

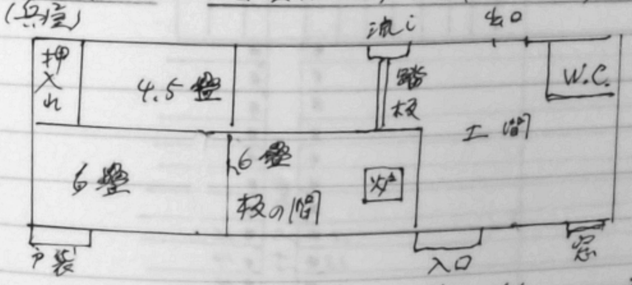
落して来た灌漑水を溜め，さらにポンプで最上位段丘の水田に汲みあげ，循環させることによって水温を高め，水の不足を補った。しかし美深の段丘上の右岩農場の水田にみる如く，冷害続きで放棄されてしまったところもあり，北限の水田耕作は困難が多い。しかし北海道の米作量は絶対面積が広いため，一時は新潟県を凌ぐ米作県となったことあり。（例えば1969年には北海道は289000haで，新潟県は205000haで，新潟県が8868000トンであるに対し，北海道は9373800トンであった。）

なお，北海道の農村には屯田兵を中心に防風林が走っていることで，特異な景観を呈している。特に国有防風林は総面積16,979ha，防霧林7,343haがある。私有防風林はカラマツなど一列か二列のものが多いが，国有のものは幅100mにも達するものあり，10里を超く。かなり伐採されている。

- 明治以後における日本の人口増加の地域的特性についてみると，明治23年（1890）から大正9年（1920）の30年間で，東京は115.3%，大阪は91.2%，神奈川県は76.8%，これに対し北海道は469.3%の増で特異である。減った県では富山4.0%，石川0.8%，滋賀3.9%などで，増加の少ないところでは福井0.7%，香川0.8%などで，特に北陸地方から北海道への移住者が多かった。
- 「士別屯田」，正式には屯田兵第3大隊第5中隊と工兵は剣淵の第3第4中隊と併せて大隊を編成した。明治8年，札幌に本部を置いた屯田兵は，石狩川に沿って北上し，明治24年以後，永山，東旭川，当麻屯田の設置により上川南部の開拓が進展した。明治27年に永山屯田が，また同32年に東旭川屯田が次々現役満期となったので，明治32年，第3大隊本部が永山から剣淵に移されることとなった。すでに明治29年，第7師団が設置され，32年より全道的に徴兵令が施行されたので，士別・剣淵屯田の目的は，国防よりは当時未開拓であった上川北部の

開拓の先駆たらしめんとする目的が主であったと考えられる。士別屯田は，天塩川と剣渕川に囲まれた土地に選定され，泥炭地と水利の不便に悩まされた剣渕屯田と比較すると，地の利を得ていた。現神社通り以北，国道の東側300間西側300間がいわゆる兵村で，ここに15×150間の第1給与地（7反5畝）が設けられた。兵村は15間ごとに家が立ち並んだが，極端な密集をさけず，大通り，東10戸，東20戸，西6号，西20戸と分散されていた。第2給与地（2反8畝10歩）は近隣の者10戸くらいが一団となって，抽せんにより番外地，兵村を除いた周囲に分配され，第3給与地（1町6反6畝20歩）は成墾順に第2給与地の地続きに与えられた。公有地は給与地の北部残余地と並びに南部残余地に設けられた。士別屯田の場合，中隊の規模が99戸と小さかったために，第2，第3給与地は兵屋より概ね1.2km以内にあり，1中隊169戸をもった剣渕兵村に比べ給与地までの交通は便利であった。兵員は連日，午前6時から翌朝までの猛訓練のために現役中は酒など飲むことができず，土地の開墾はすべて家族の手によって行われた。兵員は通常の訓練のほか，演習として道路開さく，灌漑溝掘さくに従事した。

（兵舎）

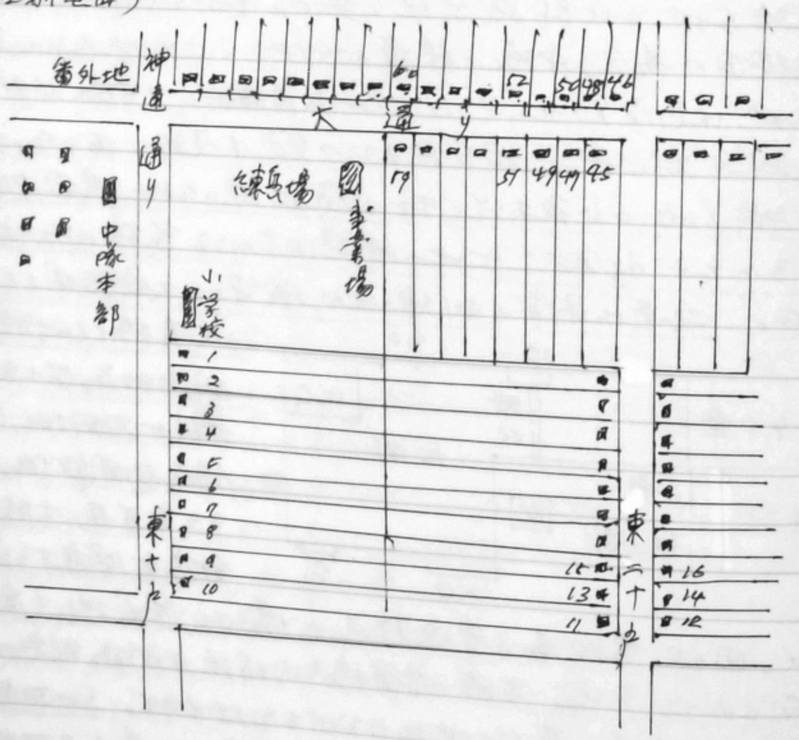


明治32年，下士別，上士別が区画され，普通移民に開放され，明治33年8月，士別まで鉄道が開通すると急激に1,200人，団体，農牧場の普通移民が増加し，番外地に商店街が形成されていった。当時の普通移民は，明治30年に制定された国有未開地処分法に基く土地払い下げをうけたもので，この制度による は原則として，1人5町歩，最大500町，牧畜地は最大833町歩で，10年間の年賦償還，一定期間後の検査を経て無償付与になるしくみで，10円を貸付け，

人戸民の増加をさることながら，大地積を有する小作制農場への道を開くことになった。現上士別を含む旧士別町の明治年間の戸口の増加は次のとおりであった。

明治32年	100戸	385人
〃 33〃	180	716
〃 35〃	787	2520
〃 37〃	1188	4400
〃 39〃	1739	6935
〃 41〃	2012	9790
〃 43年	2127戸	11769人

（士別市街）



NO 190

DATE


4 901480 071787
/-638-R MADE IN JAPAN


KOKUYO